

Oracle Enterprise Manager

構成ガイド

リリース 9.2

2002 年 12 月

部品番号 : J06322-02

ORACLE®

Oracle Enterprise Manager 構成ガイド, リリース 9.2

部品番号 : J06322-02

原本名 : Oracle Enterprise Manager Configuration Guide, Release 9.2.0.2

原本部品番号 : A96673-02

Copyright © 1996, 2002, Oracle Corporation. All Rights Reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしました、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
このマニュアルの構成	viii
ドキュメント	ix
関連文書	x
表記規則	xi

1 概要

製品アーキテクチャ	1-2
第1層：セントラル・コンソール	1-3
第2層：集中化した、スケーラブルで信頼性のある Oracle Management Server	1-4
第3層：管理対象ターゲットおよび自律型 Intelligent Agent	1-4
アーキテクチャの拡張性	1-4
配置オプション	1-5
クライアント / サーバー配置	1-6
3 層配置	1-7
動作保証	1-8
システムおよびハードウェアの要件	1-11
Oracle Enterprise Manager クライアント	1-11
Management Server、または Management Server と Enterprise Manager クライアント	1-12
Management Server、Enterprise Manager クライアント、HTTP Server、Intelligent Agent、 または Management Server と Enterprise Manager クライアント	1-13
Enterprise Manager Web Site	1-13
Java Runtime Environment (JRE)	1-14
バージョン互換性	1-14

2 スタンドアロン

コンソールをスタンドアロンで起動する選択	2-2
スタンドアロン・コンソールの起動	2-3
スタンドアロン・コンソールのツリーへのデータベースの追加	2-5
スタンドアロン・リポジトリ	2-6
スタンドアロン・リポジトリのデータベース要件	2-8
スタンドアロン・リポジトリの表領域の作成	2-9
スタンドアロン・リポジトリのデータベース・ユーザーの作成	2-11

3 Management Server の構成および管理

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動	3-2
リリース 9.x の新規リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成	3-3
ようこそ	3-3
構成操作	3-4
Oracle Management Server の構成	3-6
新規リポジトリ作成オプション	3-6
データベースの場所の選択	3-9
SID の変更	3-11
リポジトリのデータベースの選択	3-12
リポジトリへのログイン情報	3-13
リポジトリ・ユーザー表領域の選択	3-15
リポジトリ作成のサマリー	3-19
「Configuration Assistant の進行」ウィンドウ	3-19
既存リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成	3-20
構成操作	3-22
Oracle Management Server の構成	3-22
構成パラメータの編集	3-22
管理リージョンの選択	3-23
構成パラメータ・サマリー	3-26
リポジトリのアップグレード	3-26
Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止	3-27
リポジトリのバックアップ	3-27
Oracle Enterprise Manager 製品のアップグレードの調整	3-27
リポジトリ・アップグレードの Configuration Assistant の手順	3-28
既存リポジトリの削除	3-30

Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止	3-31
Configuration Assistant の起動	3-31
「構成操作」でのリポジトリの削除	3-31
削除するリポジトリのデータベースの選択	3-31
削除するリポジトリの選択	3-31
リポジトリの削除オプションの選択	3-32
リポジトリ削除のサマリー	3-32
リポジトリ削除の「Configuration Assistant の進行」	3-33
構成後の Management Server の管理	3-33
ローカル Management Server の起動	3-33
Management Server のステータスのチェック	3-35
ローカル Management Server の停止	3-37

4 Management Server への接続時のコンソールの構成

Management Server へのログインによるコンソールの起動の選択	4-2
Management Server 接続によるコンソールの起動	4-3
使用環境のノードの検出	4-5
管理者アカウントの作成	4-7
データベースの優先接続情報リストへの OEM_MONITOR ロールの付与	4-8
ジョブ・システムの有効化	4-9
Windows NT の新規ユーザー・アカウントの作成	4-10
既存の Windows NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て	4-10
Intelligent Agent ユーザーとしての Windows NT ドメイン・ユーザーの構成	4-11
電子メール・サーバーの構成	4-12
Enterprise Manager ポケットベル・サーバーの起動	4-12
Enterprise Manager ポケットベル・サーバーの構成	4-18
Enterprise Manager レポート作成の構成	4-21
コンソールから実行する手順	4-21
Management Server/HTTP Server マシンから実行する手順	4-22
Reporting Web サイトの URL へのアクセス	4-23
サービス可用性レポートの注意事項	4-24
ダイアルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成	4-24
Windows でのシステム色の使用	4-25
Enterprise Manager のデータベース管理領域へのアクセスのカスタマイズ	4-26
Oracle LogMiner Viewer の使用	4-27
Oracle Enterprise Manager コンソールの使用	4-27

別のアプリケーションとしての LogMiner Viewer の起動	4-27
--	------

5 Web ブラウザからの Enterprise Manager コンソールの実行

Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行	5-1
クライアント・インストール	5-2
サーバー側インストール	5-2
クライアントでのブラウザベースの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行	5-4
Web サーバーおよび Web サイトのディレクトリ・マッピングの構成	5-7
Apache 1.3.22	5-7
Internet Information Server (IIS)	5-8
Oracle9i Application Server	5-9

6 Oracle Management Server のチューニング

ping 間隔の設定	6-2
最大発信接続数の設定	6-2
最大着信接続数の設定	6-2
Management Server 再試行間隔の設定	6-3
一時的なネットワーク障害の回避	6-3

A ディレクトリ構造

重要なディレクトリ	A-2
\$ORACLE_HOME/sysman/ ディレクトリ	A-2

B ロギングおよびトレースのアクティビズム

Enterprise Manager クライアント・アプリケーションのロギングおよびトレース	B-2
トレースを即時に有効化	B-2
トレースを段階的に有効化	B-2
追加の Java のデバッグの実行	B-4
Management Server のロギングおよびトレース	B-4
イベント・ハンドラのロギングおよびトレース	B-6
動的 Web サイトのロギングおよびトレース	B-7
Oracle HTTP Server のロギングおよびトレース	B-7
JServ のロギングおよびトレース	B-8
動的 Web サイトのロギングおよびトレース	B-9

Oracle Intelligent Agent のロギングおよびトレース	B-9
ブラウザベースの Enterprise Manager のトレース	B-9
ポケットベル・サーバーのトレース	B-10
SQL エンジンのトレース	B-11
Management Pack アプリケーションのトレース	B-12
C 一般的なリポジトリのガイドライン	
リポジトリのサイズ設定	C-1
D グローバリゼーション・サポート	
リポジトリの設定	D-2
言語および NLS_LANG パラメータの設定	D-2
言語の設定	D-2
NLS_LANG の設定	D-3
英語以外の言語のブラウザベースの Enterprise Manager へのアクセス	D-3
別の言語の Enterprise Manager への直接アクセス	D-4
oem.conf ファイルの編集	D-4
優先する言語の設定の変更	D-4
E Windows 2000 での Enterprise Manager の使用	
Windows NT と Windows 2000 間の Enterprise Manager の使用における差異	E-2
手順	E-2
Windows 2000 のサービスの操作	E-2
Windows 2000 の新規ユーザーの作成	E-3
Windows 2000 ユーザーへの権限の割当て	E-3
F トラブルシューティング	
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告	F-2
マニュアル	F-2
オラクル社カスタマ・サポート・センター	F-2
Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング	F-3
Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー	F-3
リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない	F-5
リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ	F-8
omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更	F-9

Management Server のトラブルシューティング	F-10
Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合	F-11
Management Server が起動されない場合	F-11
Management Server 起動時のエラー・メッセージ	F-14
クライアント・アクセス用の Management Server の変更	F-14
複数のネットワーク・カードを搭載したマシンでの Management Server の実行	F-15
ポケットベル・サーバーのトラブルシューティング	F-15
Web ブラウザのトラブルシューティング	F-16
コンソールの停止	F-16
コンソールで Web ブラウザが起動しない場合	F-16
リポジトリ・ユーザーのパスワード変更	F-17
パスワードの再設定	F-17
日付書式の設定	F-17
レポート作成のトラブルシューティング	F-18
Web サーバーが構成解除されるというエラーが表示された場合	F-18
空白のページまたは内部サーバーのエラー	F-19

G キーボード・ナビゲーション

H リポジトリ・ビューの追加情報

操作システム・メトリック	H-2
ジョブ定義ビュー	H-3
イベント定義ビュー	H-3

索引

はじめに

『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』では、Oracle Enterprise Manager リリース 9.2.0 の構成方法について説明します。

Oracle Enterprise Manager は、異機種環境を管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。この製品は、グラフィカル・コンソール、エージェント、共通サービスおよびツールを組み合せて、Oracle 製品を管理する包括的な統合システム管理プラットフォームを提供します。

構成手順の完了後、Oracle Enterprise Manager の使用方法の詳細は、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager を使用するうえでのプログラムの更新および重要な注意については、Oracle Enterprise Manager のリリース・ノートを参照してください。

対象読者

このマニュアルは、Oracle Enterprise Manager を構成するデータベース管理者およびシステム管理者を対象としています。このマニュアルの読者は、Oracle および関連する管理作業を詳しく理解していることを前提としています。

Oracle9i の一般情報とその機能については、『Oracle9i データベース概要』を参照してください。データベース管理手順の詳細は、Oracle9i ドキュメント・セットを参照してください。Oracle9i ドキュメント・セットには、Oracle Enterprise Manager の各種ツールで実行できるデータベース管理作業についての具体的で詳細な説明が記載されています。また、Oracle9i ドキュメント・セットには、データベースの最適な管理方法についても記載されています。

読者は、使用している Windows または UNIX システムの操作についても詳しく精通している必要があります。必要に応じて、ご使用の Windows または UNIX システムのドキュメントを参照してください。

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章と付録で構成されています。

[第 1 章 「概要」](#)

この章では、Oracle Enterprise Manager 構成の概要について説明します。この章では、Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ、配置方法、動作保証およびシステムとハードウェアの要件について説明します。

[第 2 章 「スタンドアロン」](#)

この章では、コンソールをスタンドアロンで実行するための要件について説明します。

[第 3 章 「Management Server の構成および管理」](#)

この章では、Enterprise Manager フレームワーク全体（たとえば、コンソール、Management Server および Intelligent Agent）を配置する場合に、中間層の Management Server マシンで実行する必要がある追加の構成タスクについて説明します。

[第 4 章 「Management Server への接続時のコンソールの構成」](#)

この章では、中間層の Management Server への接続時の Enterprise Manager コンソールの構成方法を説明します。

[第 5 章 「Web ブラウザからの Enterprise Manager コンソールの実行」](#)

この章では、Web ブラウザを介した Enterprise Manager の実行に必要な追加のタスクを説明します。

[第 6 章 「Oracle Management Server のチューニング」](#)

この章では、Oracle Management Server のチューニングについて説明します。

付録 A 「ディレクトリ構造」

この付録では、Oracle Enterprise Manager リリース 9.x のディレクトリ構造について説明します。

付録 B 「ロギングおよびトレースのアクティブ化」

この付録では、Enterprise Manager のロギングおよびトレース用のパラメータの指定について説明します。

付録 C 「一般的なリポジトリのガイドライン」

この付録では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリに対して、記憶域要件とディスク領域割当てを決定する際のガイドラインについて説明します。

付録 D 「グローバリゼーション・サポート」

この付録では、Enterprise Manager が翻訳されている言語を記載します。

付録 E 「Windows 2000 での Enterprise Manager の使用」

この付録では、Windows NT と Windows 2000 間の、Enterprise Manager の使用における差異を説明します。

付録 F 「トラブルシューティング」

この付録では、考えられるトラブルシューティングの問題について説明します。

付録 G 「キーボード・ナビゲーション」

この付録では、標準的ではないキー操作を説明します。

付録 H 「リポジトリ・ビューの追加情報」

この付録では、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』には記載されていないリポジトリ・ビューまたは間違って記載されているリポジトリ・ビューについて説明します。

ドキュメント

Oracle Enterprise Manager リリース 9.2 のドキュメントには、次のドキュメントが含まれています。

- Oracle Enterprise Manager のリリース・ノートには、Oracle Enterprise Manager の更新に関する重要な注意とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いが記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』には、Oracle Enterprise Manager システムの構成に関する情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 概要』には、Enterprise Manager システムの概要が記載されています。

- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』には、Oracle Enterprise Manager システムのコンポーネントおよび機能が記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』には、Oracle Intelligent Agent の管理方法が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

Oracle Enterprise Manager ドキュメント・セットの他にも、Oracle Enterprise Manager では、各種コンポーネントの詳しいオンライン・ヘルプが提供されています。

リリース・ノートまたはインストール・マニュアルをダウンロードするには、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の次の URL を参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

関連文書

詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle9i データベース新機能』
- 『Oracle9i データベース概要』
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』
- 『SQL*Plus ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
- 『Oracle9i データベース・エラー・メッセージ』
- 『Oracle9i バックアップおよびリカバリ概要』
- 『Oracle9i Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』
- 『Oracle9i データベース・リファレンス』
- 『Oracle9i Recovery Manager クイック・リファレンス』
- 『Oracle9i Recovery Manager リファレンス』
- 『Oracle9i Recovery Manager ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle9i SQL リファレンス』

リリース・ノート、インストール・マニュアル、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連文書は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) に接続すれば、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。次の URL で登録できます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得済であれば、次の OTN-J Web サイトの文書セクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルのテキストおよびコード例に使用されている表記規則について説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 本文の表記規則
- コード例の表記規則
- Windows オペレーティング・システムの表記規則

本文の表記規則

本文中には、特別な用語が一目で分かるように、様々な表記規則が使用されています。次の表に、本文の表記規則と使用例を示します。

表記規則	意味	例
太字	太字は、テキスト内で定義されている用語、用語集に記載されている用語、または両方に該当する用語を示します。	この句を指定することにより、索引構成表が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システムによって指定される要素を示します。この要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージとメソッド、システム指定の列名、データベース・オブジェクトおよび構造体、ユーザー名およびロールが含まれます。	この句は、NUMBER 列にのみ指定可能です。 データベースをバックアップするには、BACKUP コマンドを使用します。 USER_TABLES データのディクショナリ・ビューの TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

表記規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	<p>固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザー定義要素のサンプルを示します。これらの要素には、コンピュータ名、データベース名、ネット・サービス名および接続識別子、さらにユーザー指定のデータベース・オブジェクトおよび構造体、列名、パッケージおよびクラス、ユーザー名およびロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値が含まれます。</p> <p>注意: プログラム要素の中には、大文字と小文字が混在して使用されているものもあります。これらの要素については、表示されているとおりに入力してください。</p>	<p>sqlplus と入力し、SQL*Plus を開きます。</p> <p>パスワードは、orapwd ファイルに指定されています。</p> <p>データ・ファイルおよび制御ファイルを /disk1/oracle/dbs ディレクトリにバックアップします。</p> <p>department_id、department_name および location_id 列は、hr.departments 表内に存在します。</p> <p>QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。</p> <p>oe ユーザーで接続します。</p> <p>JRepUtil クラスによってこれらのメソッドが実装されます。</p> <p>parallel_clause を指定できます。</p> <p>Old_release.SQL を実行します。</p> <p>old_release は、アップグレード前にインストール済のリリースを示します。</p>
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	

コード例の表記規則

コード例では、SQL、PL/SQL、SQL*Plus またはその他のコマンドライン構文が示されます。この中では、次の例のように、固定幅フォントが使用され、通常の本文とは区別して表示されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例に使用される表記規則と使用例を示します。

表記規則	意味	例
[]	大カッコはオプションの項目を示します。 大カッコ自体は入力しないでください。	DECIMAL (digits [, precision])
{}	中カッコは、カッコ内の項目のうちの 1 つを指定する必要があることを示します。中カッコ自体は入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}

表記規則	意味	例
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の選択肢を示します。これらのオプションのうちの1つを入力します。縦線自体は入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のどちらかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ コード中で、例に直接関係のない部分が省略されていること。 ■ コードの一部が繰返し可能であること。 	CREATE TABLE ...AS <i>subquery</i> ; SELECT <i>col1, col2, ..., coln</i> FROM employees;
.	縦方向の省略記号は、コード中で、例に直接関係のない行が何行か省略されていることを示します。	
その他の表記	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、表示されているとおりに入力してください。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体のテキストは、特定の値を指定する必要のあるプレースホルダまたは変数を示します。	CONNECT SYSTEM/ <i>system_password</i> DB_NAME = <i>database_name</i>
大文字	大文字で表記されている部分は、システムによって指定される要素を示します。ユーザーが定義する用語と区別するために、これらの用語は大文字で表記されます。用語が大カッコで囲まれている場合を除いて、表示されている順序およびスペルのとおりに入力します。ただし、これらの用語には大 / 小文字の区別がないため、小文字で入力してもかまいません。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字で表記されている部分は、ユーザーが指定するプログラム要素を示します。たとえば、表、列またはファイルの名前を示します。 注意: プログラム要素の中には、大文字と小文字が混在して使用されているものもあります。これらの要素については、表示されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

Windows オペレーティング・システムの表記規則

次の表に、Windows オペレーティング・システムに関する表記規則と使用例を示します。

表記規則	意味	例
「スタート」>	プログラムの起動方法を示します。	Oracle Database Configuration Assistant を起動するには、「スタート」>「プログラム」>「Oracle - HOME_NAME」>「Configuration and Migration Tools」>「Database Configuration Assistant」の順に選択します。
ファイル名および ディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名では、大文字と小文字を区別しません。また、特殊文字のうち、左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 ("")、スラッシュ (/)、パイプ () およびダッシュ (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素の区切り文字として扱われます。ファイル名が ¥\$ で始まる場合、Windows では汎用命名規則に従った名前であるとみなされます。	c:\$winnt"\$system32 と c:\$WINNT\$SYSTEM32 は、同じように解釈されます。
C:\$>	現在のハード・ディスク・ドライブを表す Windows のコマンド・プロンプトを示します。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。表示されるプロンプトは、作業中のサブディレクトリを表します。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。	C:\$oracle\$oradata>
	Windows のコマンド・プロンプトで二重引用符 ("") を使用するときには、円記号 (¥) をエスケープ文字として付ける必要がある場合があります。カッコおよび一重引用符 (') の場合には、エスケープ文字を付ける必要はありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、ご使用の Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:\$>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=\$"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600\$" C:\$>imp SYSTEM\$password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホーム名を示します。ホーム名は、最大 16 文字の英数字で指定できます。ホーム名に使用できる特殊文字はアンダースコアのみです。	C:\$> net start OracleHOME_ NAMETNSListener

表記規則	意味	例
<i>ORACLE_HOME</i> および <i>ORACLE_BASE</i>	<p>Oracle8 リリース 8.0 以下の製品では、Oracle のコンポーネントをインストールすると、最上位の <i>ORACLE_HOME</i> ディレクトリの下に、すべてのサブディレクトリが配置されます。このディレクトリには、デフォルトで次のいずれかの名前が使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ C:\\$orant (Windows NT の場合) ■ C:\\$orawin98 (Windows 98 の場合) <p>このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。すべてのサブディレクトリが最上位の <i>ORACLE_HOME</i> ディレクトリの下にあるとはかぎりません。<i>ORACLE_BASE</i> と呼ばれる最上位ディレクトリがあり、デフォルトでは C:\\$oracle になります。</p> <p>Oracle ソフトウェアが 1 つもインストールされていないコンピュータに Oracle9i リリース 1 (9.0.1) をインストールすると、初めて作成される Oracle ホーム・ディレクトリのデフォルト設定は C:\\$oracle\\$ora90 になります。Oracle ホーム・ディレクトリは、<i>ORACLE_BASE</i> の直下にあります。</p> <p>このマニュアルの中で例として使用されているディレクトリ・パスは、OFA の規則に準拠しています。</p>	% <i>ORACLE_HOME</i> %rdbms\\$admin ディレクトリに移動します。

1

概要

この章では、Oracle Enterprise Manager および個別にライセンスを取得できる Management Pack の配布に関する主要概念および要件について説明します。

- 製品アーキテクチャ
- 配置オプション
- 動作保証
- システムおよびハードウェアの要件
- バージョン互換性

製品アーキテクチャ

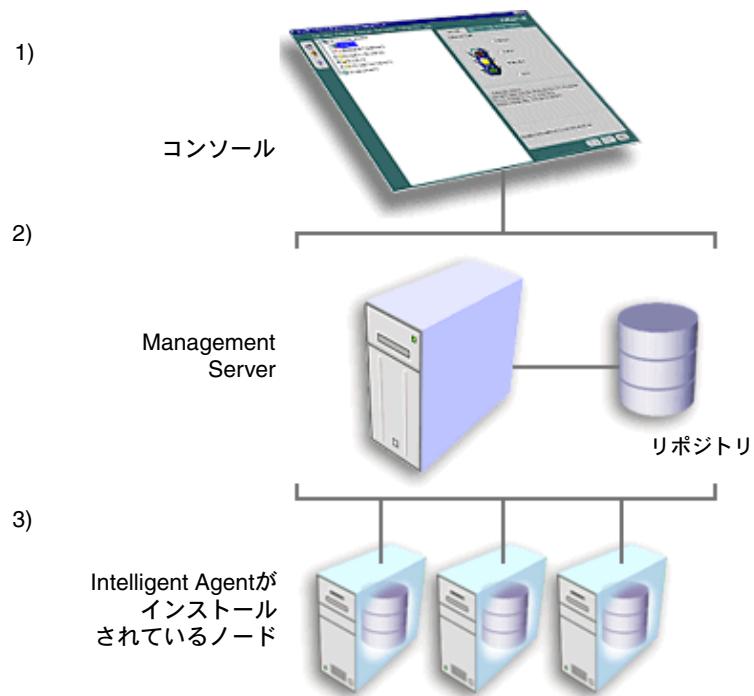
Oracle Enterprise Manager は、グローバル・エンタープライズを管理および監視する、Oracle の 1 つの統合ソリューションです。Enterprise Manager は、軽量な 3 層アーキテクチャに基づいており、柔軟な配置オプション、24 時間稼働の信頼性および他にはない拡張性を提供します。

製品の 3 層アーキテクチャは、次のものから構成されています。

- コンソール（統合アプリケーションおよび Management Pack）
- Management Server およびデータベース・リポジトリ
- Intelligent Agent

Enterprise Manager フレームワークの基礎となるこのアーキテクチャの詳細は、後述の項で説明します。

図 1-1 3 層アーキテクチャ



第1層：セントラル・コンソール

第1層の Enterprise Manager クライアントの主要目的は、管理者にすべての管理作業用のユーザー・インターフェースを表示することです。

インストールおよびライセンスを取得したものに応じて、第1層クライアントは次のコンポーネントで構成されます。

- コンソール

注意： リリース 9.0 から、Oracle DBA Studio の機能がコンソールに完全に統合されました。

- 統合管理アプリケーションには、Oracle Forms Server Manager、Oracle Policy Manager、Oracle Directory Manager、Oracle Net Manager、Oracle Spatial Index Advisor、Oracle Data Guard Manager、Oracle LogMiner Viewer、Oracle Enterprise Security Manager および Oracle Text Manager が含まれます。
- Management Pack それぞれに、列記したアプリケーションが含まれます。
 - Oracle Diagnostics Pack には、Oracle Performance Manager、Oracle Capacity Planner、Oracle TopSessions および Oracle Trace が含まれます。
 - Oracle Tuning Pack には、Oracle Expert、Oracle 索引チューニング・ウィザード、Oracle SQL Analyze、Oracle Tablespace Map、Reorg Wizard、Outline Editor および Outline Management が含まれます。
 - Oracle Change Management Pack には、Oracle Change Manager が含まれます。
 - Oracle Standard Management Pack には、Oracle Performance Manager、Oracle 索引チューニング・ウィザード、Oracle Create Baseline、Oracle データベース・オブジェクトの比較、および Oracle Advanced Database and Node Events が含まれます。
 - Oracle Management Pack for Oracle Applications には、Oracle Performance Manager、Oracle Capacity Planner、Concurrent Processing Tuning Assistant および Oracle Applications Advanced Events が含まれます。
 - Oracle Management Pack for SAP R/3 には、Oracle Performance Manager、Oracle Capacity Planner および Oracle Advanced Events が含まれます。

注意： Oracle Management Pack for SAP R/3 は、CD パックの CD-ROM に収録されています。これはデータベースと一緒にインストールされません。

Oracle Enterprise Manager コンソールは、Oracle データベース・サーバーを簡単に管理できるように設計されているほか、このデータベースをサポートするネットワーク・コンポーネント、ソフトウェアおよびハードウェアを簡単に管理できるように設計されています。

第1層のコンソールおよびアプリケーションは、大部分のアプリケーション・ロジック用の第2層の Management Server を通じて実行しているため、重要な管理サービスを格納するオーバーヘッドおよび処理負荷なしに実行できます。

第2層：集中化した、スケーラブルで信頼性のある Oracle Management Server

Oracle Enterprise Manager の第2層コンポーネントである Management Server は、フレームワーク・エンジンです。Management Server は、集中化されたインテリジェント機能、およびクライアントと管理対象ノード間の制御の分散を維持します。事業のメンテナンス用のバックエンド・アプリケーション・ロジックおよび重要なサービスを実行します。重要なサービスには、イベント・システム、ポケットベル、電子メール通知、レポート作成、ジョブ・システムなどが含まれます。

この中間層では、第1層クライアントからのリクエストを処理し、データベース・リポジトリに情報を格納して、第3層の Intelligent Agent を実行するタスクを配布します。

リポジトリは、システム・データ、アプリケーション・データおよび環境全体に配置された管理対象ターゲットの状態を保持するバックエンドの永続格納場所としても機能します。リポジトリに格納されるデータは、1つのリポジトリに接続する1つ以上の Management Server にアクセスする複数の管理者間で共有できます。

第3層：管理対象ターゲットおよび自律型 Intelligent Agent

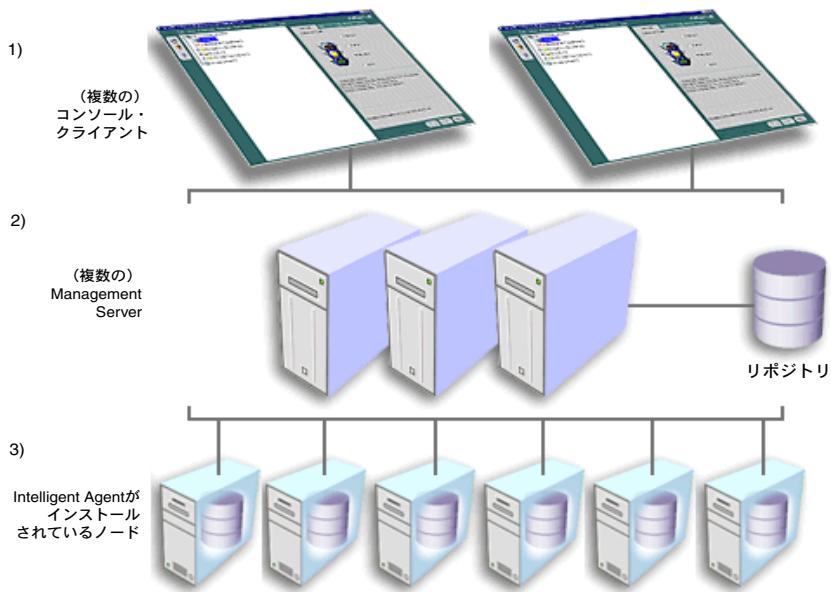
Enterprise Manager フレームワークの第3層は、管理対象ターゲットおよび Intelligent Agent で構成されています。管理対象ターゲット（ノード、データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）で、Management Server で指定されたタスクを実行するには、Intelligent Agent が必要です。タスクが割り当てられると、自律型 Intelligent Agent により、管理対象ターゲット、Management Server またはクライアントの状態に関係なく、スケジュールどおりに作業が実行されます。このようなタスクの例として、SQL スクリプトの実行、表領域の使用可能な領域の監視、毎週のデータベース・バックアップの実行、リアルタイム・データベース物理 I/O 率の監視、またはアプリケーション・サーバーの可用性の監視があげられます。

アーキテクチャの拡張性

重要なフレームワーク機能を提供するために、Enterprise Manager アーキテクチャを、各層で容易に拡張できます。第1層により、複数のクライアントが第2層の1つ以上の Management Server にアクセスできます。Management Server を追加することにより、拡張性および信頼性が増加し、Management Server と1つのリポジトリのグループ化、またはリポジトリを持つ小さなセットへの Management Server の分割の選択肢が増えます。前の構

成では、すべての管理者が 1 つのリポジトリに含まれるデータを共有でき、後の構成は、相互に作用しない自律型ユニットを提供します。最後に、第 3 層の管理対象サービスおよび Intelligent Agent 数は、業務の要求に応じて増加させることができます。

図 1-2 アーキテクチャの拡張性

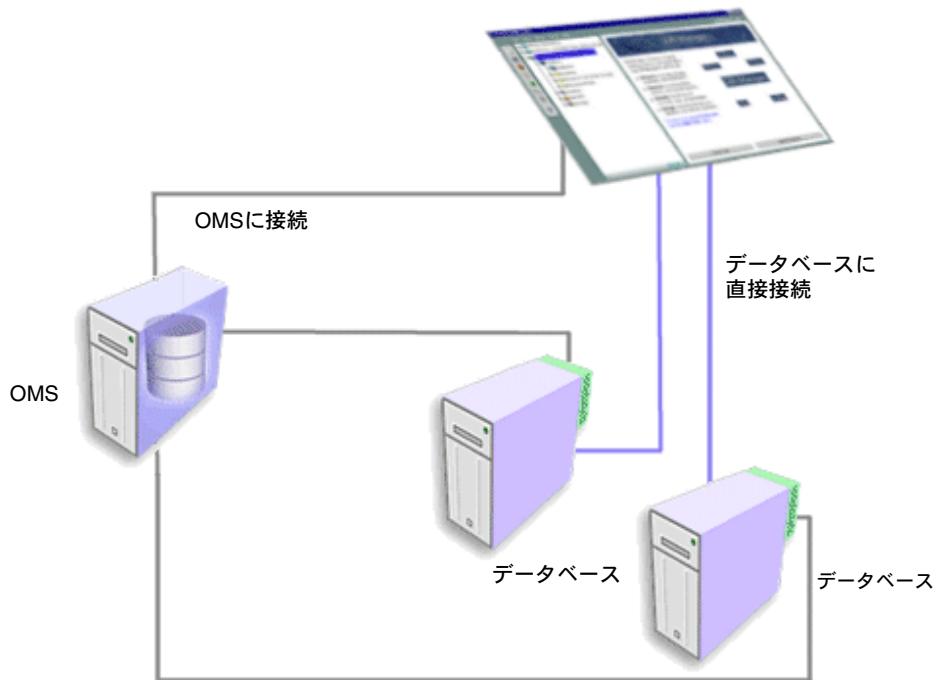


Enterprise Manager アーキテクチャの 3 層すべてで、強力な Enterprise Manager フレームワークの基礎を構築します。

配置オプション

Enterprise Manager の 3 層アーキテクチャでは、最高レベルの信頼性および拡張性が提供されます。ただし、すべての企業で Enterprise Manager を 3 層のシステムとして実装する必要はありません。つまり、すべての業務で 3 層それぞれを配置する必要も、すべての会社で別々のマシンに各層を配置する必要もありません。Enterprise Manager のアーキテクチャの柔軟性により、多くの配置オプションを使用できます。

図 1-3 配置オプション



環境を分析し、一般的な管理ニーズを判断して慎重に計画をたてることで、事業に最適な配置オプションの効果的な選択ができます。

この項では、使用可能な配置オプションについて説明します。

クライアント / サーバー配置

クライアント / サーバー配置では、コンソールおよび管理アプリケーションのみが配置されます。中間層の Management Server および Intelligent Agent はインストールおよび使用されません。このスタンドアロン構成では、クライアントは直接管理対象ターゲットに接続し、管理タスクを実行します。

次の条件の場合、このタイプの配置モデルを使用する必要があります。

- Oracle データベースのみを管理する必要がある場合。
- 複数の管理者間で、管理データを共有する必要がない場合。

- 潜在的な問題の通知を事前に行う必要がない場合。
- 繰り返される管理タスクを自動化する必要がない場合。
- Web ブラウザ内からクライアントを実行する必要がない場合。

3 層配置

3 層配置では、Enterprise Manager フレームワーク全体（コンソール、Management Server とリポジトリ、および Intelligent Agent）のインストールおよび構成が行われます。

次の機能を必要とする場合、このタイプの配置モデルを使用する必要があります。

- 異なるいくつかのターゲット・タイプ（たとえば、データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）の管理
- 複数の管理者間での管理データの共有
- 潜在的な問題の事前の通知
- 繰り返される管理タスクの自動化
- Web ブラウザ内からのクライアントの実行

Enterprise Manager の 3 層配置で最適なパフォーマンスを得るには、次のガイドラインに従ってください。

- Management Server マシンを、長期間 CPU または RAM 不足で実行しないでください。このようなリソース不足を回避する適切な方法は、Management Server を Management Server またはデータベース・リポジトリ、あるいはその両方専用のマシンで実行することです。したがって、アプリケーションを同時に実行することで起こる競合は、要因ではありません。
- ほとんどの Enterprise Manager 管理者が接続する LAN に、Management Server をインストールします。ただし、パフォーマンスに大きな影響を与える過剰なネットワーク通信量が発生する場合があります。
- 最大 400 ターゲットを含む企業内の連結した 70 すべての管理対象ノードに Management Server をインストールします。この推奨事項は、Management Server が 1-11 ページで示された推奨ハードウェア要件を満たすマシンにある場合に、適用可能です。1 つの Management Server が管理できるノードおよびターゲット数は、Management Server を実行するマシンのタイプに応じて変更できます。たとえば、Management Server がインストールされたマシンが指定のハードウェア要件を上回る場合、推奨管理対象ノードおよびターゲット数が増加します。
- Management Server 間のフォルト・トレラントおよびロード・バランスを確保するには、少なくとも 2 つの Management Server を配置します。

- 広範囲なグローバル配置、または一連の WAN および LAN にわたる配置に対する管理リージョンを定義します。管理リージョンにより、リージョン間またはネットワーク間通信が発生しなくなります。また、管理リージョンより、ファイアウォール境界を越えたノードのマッピングが可能になります。

注意: Enterprise Manager リリース 9.x で導入された機能、管理リージョン定義の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

管理リージョンのリポジトリ・ビューの詳細は、[付録 H 「リポジトリ・ビューの追加情報」](#) を参照してください。

動作保証

選択した配置方法に関係なく、次のオペレーティング・システムの動作保証は、Oracle Enterprise Manager リリース 9.2.0 の各種コンポーネントに適用されます。

表 1-1 オペレーティング・システム・サポート

コンソール	統合アプリケーション ¹	Management Pack ²	Management Pack for SAP R/3 ³	Thin Client	Management Server	Intelligent Agent ⁵	ポートケル・サー	Web サイト ⁷
Windows NT 4.0 Service Pack 6a	x	x	x	x	x	x	x	x
-Workstation								
- Server								
- Terminal Server								
Windows NT 4.0 Service Pack 6a Active Directory							x	

表 1-1 オペレーティング・システム・サポート（続き）

	コンソール	統合アプリケーション ¹	Management Pack ²	Management Pack for SAP R/3 ³	Thin クラウドアント ^{4、7}	Management Server	Intelligent Agent ⁵	ポケットトベル・サーバー	Web サイト ⁷
Windows 2000 Service Pack 2 ⁶	x	x	x	x	x	x	x	x	x
- Professional Edition									
- Server									
- Advanced Server									
- Terminal Service									
Windows 2000 Service Pack 2 Active Directory								x	
Windows XP	x	x	x	x	x	x	x	x	
- Professional									
Windows 98	x	x	x	x	x	x			
- Second Edition									
Solaris 32 ビット	x	x	x			x	x	x	x
- 2.8									
- 2.7									
- 2.6									
Solaris 64 ビット	x	x	x			x	x	x	x
- 2.8									
HP/UX 64 ビット	x	x	x			x	x	x	x
-11.0									

表 1-1 オペレーティング・システム・サポート（続き）

コンソール	統合アプリケーション ¹	Management Pack ²	Management Pack for SAP R/3 ³	Thin クライアント ^{4、7}	Management Server	Intelligent Agent ⁵	ポケットトベル・サー	Web サイト ⁷
IBM AIX 64 ビット - 4.3.3、5.1	x	x	x		x	x		x
HP Tru64 - 5.1 & 5.1a	x	x	x		x	x		x
Intel Linux 32 ビット - SuSE SLES7 Kernel 2.4.7、 glibc 2.2.2 - RedHat Advanced Server 2.1、 Kernel 2.4.9、 glibc 2.2.4-25	x	x	x		x	x		x

¹ リリース 9.x の統合アプリケーションには、Oracle Forms Server Manager、Oracle Policy Manager、OLAP Services、Oracle Cube Viewer および Oracle Directory Manager が含まれます。

² Management Pack には、Diagnostics Pack、Tuning Pack、Change Management Pack および Management Pack for Oracle Applications が含まれます。Management Pack のコンポーネントのうち、Diagnostics Pack の Trace、および Tuning Pack の SQL Analyze、Expert、索引チューニング・ウィザードは、UNIX プラットフォームでは使用できません。

³ Management Pack for SAP R/3 リリース 9.2 はリリースされていません。

⁴ Thin ブラウザ・クライアントには、Enterprise Manager、Enterprise Security Manager、すべての Change Management Pack、Diagnostics Pack の Performance Manager、Lock Monitor、Performance Overview、Top SQL、Top Sessions、および Tuning Pack の Tablespace Map、Reorg Wizard、Outline Manager、Graphical Explain Plan が含まれます。

⁵ Intelligent Agent は、RDBMS と同じオペレーティング・システムで実行します。また、Intelligent Agent は、Windows 2000 および Windows NT に付属する Active Directory で動作保証されています。

⁶ Windows 2000 Datacenter は、Enterprise Manager リリース 9.x コンポーネントで動作保証およびサポートされていないオペレーティング・システムです。

⁷ ブラウザから Enterprise Manager の実行を選択した場合、次の動作保証も適用されます。

- Oracle HTTP Server 1.3.22.0.0a (Sun SPARC Solaris、Intel Solaris、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、HP-UX、IBM AIX、HP Tru64 および Linux)。Oracle HTTP Server は事前に構成されているデフォルトの Web サーバーで、Enterprise Manager Web Site にバンドルされています。
- Oracle9i Application Server 1.0.2.2.2 (Sun SPARC Solaris、Windows NT および Windows 2000)
- Apache 1.3.22 (Sun SPARC Solaris、Windows NT および Windows 2000)
- Microsoft Internet Information Server 4.0 (Windows NT)
- Microsoft Internet Information Server 5.0 (Windows 2000)

注意： プラットフォーム固有の詳細情報は、指定のプラットフォームのリリース・ノートを参照してください。

システムおよびハードウェアの要件

Enterprise Manager の配置方法を決定し、動作保証を確認した後、インストールおよび構成の前に次のシステムおよびハードウェア要件が満たされているか確認します。

注意： FAT Windows ベースのオペレーティング・システムにおけるハード・ディスク領域の要件は、最大で値の 4 倍必要になります。

他のプラットフォーム (HP-UX など) のハードウェア要件およびシステム要件は、各プラットフォームのインストレーション・ガイドを参照してください。

Oracle Enterprise Manager クライアント

次に、Enterprise Manager クライアント (コンソール、Management Pack および統合アプリケーション) のみを実行するマシンの要件を示します。

表 1-2 コンソール、Management Pack、統合アプリケーション

	最小	推奨
ハード・ディスクの空き容量	135MB	N/A
プロセッサおよび RAM	Pentium 166MHz、RAM 128MB または SPARC 20 166 MHz、RAM 128MB	Pentium 266 MHz、RAM 256MB または SPARC Ultra 1 266 MHz、RAM 128MB

注意： 前述の表のプロセッサおよび RAM の要件は、インストールされた Enterprise Manager クライアントと Web ベースの Thin クライアントの両方に適応します。

Management Server、または Management Server と Enterprise Manager クライアント

次に、Management Server のみを実行するマシン、または Enterprise Manager クライアントと Oracle Management Server を実行するマシンの要件を示します。

表 1-3 Management Server、または Management Server と Enterprise Manager クライアント

	最小	推奨
ハード・ディスクの空き容量	115MB	N/A
プロセッサおよび RAM	Pentium 266 MHz、RAM 128MB または SPARC Ultra 1 266 MHz、RAM 128MB	Pentium 300 MHz、RAM 256MB または SPARC Ultra 1 300 MHz、RAM 256MB

注意： 前述の表の情報は、データベース・リポジトリには適用されません。 Oracle データベース固有のシステム要件およびハードウェア要件については、データベースのドキュメントを参照してください。

Management Server、Enterprise Manager クライアント、HTTP Server、Intelligent Agent、または Management Server と Enterprise Manager クライアント

次に、Management Server リリース 9.2、Enterprise Manager クライアント リリース 9.2、Oracle HTTP Server および Oracle Intelligent Agent リリース 9.2 を実行するマシン、または Oracle Management Server と Enterprise Manager クライアントを実行するマシンの要件を示します。

表 1-4 Management Server、または Management Server と Enterprise Manager クライアント

	最小	推奨
ハード・ディスクの空き容量	115MB	N/A
プロセッサおよび RAM	Pentium II 866 MHz、RAM 256MB または SPARC Ultra 1 266 MHz、RAM 128MB	Pentium III 1GHz、RAM 512MB または SPARC Ultra 1 300 MHz、RAM 256MB

注意： 前述の表の情報は、データベース・リポジトリには適用されません。Oracle データベース固有のシステム要件およびハードウェア要件については、データベースのドキュメントを参照してください。

Enterprise Manager Web Site

次に、Enterprise Manager Web Site（構成済の Oracle HTTP Server を含む）のみを実行するマシンの要件を示します。

表 1-5 Enterprise Manager Web Site

	最小	推奨
ハード・ディスクの空き容量	275MB	N/A
プロセッサおよび RAM	Web サーバーによって異なる	Web サーバーによって異なる

Java Runtime Environment (JRE)

Enterprise Manager は、次のバージョンの Java Runtime Environment (JRE) での動作が保証されています。

- JRE リリース 1.1.8_12 (Sun SPARC Solaris)
- JRE リリース 1.1.8.16o (Windows NT)

バージョン互換性

次に、様々な Enterprise Manager コンポーネント間のバージョン互換性を示します。

表 1-6 Enterprise Manager - Intelligent Agent - データベース互換性マトリクス

Enterprise Manager の リリース番号	リポジトリの作成がサポートされる データベースのリリース番号	サポートする Intelligent Agent のリリース番号	管理するデータベース のリリース番号
9.2.0	9.2.x	9.2.x	9.2.x
	9.0.1.x	9.0.1.x	9.0.1.x
	8.1.7.x	8.1.7.x	8.1.7.x
9.0.1	9.0.1.x	9.0.1.x	9.0.1.x
	8.1.7.x (注意 1 と注意 2 を参照)	8.1.7.x	8.1.7.x
	8.1.6.x (注意 1 と注意 2 を参照)	8.1.6.x	8.1.6.x
	8.0.6.x	8.0.6.x	8.0.6.x
2.2.x	8.1.7.x	8.1.7.x	8.1.7.x
	8.1.6.x	8.1.6.x	8.1.6.x
	8.0.6.x	8.1.5.x	8.1.5.x
	7.3.4.x	8.0.6.x	8.0.6.x
		7.3.4.x	7.3.4.x
2.1.x	8.1.6.x	8.1.6.x	8.1.6.x
	8.1.5.x	8.1.5.x	8.1.5.x
	8.0.6.x	8.0.x	8.0.x
	8.0.5.x	7.3.4.x	7.3.4.x
	8.0.4.x		
	7.3.4.x		

表 1-6 Enterprise Manager - Intelligent Agent - データベース互換性マトリクス（続き）

Enterprise Manager の リリース番号	リポジトリの作成がサポートされる データベースのリリース番号	サポートする Intelligent Agent のリリース番号	管理するデータベース のリリース番号
2.0.x	8.1.5.x	8.1.5.x	8.1.5
	8.0.5.x	8.0.6.x	8.0.x
	8.0.4.x	8.0.5.x	7.3.x
	7.3.x	7.3.4.x	
1.6.5.x	8.0.6.x	8.0.6.x	8.0.6
	8.0.5.x	8.0.5.x	8.0.5.x
	7.3.4.x	7.3.4.x	8.0.4.x
			8.0.3.x
			7.3.x

リポジトリを作成する場合は、常に使用可能な（つまり、他の管理者によって停止されることも、稼働するマシン上でリソースが競合することもない）データベースを選択する必要があります。さらに、Enterprise Manager リリース 9.x のリポジトリは、次の Oracle データベース・リリースに存在することが保証されています（[注意 1](#) を参照）。

- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 9.2.x
- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 9.0.1.x
- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 8.1.7.x（[注意 1](#) と [注意 2](#) 参照）

注意 1 データベース・リリース 8.1.7.0 または 8.1.7.1 に 9.2 のリポジトリが存在する場合は、そのデータベースの Bug#1393049 に注意してください。この不具合は、一部の SQL 問合せで不適切な結果を返し、様々な点で Enterprise Manager に影響を与えることがあります。

たとえば、前述のデータベースの不具合自体が、履歴内の不適切なイベントまたはジョブ・リスト、不適切なイベント・アラート・リスト、不適切なアクティブ・ジョブ・リスト、送信された無効な通知およびその他を通して、Enterprise Manager によって明示されます。

この問題を修正するには、次の表を参照してください。

表1-7 リポジトリの修正

リポジトリが存在するデータベース・リリース	問題を修正する方法
すべてのオペレーティング・システム用 8.1.7.0	データベースを 8.1.7.2 にアップグレードする
すべてのオペレーティング・システム用 8.1.7.1	データベースを 8.1.7.2 にアップグレードする または Bug#1765292 用の one-off パッチを適用する

データベースに関するこれらの未知の問題を完全に回避するには、Enterprise Edition または Standard Edition リリース 9.2、Enterprise Edition または Standard Edition リリース 9.0.1、Enterprise Edition または Standard Edition リリース 8.1.7.2 か 8.1.7.1（Sun SPARC Solaris のみ）にリポジトリを作成することをお薦めします。

注意 2 リポジトリが任意のオペレーティング・システムのデータベース・リリース 8.1.7.x に存在する場合は、Bug#1733170 用のパッチを適用することをお薦めします。このパッチを適用しないと、セグメンテーションの違反のために Management Server の障害が断続的に生じことがあります。

2

スタンドアロン

リリース 9.0 以降では、Enterprise Manager コンソールまたはその他の様々な Enterprise Manager アプリケーションは、スタンドアロンまたは Management Server 接続で起動できます。Enterprise Manager コンソールまたはその他のアプリケーションをスタンドアロンで起動すると、コンソールまたはその他のアプリケーションは Management Server の中間層に接続されません。

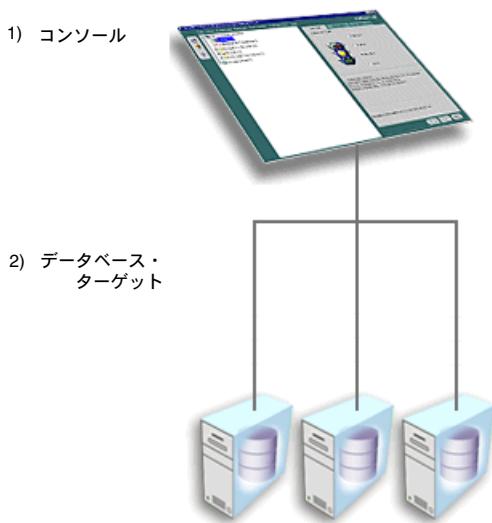
ターゲット・マシンでは中間層の Management Server または Intelligent Agent が必要ないため、コンソールをスタンドアロンで起動すると、1人の管理者がターゲット・データベースに直接接続して、簡単なデータベース・スキーマ、インスタンス、記憶域、セキュリティおよびその他のデータベース・タスクを実行できます。

この章では、コンソールをスタンドアロンで実行するための要件について説明します。

コンソールをスタンドアロンで起動する選択

管理対象ターゲットに直接接続し、管理タスクを実行する場合、スタンドアロンでコンソールを起動します。Enterprise Manager リリース 9.2.0 では、スタンドアロン・コンソールでサポートされているのは、データベース・ターゲットへの直接接続のみです。他のタイプのターゲットは、コンソールからの直接接続は現在サポートされていません。

図 2-1 スタンドアロンの構成



スタンドアロンで起動する場合、中間層の Management Server または管理対象ターゲットの Intelligent Agent は必要ありません。したがって、コンソールをスタンドアロンで起動した場合、Management Server および Intelligent Agent を介して通常使用可能な次に示す機能にはアクセスできません。

- 異なるいくつかのターゲット・タイプ（たとえば、データベース、HTTP サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）の管理
- 複数の管理者間での管理データの共有
- 潜在的な問題の事前の通知
- 繰り返される管理タスクの自動化
- バックアップおよびデータ管理ツール

- レポートのカスタマイズ、スケジューリングおよび公開
- Web ブラウザ内からのクライアントの実行
- LogMiner Viewer

スタンドアロン・コンソールの起動

Windows プラットフォームで、「スタート」メニューからコンソールを起動します。

サポートされているプラットフォームで、次のコマンドを入力し、コマンドラインからコンソールを起動します。

```
oemapp console
```

UNIX プラットフォームでは、コマンドラインの `oemapp` 部分は大文字と小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」が表示されたら、「スタンドアロンで起動」オプションを選択し、「OK」をクリックします。

図 2-2 Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン



注意： 次回ログインするときのために、「**スタンドアロンで起動**」と「**Oracle Management Server にログイン**」のいずれのログインを選択したかが記憶されます。「**Oracle Management Server にログイン**」を選択した場合、Management Server が記憶されます。

「**Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン**」が表示されないようにするには、サポートされているオペレーティング・システムのコマンドラインに次のコマンドを入力します。

```
oemapp console oem.loginmode=standalone
```

このコマンドの入力により、スタンドアロン・コンソールを即座に表示できます。

図 2-3 スタンドアロン・コンソール

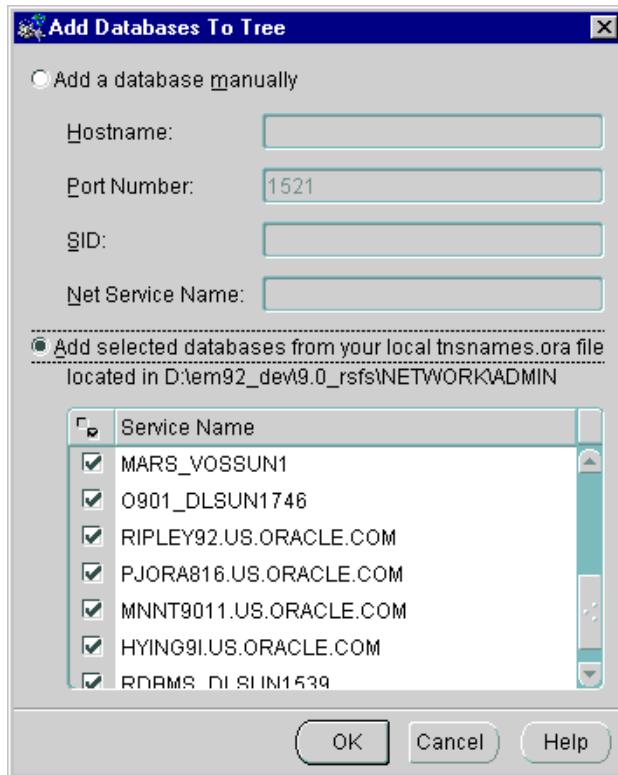


スタンドアロン・コンソールを最初に起動した時点では、管理対象のデータベースが追加されていないため、スタンドアロン・コンソールの左側のパネルには何も表示されません。「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスが自動的に表示され、ここでナビゲータにデータベースを追加できます。

スタンドアロン・コンソールのツリーへのデータベースの追加

「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスは、「ナビゲータ」メニューからも表示可能です。

図 2-4 「データベースをツリーに追加」



「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスでは、ネット・サービス名を手動で入力するか、またはローカルの `tnsnames.ora` ファイルから追加できます。

手動によるデータベースの追加

次のフィールドに入力し、スタンドアロン・コンソールのナビゲータにデータベースを追加できます。

- SID: データベース・システムの識別子で、通常は ORCL などのインスタンス名。
- ホスト名: データベースが格納されているマシン名またはノード名。

- ポート番号：データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526。
- ネット・サービス名：マシンへの接続時にデータベースを一意に識別する名前。通常はグローバル・データベース名です。
たとえば、ORCL.world です。

注意： データベースを手動で追加すると、ローカルの
<Oracle_Enterprise_Manager_Home>/network/admin ディレクトリ内の tnsnames.ora ファイルが自動的に更新されます。

ローカルの tnsnames.ora ファイルから選択したデータベースを追加

Oracle Enterprise Manager ホームのローカルの tnsnames.ora ファイルからデータベース・サービス名を読み込み、スタンドアロン・コンソールのナビゲーターに移入できます。「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスには、tnsnames.ora ファイルに保存されているデータベースがリスト表示され、ここでデータベースを選択または選択解除できます。すべてのデータベースのボックスを選択または選択解除するには、「サービス名」の左側の列ヘッダーをクリックします。すべてのデータベースのボックスを選択解除した場合は、個々のチェックボックスをクリックして、データベースを個別に選択できます。

注意： 現在、TCP/IP サービス名のみスタンドアロン・コンソールに手動で入力できます。他のネットワーク・プロトコルが必要な場合は、Oracle Net Configuration Assistant を使用して、tnsnames.ora ファイルにプロトコルを入力して追加します。tnsnames.ora ファイルから選択したサービスをインポートする場合には、すべてのプロトコルがサポートされます。

ナビゲーターにデータベースを追加した後の、スタンドアロン・コンソールを使用した管理タスクの実行方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

スタンドアロン・リポジトリ

スタンドアロン・コンソールには、いくつかの統合アプリケーションが含まれます。これら統合アプリケーションの中で、次のものには、情報を保存するスタンドアロン・リポジトリが必要です。

スタンドアロン・リポジトリと Management Server で使用されるリポジトリは、スタンドアロン・リポジトリが 1 人のユーザーに使用されるのに対して、管理リポジトリは複数ユーザーに使用される点で異なります。

スタンドアロン・リポジトリを必要とするアプリケーションは、次のとおりです。

- Change Manager
- Oracle Expert
- Oracle SQL Analyze

前述のスタンドアロン・アプリケーションのいずれかに最初にアクセスすると、スタンドアロン・リポジトリ・スキーマを所有するデータベース・ユーザーを作成するよう要求されます。ユーザーがすでに作成されている場合は、ユーザー名およびパスワードを指定するよう要求されます。

図 2-5 データベース・ユーザー作成のプロンプト

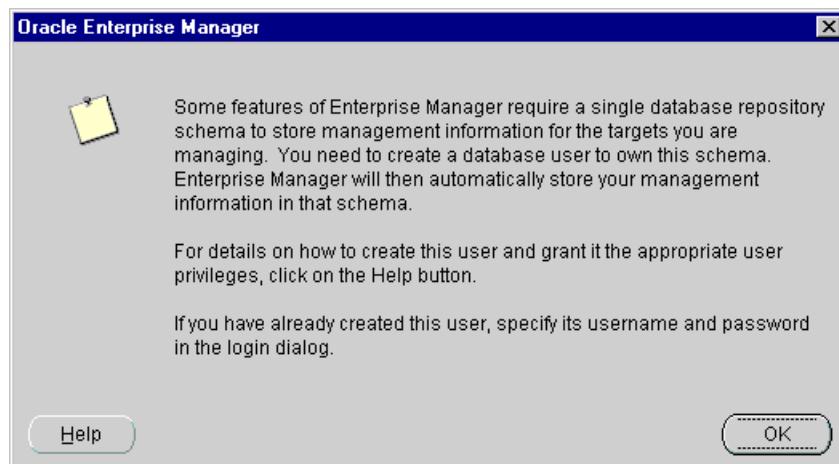


図 2-6 リポジトリ・ログイン



このデータベース・ユーザーには、特定のロールおよび権限が必要ですので、スタンドアロン・リポジトリ・スキーマを所有する新しいデータベース・ユーザーを作成することをお薦めします。また、特定の表領域属性がスタンドアロン・リポジトリには必要ですので、新しい表領域も作成する必要があります。ユーザーおよび表領域が作成されると、ユーザーのユーザー名およびパスワードを指定できます。スタンドアロン・アプリケーションでは、スタンドアロン・リポジトリが自動的に作成されます。

スタンドアロン・リポジトリを必要とするスタンドアロン・アプリケーションにその後アクセスすると、それらアプリケーションではすべて、同じスタンドアロン・リポジトリが使用されます。スタンドアロン・アプリケーションを起動するたびにスタンドアロン「リポジトリ・ログイン」ダイアログ・ボックスで入力を要求されないようにするには、「**パスワードを保存し、次回はリポジトリに自動的にログイン**」オプションを選択し、次回の使用のために接続情報を保存します。

スタンドアロン・リポジトリのデータベース要件

次のデータベースのリリースは、スタンドアロン・リポジトリでサポートされています。

- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 9.2.x
- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 9.0.1.x
- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 8.1.7.x

注意: リリース 8.1.7 データベースの場合、アップグレードの要件については 1-14 ページの「[バージョン互換性](#)」を参照してください。

リポジトリを配置するデータベースにオブジェクト・サポートがあることを確認する必要があります。ない場合は、リポジトリの作成は失敗します。オブジェクト・サポートのある別のデータベースを選択するか、選択したデータベースにオブジェクト・サポートをインストールして有効にします。

注意: オブジェクト・サポートは、デフォルトでデータベース・リリース 9.2.x、9.0.1.x および 8.1.7.x にインストールされ、有効にされます。

スタンドアロン・リポジトリの表領域の作成

次の属性で、表領域を作成します。

- タイプ: パーマネント
- 記憶域属性: エクステント管理で、ローカルでの管理に使用します。
- データ・ファイル属性:
 - サイズ:
 - * 2KB ブロックの場合 : 16MB
 - * 4KB ブロックの場合 : 24MB
 - * 8KB ブロックの場合 : 32MB
 - * 8KB を超えるサイズの場合 : 64MB
 - 既存ファイルを再利用 : Yes
 - AUTOEXTEND: Yes
 - AUTOEXTEND 増分 : 5MB
 - AUTOEXTEND 最大値 : 2000MB

スタンドアロン・リポジトリの表領域を作成するには、まずスタンドアロン・リポジトリを配置するデータベースが、2-8 ページで説明した要件を満たしていることを確認し選択します。次に、この項で説明する手順に従ってください。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。

Windows の場合 :

Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。

UNIX の場合 :

コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。

```
oemapp console
```

「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」が表示されたら、データベースに直接接続するために「**スタンドアロンで起動**」オプションを選択し、「OK」をクリックします。

2. 「データベース」の隣にある + 記号をクリックし、「データベース」の下にデータベース・リストを表示します。
3. ナビゲータのデータベース・ノードをダブルクリックし、NORMAL 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
4. 「オブジェクト」メニューから「作成」を選択します。「作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「作成」ダイアログ・ボックスのデータベース・ノードを開き、「表領域」を選択します。次に「作成」をクリックします。「表領域の作成」プロパティ・シートが表示されます。
6. 「表領域の作成」プロパティ・シートの「一般」ページで、次のようにします。
 - a. 新しい表領域の名前として OEM_REPOSITORY と入力します。
 - b. 永続的なデータベース・オブジェクトの保持に、表領域が使用されるように指定します。
7. 「データ・ファイル」セクションに、新しいデータ・ファイルのサイズを指定します。「ファイル名」および「ファイル・ディレクトリ」の列には、デフォルトの内容が自動的に設定されます。データ・ファイルは、データベースのバージョンによって、OEM_REPOSITORY.dbf または OEM_REPOSITORY.ora と呼ばれます。
8. OEM_REPOSITORY.dbf の隣にある記号を右クリックし、「編集」を選択します。「データ・ファイルの作成」プロパティ・シートが表示されます。
9. 「データ・ファイルの作成」の「一般」ページで、「既存ファイルの再利用」ボックスを選択します。
10. 「データ・ファイルの作成」の「記憶域」ページで、適切な属性を入力します。
 - a. 「フルになった場合に自動的にデータ・ファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択して、データベースでこれ以上の領域が必要になった場合に、サイズが自動的に拡張されるようにします。
 - b. 「増分値」で 5MB を指定します。
 - c. 「最大サイズ」で 2000MB を指定します。

11. 「データ・ファイルの作成」プロパティ・シートの「OK」をクリックします。
12. 「表領域の作成」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、領域を管理する方法として「ローカルでの管理」を選択します。
13. 「表領域の作成」プロパティ・シートの「作成」をクリックします。

スタンドアロン・リポジトリのデータベース・ユーザーの作成

スタンドアロン・リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリを所有するデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）は、Enterprise Manager でスタンドアロン・リポジトリを作成する前に作成する必要があります。

スタンドアロン・リポジトリを所有するデータベース・ユーザーを作成するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。
2. 「データベース」の隣にある + 記号をクリックし、「データベース」の下にデータベース・リストを表示します。
3. ナビゲータのデータベース・ノードをダブルクリックし、NORMAL ロールを持つユーザーとしてデータベースに接続します。
4. 「オブジェクト」メニューから「作成」を選択します。「作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「作成」ダイアログ・ボックスのデータベース・ノードを展開し、「ユーザー」を選択します。次に「作成」をクリックします。「ユーザーの作成」プロパティ・シートが表示されます。
6. 「一般」ページで、ユーザー名およびそのパスワードを指定し、デフォルト表領域として OEM_REPOSITORY を、一時表領域として TEMP を選択します。
7. 「ロール」ページで、リポジトリ・ユーザーに CONNECT および SELECT_CATALOG_ROLE ロールを付与します。
8. 「システム」ページで、リポジトリ・ユーザーに CREATE TRIGGER、CREATE PROCEDURE、EXECUTE ANY PROCEDURE、CREATE TYPE、EXECUTE ANY TYPE、SELECT ANY TABLE および（9.0 の場合）SELECT ANY DICTIONARY 権限を付与します。
9. 「割当て制限」ページで、OEM_REPOSITORY および TEMP に対して無制限を指定します。
10. 「ユーザーの作成」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

表領域およびリポジトリ・ユーザーを作成したら、スタンドアロン・リポジトリを必要とするスタンドアロン・アプリケーションを起動します。

Enterprise Manager の特定の機能でスタンドアロン・リポジトリを必要とし、スタンドアロン・リポジトリ・スキーマを所有する新しいデータベース・ユーザーを作成する必要があることを知らせるダイアログ・ボックスが表示された場合、ユーザーをすでに作成しているので、「OK」をクリックしてダイアログ・ボックスを閉じます。

リポジトリ・ログインのためにユーザーのユーザー名およびパスワードを指定し、「OK」をクリックします。スタンドアロン・アプリケーションでは、スタンドアロン・リポジトリが自動的に作成されます。

注意： コンソールをスタンドアロンで使用し、その後フレームワーク全体を配置する場合、スタンドアロン・リポジトリを完全なフレームワーク /Management Server リポジトリに移行できません。このタイプの移行はサポートされていません。スタンドアロン・リポジトリのデータのエクスポート、別のスキーマへのデータのインポート、および Management Server リポジトリでのそのスキーマ作業もサポートされていません。

3

Management Server の構成および管理

Enterprise Manager フレームワーク全体（たとえば、コンソール、Management Server および Intelligent Agent）の配置を選択した場合は、中間層の Management Server マシンで追加の構成タスクを実行する必要があります。このようなマシンでは、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して Management Server を構成する必要があります。

この章の内容は、次のとおりです。

- ローカル Management Server の構成
 - 新規リポジトリの使用方法
 - 既存のリポジトリの使用方法
- リポジトリのアップグレード
- リポジトリの削除
- 構成後の Management Server の管理

注意： リリース 9.0.1 では、リカバリ・カタログ・スキーマおよびユーザーは、リポジトリの作成時に TOOLS 表領域に作成されました。リリース 9.2 では、リポジトリを作成するために、カスタム・データベース・インストールを実行する必要があります。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動

次のインストール・シナリオの 1 つを実行した場合に、Enterprise Manager Configuration Assistant が自動的に起動します。

- Oracle9i Database > カスタム
- Oracle9i Management and Integration > Oracle Management Server
- Oracle9i Management and Integration > カスタム

Enterprise Manager Configuration Assistant は、上記のインストールの構成フェーズで自動的に起動します。その他のインストール・タイプによって Oracle Enterprise Manager をインストールした場合、Enterprise Manager Configuration Assistant はインストールの最後に自動的に起動しません。この場合は、インストール完了後に Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で起動する必要があります。

注意： Oracle Enterprise Manager リポジトリ・スキーマを作成する前に、ネットワーク上に必ずデータベース（9i Management Server リポジトリでサポートされているバージョン）をインストールし、実行しておいてください。

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動するには、次の操作を行います。

- Windows NT の場合：

Windows の「スタート」メニューから Enterprise Manager Configuration Assistant を起動できます。

また、コマンドラインから次のコマンドを使用しても、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動できます。

emca

- UNIX の場合：

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

emca

emca コマンドを実行するには、\$ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリの omsconfig.properties ファイルに対する書き込みアクセスが必要です。

リリース 9.x の新規リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成

リリース 9.x の新規リポジトリを作成するために、インストール後の構成時に Enterprise Manager Configuration Assistant を起動するか、手動で Configuration Assistant を起動すると、次のタスクが実行されます。

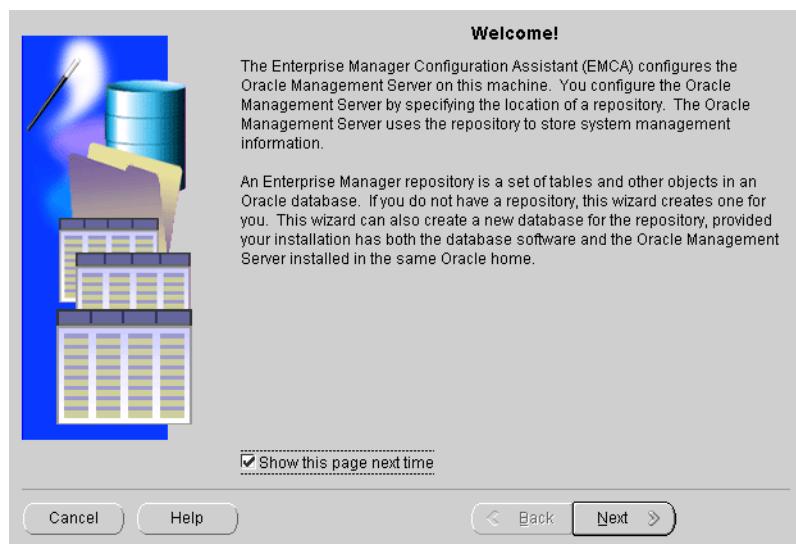
- オプションで、リポジトリを配置するローカル・データベース・インスタンスを作成します。
- オプションで、`OEM_REPOSITORY` 表領域を作成します。
- Enterprise Manager および Management Pack のリポジトリの所有者となる新しいデータベース・ユーザーを作成し、ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を指定します。
- 新しいデータベース・ユーザーに、適切な権限およびロールを割り当てます。
- 情報をリポジトリにロードします。この情報は、Oracle Enterprise Manager の実行時に必要です。
- ローカル Management Server の構成ファイル `ORACLE_HOME/sysman/config/omsconfig.properties` を作成または更新（あるいはその両方）します。
- Management Server リストにマシンで実行されるコンソールの接続先の Management Server が含まれるように、ローカル・マシンのクライアント・レジストリに必要な情報を入力します。
- Windows NT、Windows 2000 または Windows XP の Management Server サービスがすでに存在するかどうかを確認します。存在しない場合、Windows に Management Server サービスを作成し、「手動」に設定します。存在する場合は、それを使用します。
- Windows NT、Windows 2000 または Windows XP の Management Server サービスを起動します。

ようこそ

手動で Configuration Assistant を起動すると、「ようこそ」ページが表示されます。

デフォルトでは、「次回このページを表示」オプションが選択されています。Configuration Assistant に慣れたら、このページを表示しないように指定できます。「次回このページを表示」オプションの選択を解除した場合、次回 Configuration Assistant は「構成操作」ページから開始されます。

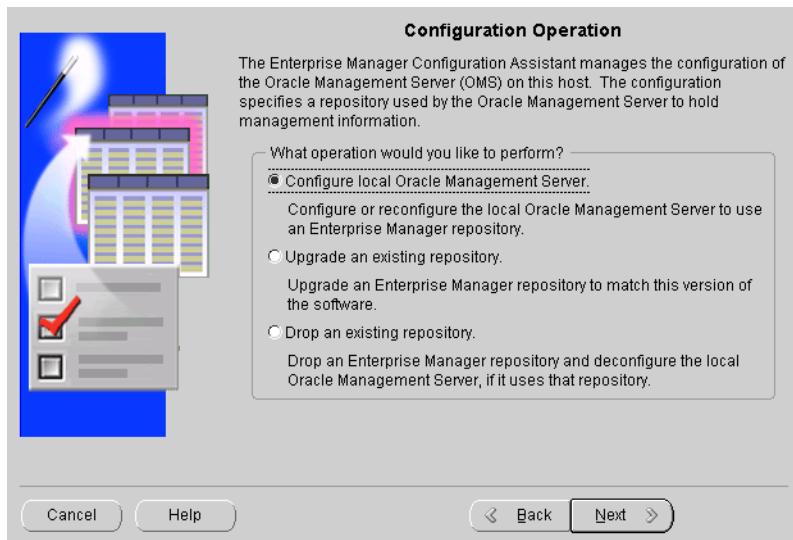
図 3-1 ようこそ



構成操作

「ようこそ」ページで「次へ」をクリックすると、「構成操作」ページが表示されます。

図 3-2 構成操作



リポジトリの作成または既存のリポジトリ構成の編集により Management Server を構成する場合は、リポジトリ操作のリストから「**ローカルの Oracle Management Server を構成します。**」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。

前の構成が存在しない場合は、「[Oracle Management Server の構成](#)」ページが表示されます。

構成がすでに存在する場合は、この構成を編集するか、新しい構成を作成するかを尋ねるダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3-3 編集または作成ダイアログ・ボックス



「編集」または「作成」をクリックします。

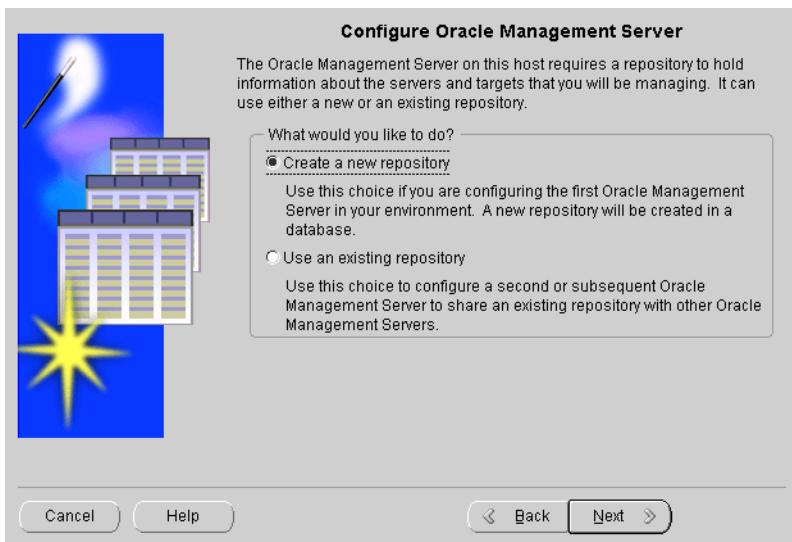
「編集」をクリックした場合、「構成パラメータの編集」ページが表示されます。構成の編集の詳細は、3-22 ページの「[構成パラメータの編集](#)」を参照してください。

「作成」をクリックした場合は、「[Oracle Management Server の構成](#)」ページが表示されます。

Oracle Management Server の構成

このホストの Management Server では、管理するサーバーおよびターゲットの情報を保持するリポジトリが必要です。

図 3-4 Oracle Management Server の構成



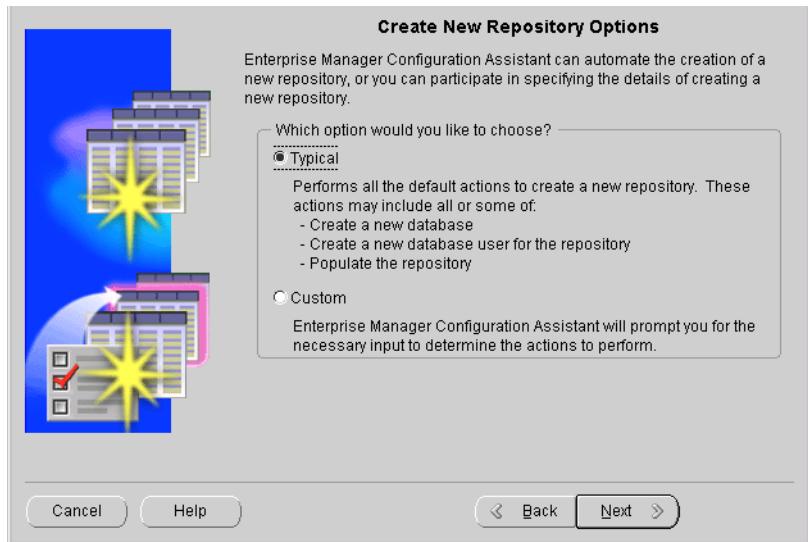
新しい Oracle Enterprise Manager ユーザーの場合、または環境に最初の Management Server を構成してリリース 9.x の新規リポジトリを作成する場合は、「[新規リポジトリの作成](#)」オプションを選択します。リリース 9.x のリポジトリを作成してロードし、ローカル Management Server の構成パラメータを設定します。

新規リポジトリ作成オプション

Enterprise Manager Configuration Assistant では、新規リポジトリの作成を自動化できます。または、ユーザーによって新規リポジトリ作成についての詳細を指定できます。

注意： このページは、Configuration Assistant が Oracle9i データベース・サーバーを含む Oracle ホームから実行された場合にのみ表示されます。

図 3-5 新規リポジトリ作成オプション



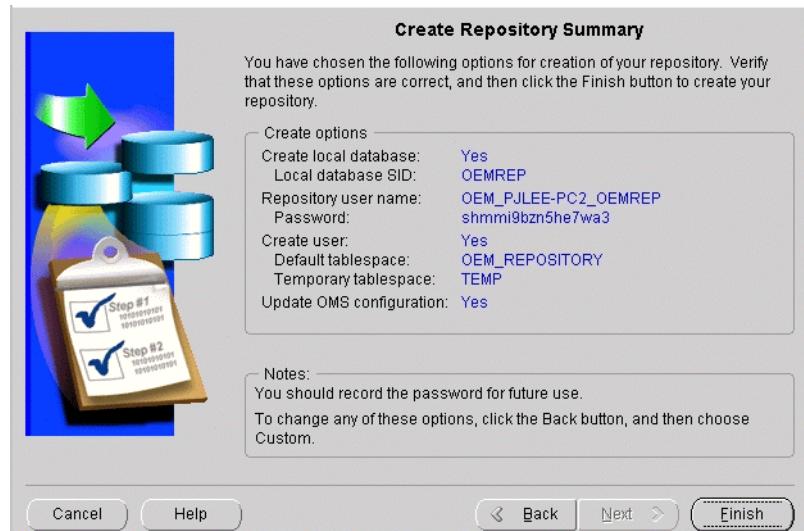
標準

この操作には、次のすべてが含まれます。

- ローカル・データベースの作成
- リポジトリの新しいデータベース・ユーザーの作成
- リポジトリへの移入

「標準」オプションを選択した場合は、これ以上実行する手順はありません。次の「リポジトリ作成のサマリー」ページには、特別なエントリが表示されます。

図 3-6 「標準」リポジトリ・オプションの「リポジトリ作成のサマリー」



注意： 今後参照するときのために、リポジトリ・ユーザーのパスワードを記録してください。このときのみパスワードが表示されます。リポジトリの削除またはアップグレードなどのタスクを実行するには、パスワードが必要になります。後にリポジトリ・ユーザーのパスワードを変更するには、F-17 ページの「リポジトリ・ユーザーのパスワード変更」を参照してください。

「終了」をクリックしてリポジトリの作成を開始するか、または「戻る」をクリックして、前のページに戻って設定を変更します。

「終了」をクリックすると、Enterprise Manager Configuration Assistant では、データベース・インスタンスを作成する Database Configuration Assistant が起動されます。

注意： 「進行」ダイアログ・ボックスでは Database Configuration Assistant は識別されないので、Database Configuration Assistant が実行されているのが明確ではない場合があります。

Database Configuration Assistant で、データベースのパスワードの変更が可能な場合は、パスワードを変更する必要があります。変更せずに操作を続行することはできません。

インスタンスが作成され、Database Configuration Assistant を終了すると、Enterprise Manager Configuration Assistant では、SYS 接続情報を使用してデータベースへの接続が試行されます。接続されると、次に、Enterprise Manager Configuration Assistant ではリポジトリ・ユーザーが作成され、リポジトリ・スキーマに移入されます。

カスタム

「カスタム」オプションを選択した場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択内容に応じて次の操作を後から選択できます。

- データベースの場所の選択
- リポジトリのデータベースの選択
- 新しいデータベース・インスタンスの作成を選択した場合の SID の変更
- リポジトリのユーザー名およびパスワードの選択
- リポジトリ・ユーザー表領域の選択

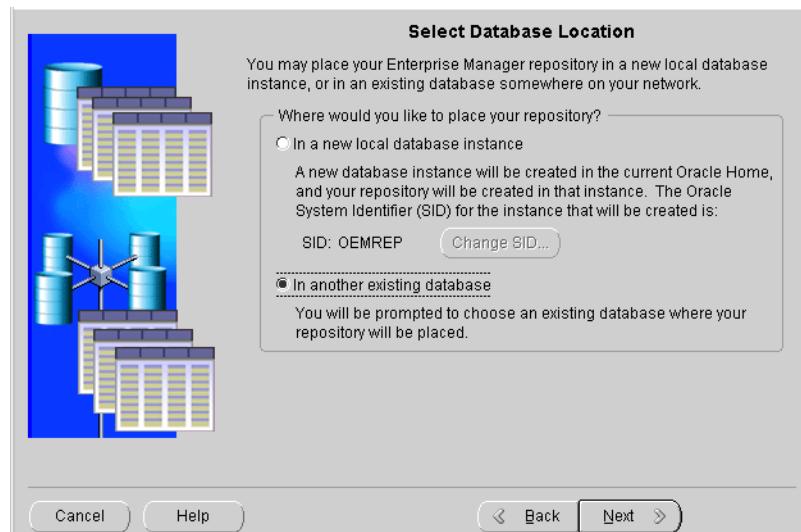
「カスタム」オプションを選択した場合、「[データベースの場所の選択](#)」ページが表示されます。

データベースの場所の選択

Enterprise Manager リポジトリは、新しいローカル・データベースまたはネットワーク上の別の既存データベースに配置します。データベースは、リリース 9.x の Management Server リポジトリをサポートするバージョンである必要があります。

注意： このページは、Configuration Assistant が Oracle9i データベース・サー
バーを含む Oracle ホームから実行された場合にのみ表示されます。

図 3-7 データベースの場所の選択



- 新規ローカル・データベース・インスタンス内

現在の Oracle ホームに新しいデータベース・インスタンスを作成し、リポジトリがそのインスタンスに作成されます。

リポジトリは OEM_REPOSITORY 表領域に作成されます。SID は OEMREP になります。SID を変更する場合は、「**SID の変更**」をクリックします。
- 別の既存データベース内

リポジトリを配置する既存データベースを選択するように要求されます。データベースがインストールされ、実行されていることを確認してください。

「**SID の変更**」をクリックせずに「**新規ローカル・データベース・インスタンス内**」オプションを選択した場合は、「**リポジトリへのログイン情報**」ページが表示されます。詳細は、3-13 ページの「**リポジトリへのログイン情報**」を参照してください。

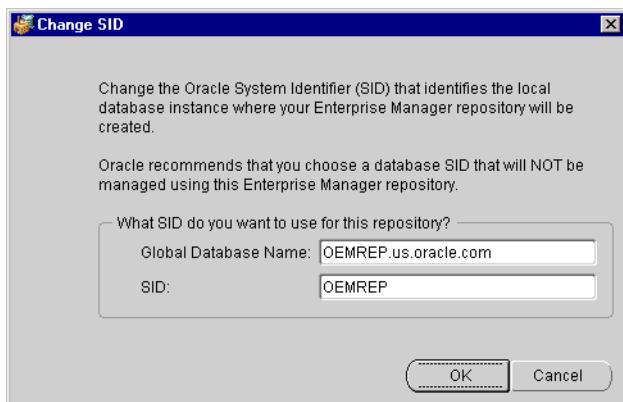
「**新規ローカル・データベース・インスタンス内**」オプションを選択して「**SID の変更**」をクリックした場合は、「**SID の変更**」ダイアログ・ボックスが表示されます。詳細は、3-11 ページの「**SID の変更**」を参照してください。

「**別のある既存データベース内**」オプションを選択した場合は、「**リポジトリのデータベースの選択**」ページが表示されます。詳細は、3-12 ページの「**リポジトリのデータベースの選択**」を参照してください。

SID の変更

Enterprise Manager リポジトリが作成されるローカル・データベース・インスタンスを識別する Oracle システム識別子 (SID) は、変更できます。

図 3-8 SID の変更



この Enterprise Manager リポジトリを使用して管理されないデータベース SID を選択することをお薦めします。

- グローバル・データベース名

他のデータベースと一意に識別するデータベースの完全な名前。グローバル・データベース名は、`database_name.database_domain` の形式になります。たとえば、`oemrep.us.ovenbird.com` となります。

データベース名の部分、`oemrep` は、データベースを示す簡単な名前です。データベース・ドメインの部分、`us.ovenbird.com` は、データベースがあるデータベース・ドメインを指定し、グローバル・データベース名を一意にします。可能な場合は、データベース・ドメインでネットワーク・ドメインをミラー化することをお薦めします。

初期化パラメータ・ファイルの `SERVICE_NAMES` パラメータで指定されているように、グローバル・データベース名は、データベースのデフォルト・サービス名です。

- SID

Oracle システム識別子 (SID)。Oracle データベースを実行する特定のインスタンスを識別する名前。各データベースに対して、データベースを参照するインスタンスが少なくとも 1 つあります。

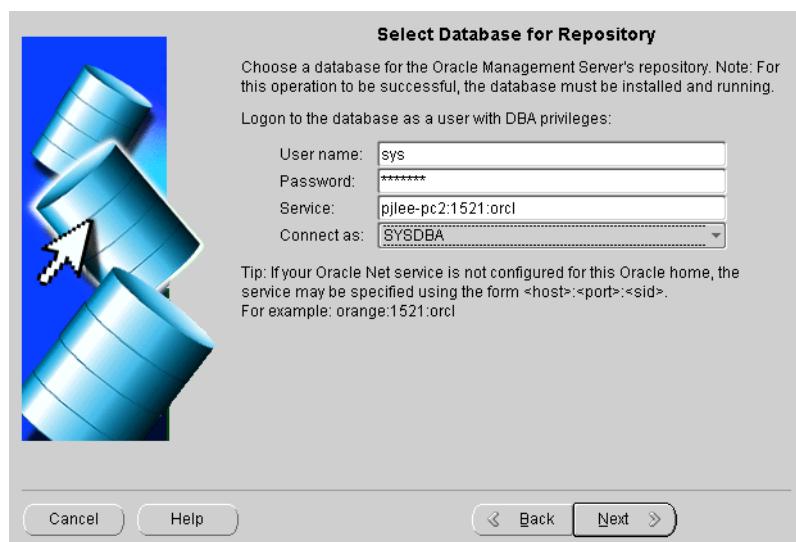
データベース名または SID の変更後、「OK」をクリックしてダイアログ・ボックスを閉じます。次に、「データベースの場所の選択」ページの「次へ」をクリックして、「リポジトリへ

[のログイン情報](#) ページに進みます。詳細は、3-13 ページの「リポジトリへのログイン情報」を参照してください。

リポジトリのデータベースの選択

リポジトリを作成するデータベースにログインします。

図 3-9 リポジトリのデータベースの選択



ユーザー名およびパスワード：データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。新規のユーザーをデータベース内に作成する必要が生じたときに、リポジトリが組み込まれ、Configuration Assistant でそのデータベース / リポジトリの照会ができるよう、Enterprise Manager Configuration Assistant では DBA アカウントが要求されます。

これは個人のデータベース・ユーザー・アカウントで、Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントではありません。

たとえば、`system/manager` です。

サービス：サービスは、次の形式で指定します。

`<host>:<port>:<sid>`

ここで

`host` は、データベースが格納されるマシン名を表します。

port は、データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526 となります。

sid はデータベースのシステム ID を表します。

例：

my_em_machine:1521:em92

このように指定すると、`my_em_machine` マシンでポート 1521 を使用して em92 データベースに接続します。

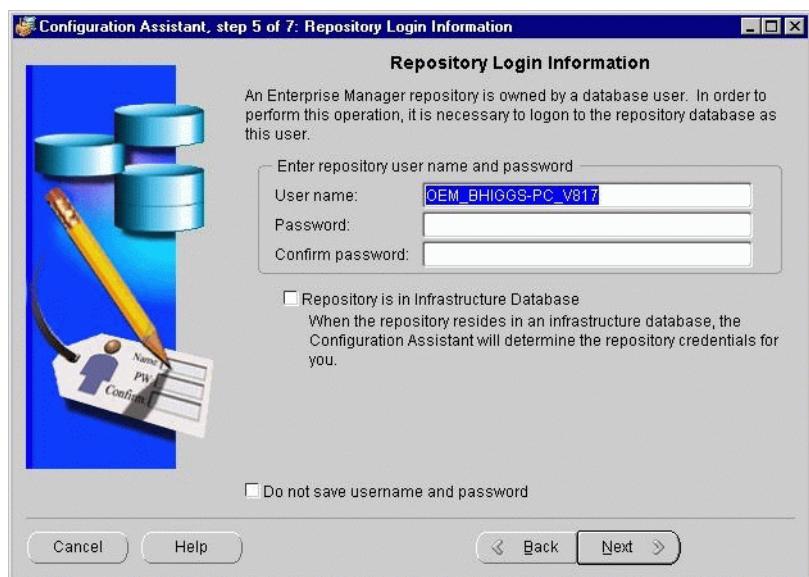
注意： サービスは `<host>:<port>:<sid>` のように指定することをお薦めしますが、Oracle Net クライアントが適切に構成されていれば、Oracle Net の名前を使用することもできます。

「次へ」をクリックして処理を続行します。

リポジトリへのログイン情報

Enterprise Manager リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、このページで指定するユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成します。

図 3-10 リポジトリへのログイン情報



ユーザー名：デフォルトでは、Enterprise Manager Configuration Assistant により、`OEM_<TCP/IP hostname of machine>_<SID>`が、リポジトリを所有するデータベース・ユーザーの作成に使用されるリポジトリのユーザー名として使用されます。

`TCP/IP hostname of machine` は、データベースが格納されるマシン名を表します。

`SID` はデータベースのシステム ID を表します。

リポジトリ・ユーザー名は、ネットワーク全体で一意の名前にしてください。別の名前を選択する場合は、それが一意であることを確認してください。

Intelligent Agent では、各 Management Server はそのリポジトリ名で識別されます。異なるデータベース内に同名のリポジトリが 2 つ存在する場合、Intelligent Agent が Management Server に接続する際に問題が発生します。

パスワード：ユーザーのパスワードを入力します。

パスワード確認：パスワードをもう一度入力して確認します。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを、`omsconfig.properties` ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。これらのリポジトリ接続情報がファイルに格納されていれば、Management Server はこの情報を使用してリポジトリにログインします。パスワードは、暗号化されて保存されます。

Windows NT および Windows 2000 では、リポジトリ接続情報が保存されていない場合、Management Server を起動するときに「コントロールパネル」の「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログ・ボックスでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX では、リポジトリ情報が保存されていない場合、Management Server の起動前にユーザー名およびパスワードを入力するように要求されます。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを `omsconfig.properties` ファイルに保存しない場合は、「**ユーザー名とパスワードを保存しない**」オプションを選択してください。リポジトリ接続情報を格納しないオプションは、セキュア Management Server モードといいます。

リポジトリ・アカウント情報は、リポジトリ・スキーマ内のメンテナンス操作（作成、アップグレードまたは削除など）を実行する場合に使用されます。

Configuration Assistant で自動的に作成されたリポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要なロールおよび権限は、次のとおりです。

- ロール : CONNECT および SELECT_CATALOG_ROLE
- 権限 : CREATE TRIGGER、CREATE PROCEDURE、EXECUTE ANY PROCEDURE、CREATE TYPE、EXECUTE ANY TYPE、SELECT ANY TABLE および（リリース 9.x のデータベースの場合のみ）SELECT ANY DICTIONARY

セキュリティの問題や、Oracle Enterprise Manager 外部のオブジェクトへの不要なアクセスが発生しないようにするために、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。

リポジトリ・ユーザー表領域の選択

次の場合には、「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」ページは表示されません。

- リポジトリ・ユーザーがすでに存在する場合
または
- 次のようなときに、Enterprise Manager Configuration Assistant がインストール・セッションから実行されている場合
 - OEM_REPOSITORY 表領域がすでに存在する
 - OEM_REPOSITORY 表領域に適切なサイズ属性が定義されている

注意： Oracle Enterprise Manager のリポジトリを、SYSTEM（具体的には製品データベースの SYSTEM 表領域）、ROLLBACK または TEMPORARY 表領域にインストールしないでください。

SYSTEM 表領域で使用する表領域パラメータ設定は、Oracle Enterprise Manager で使用するには適切ではありません。SYSTEM 表領域は、system エンタリに対してのみ使用してください。ツール、ユーザーおよび（Oracle Enterprise Manager などの）管理製品は、他の表領域に格納されます。

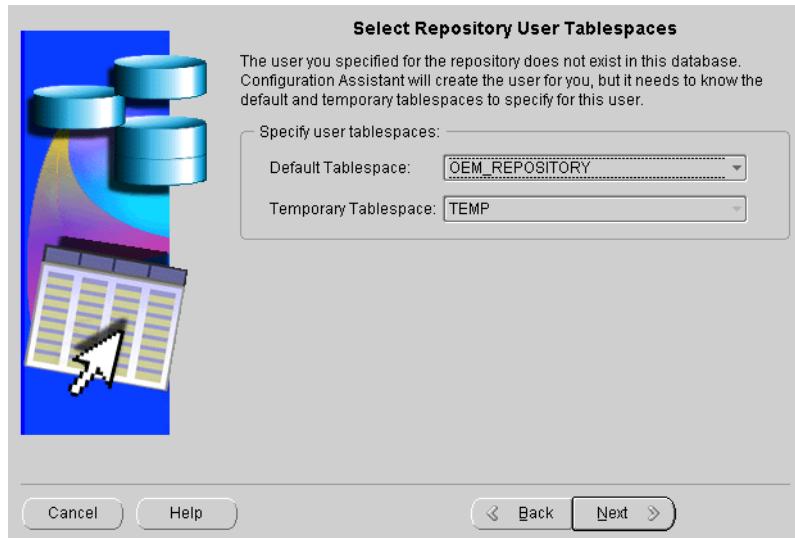
ROLLBACK 表領域は、ロールバック・セグメントの作成で使用します。Oracle ユーザー・プロセスは、ロールバック・セグメントを使用してロールバック情報を保存します。

TEMPORARY 表領域は、ユーザーの TEMPORARY 表領域に割り当てられ、Oracle ユーザー・プロセスによって一時領域として使用されます。データベースの稼働中は、これら 2 つの表領域の使用率が変化します。TEMPORARY 表領域は、ユーザーの一時表領域として使用することができます。

Configuration Assistant では、SYSTEM 表領域は一時表領域としてもデフォルト表領域としても使用できません。

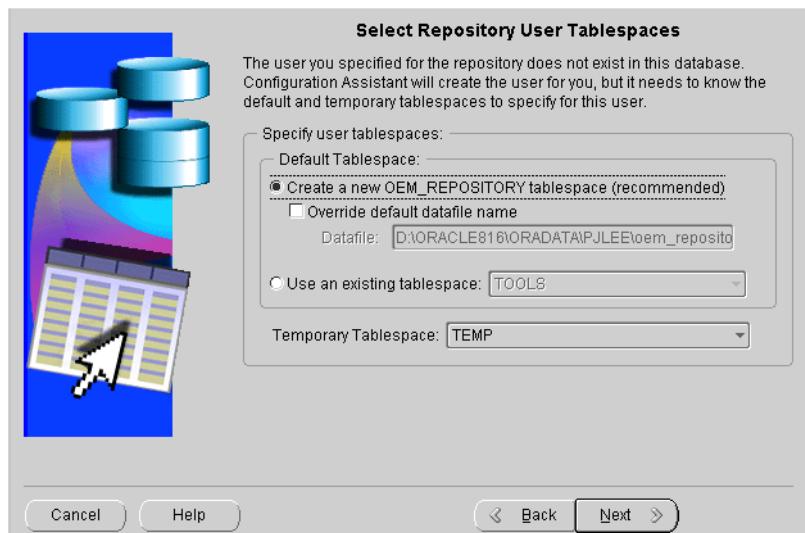
Configuration Assistant を手動で起動した場合、OEM_REPOSITORY 表領域がすでに存在している場合に、「リポジトリへのログイン情報」ページでリポジトリを管理するユーザーとは異なるリポジトリ・ユーザー名を入力すると、「サービス "<service>" でユーザー "<user>" が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」というエラー・メッセージが表示されます。「Yes」または「No」をクリックした場合は、次のページが表示されます。

図 3-11 OEM_REPOSITORY が存在する場合の「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」



Enterprise Manager のリポジトリで使用するデフォルトの一時表領域を選択します。
OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合は、次のページが表示されます。

図 3-12 OEM_REPOSITORY が存在しない場合の「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」



デフォルト表領域 :

- 新規の OEM_REPOSITORY 表領域の作成（推奨）
OEM_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。これは、Enterprise Manager のリポジトリに対して特別な特性を持つ表領域で、リポジトリ・ユーザーのデフォルト表領域として使用されます。
- デフォルトのデータ・ファイル名の上書き
OEM_REPOSITORY 表領域のデータ・ファイルのデフォルト名を変更する場合は、このオプションを選択します。通常、これは推奨されません。
- 既存の表領域を使用
リストから、既存の表領域を選択します。

一時表領域

リストから、一時表領域を選択します。

「次へ」をクリックして処理を続行します。

Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に必要な空き領域があることが確認されると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。それ以外の場合は、エラーが表示されます。

リポジトリ作成のサマリー

「新規リポジトリ作成オプション」ページで新しいリポジトリ作成の詳細を指定した場合は、「リポジトリ作成のサマリー」ページで、指定したすべての情報のサマリーが表示されます。

次のページは、「カスタム」オプションの手順の最後に表示されます。

図 3-13 リポジトリ作成のサマリー



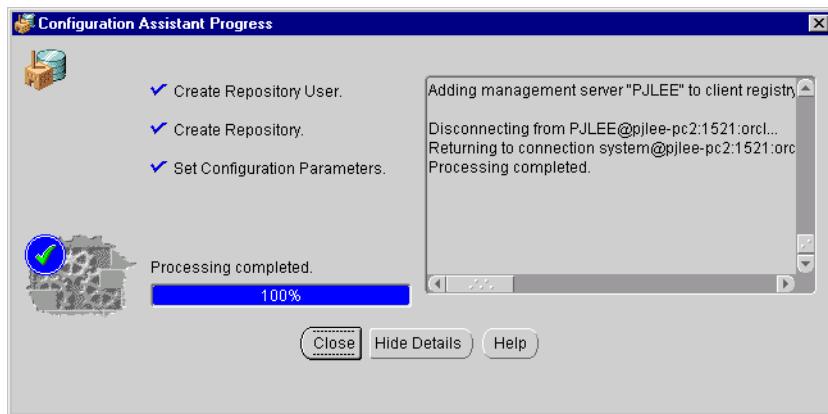
「終了」をクリックしてリポジトリの作成を開始するか、または「戻る」をクリックして、前のページに戻って設定を変更します。

「終了」をクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理手順が表示されます。

「Configuration Assistant の進行」ウィンドウ

処理の詳細情報（発生した可能性のあるエラーなど）が必要な場合は、「詳細を表示」をクリックし、ダイアログ・ボックスを拡張してテキスト領域を表示してください。「詳細を非表示」をクリックすると、詳細情報を非表示にすることができます。

図 3-14 Configuration Assistant の進行



結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」は「閉じる」に変わります。

エラーなくすべての手順が完了した場合、「処理が完了しました。」メッセージが表示されます。

「取消」をクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

注意： 処理の進行中にリポジトリの作成を取り消すと、リポジトリは不正な状態になります。このような場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用してリポジトリを削除します。

Configuration Assistant を終了するには、「閉じる」をクリックします。

リポジトリの作成に失敗した場合、リポジトリを削除し、omsconfig.properties ファイルに適切なトレース・プロパティを追加して Management Server のトレースをオンにし、再びリポジトリ作成手順を実行します。Management Server のトレースおよびロギングの詳細は、付録 B 「ロギングおよびトレースのアクティブ化」を参照してください。

リポジトリの削除の詳細は、3-30 ページの「既存リポジトリの削除」を参照してください。

既存リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成

複数の Oracle Management Server がある環境では、複数の Management Server で同じリポジトリを共有できます。ノードごとに実行される Management Server は、1 つのみです。

次の作業を実行する場合、「ローカルの Oracle Management Server を構成します。」オプションを選択します。

- 既存リポジトリを管理するように Management Server を設定します。
- 同一または別のデータベース内の別のリポジトリを使用するように Management Server 構成を変更します。
- Management Server の起動時にリポジトリへのログインで使用されるパスワードを変更します。他のユーザーがデータベースのリポジトリ・ユーザー・パスワードを変更した場合は、パスワードを変更する必要があります。変更しない場合、Management Server の起動に失敗します。構成パラメータの編集時に Enterprise Manager Configuration Assistant により変更されるのは、`omsconfig.properties` ファイルのみです。データベース内のリポジトリ接続情報は変更されません。

ネットワーク内のノード数および管理対象のサービス数が増加した場合、または現行の Management Server がオーバーロードになった場合には、中間層に Oracle Management Server を追加してワークロードを分散し、平均化することができます。

Oracle Management Server を複数使用することにより、互いの耐障害性が確保されます。1つの Oracle Management Server に障害が発生しても、他の Management Server は引き続き稼働します。障害が発生した Management Server に登録されているクライアントは、ただちにログインしなおし、同じリポジトリを使用または共有している他の Management Server のいずれかに登録すれば、残っている使用可能な Oracle Management Server で作業を継続できます。障害が発生したサーバー以外の Oracle Management Server に登録するように構成されているクライアントは、障害の影響を受けません。

Management Server の処理能力が限界に達した（CPU の使用率が限界になる）場合、さらに Management Server を追加して、Management Server の処理能力を増やすこともできます。

注意： 同じリポジトリに接続する Management Server はすべて、同じ DNS ドメイン内に置く必要があります。

特定のマシンで Oracle Management Server を実行する場合は、そのマシンに Oracle Management Server ソフトウェアをインストールしておく必要があります。

詳細な手順は、対象のデータベース・リリースのインストレーション・ガイドを参照してください。

新しい Management Server を追加する場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、対象ノードの構成を更新する必要があります。

Configuration Assistant では、それが稼働しているマシンの構成パラメータ (`omsconfig.properties` ファイル) のみ設定または変更できます。別のマシンの構成パラメータについては変更できません。リポジトリを共有しているその他の各 Management

Server で、Configuration Assistant を実行し、各マシンの構成パラメータを変更してください。

リポジトリ接続情報（ユーザー名、パスワード、サービス）を設定または変更して、正しいリポジトリを指定してください。同じリポジトリを共有するすべての Management Server マシンでは、構成パラメータが一致している必要があります。

注意： リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー・アカウントのパスワードを変更する場合は、対象リポジトリを使用しているすべての Management Server で、対応する Management Server の構成パラメータも変更する必要があります。変更しない場合は、Management Server を起動できなくなります。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、3-2 ページの [「Enterprise Manager Configuration Assistant の起動」](#) を参照してください。

構成操作

「構成操作」ページで構成操作のリストから「ローカルの Oracle Management Server を構成します。」を選択し、「次へ」を押して操作を継続します。

「構成操作」ページの詳細は、3-2 ページの [「構成操作」](#) を参照してください。

Oracle Management Server の構成

「Oracle Management Server の構成」ページで、「既存リポジトリの使用」オプションを選択して 2 つ目以降の Management Server を構成し、他の Management Server と既存のリポジトリを共有します。そして、「次へ」をクリックして操作を継続します。

構成がすでに存在する場合は、この構成を編集するか、新しい構成を作成するかを尋ねるダイアログ・ボックスが表示されます。[図 3-3 「編集または作成ダイアログ・ボックス」](#) を参照してください。「編集」をクリックすると、「構成パラメータの編集」ページが直接表示されます。

構成パラメータの編集

「構成パラメータの編集」ページで、既存のリポジトリのユーザー名、パスワードおよびサービスを入力し、既存のリポジトリを使用するローカル Management Server に直接移動します。

ユーザー名

このマシンの Management Server で使用する、既存リポジトリのユーザー名を入力します。または、Management Server の構成を別のリポジトリを使用するように変更するリポジトリ

のユーザーネームを入力します。このユーザーネームはデータベースのユーザーネームで、Oracle Enterprise Manager の管理者名ではありません。

パスワード

前述のユーザーネームのパスワードを入力するか、Management Server で起動時にリポジトリへのログインに使用されるパスワードを変更するリポジトリ・ユーザーのパスワードを入力します。この情報は、Management Server が次回起動するときに使用されます。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれに合わせて変更してください。

サービス

リポジトリが存在するサービスまたはデータベースを入力し、別のデータベースのリポジトリを使用するように Management Server を変更します。

この情報は、このマシンの Management Server が次回起動するときに使用されます。無効な情報があると、Management Server は起動しません。

ユーザー名とパスワードを保存しない

ユーザーネームおよび暗号化されたパスワードを、omsconfig.properties ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。ユーザーネームおよび暗号化されたパスワードがファイルに格納されている場合、Management Server はその情報を使用してリポジトリにログインします。

Windows NT では、リポジトリ接続情報が保存されていない場合、Management Server を起動するときに「コントロールパネル」の「サービス」内の「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログ・ボックスでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX では、リポジトリ情報が保存されていない場合、Management Server の起動前にユーザーネームおよびパスワードを入力するように要求されます。

ユーザーネームとパスワードを保存しない場合は、「ユーザーネームとパスワードを保存しない」オプションを選択してください。リポジトリ接続情報を格納しないオプションは、セキュア Management Server モードといいます。

「次へ」ボタンをクリックすると、「構成パラメータの編集」ページから次に進みます。

ユーザーネームおよびパスワードが構成ファイルに格納されていない場合、「ログイン」ダイアログ・ボックスで、リポジトリにログインする接続情報を要求されます。Configuration Assistant では、指定のリポジトリに接続し、指定のリポジトリを検証して、発生したエラーを表示します。検証に成功した場合は、「管理リージョンの選択」ページが表示されます。

管理リージョンの選択

Enterprise Manager が大規模なグローバル配置の場合、または LAN と WAN が組み合った状況で Enterprise Manager が配置されている場合、管理リージョン機能の使用を考慮する必要があります。両方の状況において、管理リージョンでは、Management Server のサブ

セットおよび検出されたノードのサブセットを管理リージョンに割り当て、リージョン間またはネットワーク間通信を回避することにより、通信速度の遅いネットワークのパフォーマンスを改善できます。また、管理リージョンは、ファイアウォール境界内の検出されたノードのマッピングに役立ちます。

たとえば、次のようにになります。会社 XYZ には、イギリスで稼働する Management Server があり、イギリスには監視対象ターゲットがあります。また、カリフォルニアの本社にも稼働する Management Server があり、カリフォルニアに監視対象ターゲットがあります。

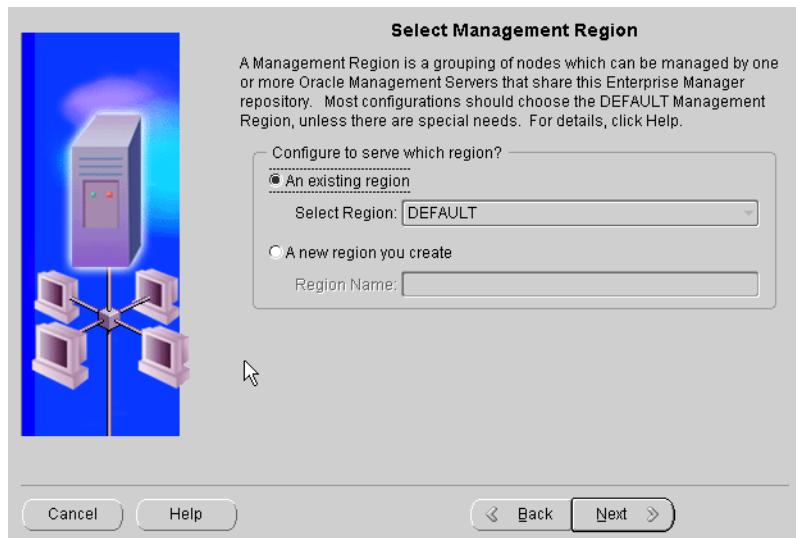
前のリリースの Enterprise Manager では、イギリスの Management Server でカリフォルニアのターゲットを実際に監視できました。Management Server をターゲットとバインドすることはできませんでした。また、イギリスの Management Server とカリフォルニアの監視対象ノードの間にファイアウォールがある場合は、Management Server とノードは、相互に対話できませんでした。リリース 9.x の管理リージョン機能では、このリージョン間通信が回避され、ユーザーは、(ファイアウォール内で) イギリスの Management Server でイギリスのターゲットの監視のみをするように指定できます。カリフォルニアのターゲットを監視する必要はありません。

デフォルトでは、Enterprise Manager Configuration Assistant により、DEFAULT と呼ばれるデフォルトの初期管理リージョンが作成されます。デフォルトでは、既存リポジトリを使用するすべての Management Server およびそのリポジトリ内の検出されたすべてのノードが、この DEFAULT 管理リージョン内に配置されます。企業で管理リージョン機能を使用する必要がない場合（すなわち、大規模なグローバル企業ではない、またはいくつかの LAN および WAN にわたる配置が行われていない場合）、この DEFAULT 管理リージョンの使用で十分です。ただし、管理リージョン機能を完全に利用する場合、追加の管理リージョンを作成し、各管理リージョン内の検出されたノードのサブセットおよび Management Server のサブセットを指定する必要があります。

Management Server が管理リージョンに割り当てられていない場合、Enterprise Manager Configuration Assistant により、割当てを行うか、またはローカル Management Server を割り当てるまったく新しい管理リージョンを作成するように要求されます。ほとんどの場合、Management Server はすでに管理リージョンに割り当てられているので、「管理リージョンの選択」ページは、オプションが使用不可の状態で表示されます。この場合、ページ内に赤の文字で説明のメッセージが表示されます。

ローカル Management Server が管理リージョンに割り当てられていない場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページが表示されます。

図 3-15 管理リージョンの割当て



注意： Enterprise Manager コンソールからも、新しい管理リージョンを作成し、Management Server を管理リージョンに割り当てる機能にアクセス可能です。コンソールからは、スーパー管理者のみがこの機能にアクセスできます。

リスト表示されたオプションのいずれかを選択するか、新しい管理リージョンの名前を入力します。

既存のリージョン

リージョンの選択：リストからリージョンを選択します。

デフォルトでは、すべてのノードおよび Management Server は、同じ管理リージョン内にあり、DEFAULT と呼ばれます。スーパー管理者としてコンソールにログインした場合は、ある管理リージョンから別の管理リージョンへノードおよび Management Server を再割当てできます。

作成した新規リージョン

リージョン名：リージョン名を入力します。

注意： 次のページに進むには、「構成パラメータの編集」ページまたは「管理リージョンの選択」ページのパラメータを少なくとも1つ変更する必要があります。何も変更せずに「次へ」をクリックすると、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください。」というエラー・メッセージが表示されます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistantでは、次のページに移動できません。

構成パラメータ・サマリー

「構成パラメータ・サマリー」ページには、構成パラメータ変更操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックして変更を開始するか、または「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

注意： 「構成パラメータの編集」を使用してパラメータを変更すると、Configuration Assistantにより、構成ファイル ORACLE_HOME/sysman/config/omsconfig.properties に格納されている Management Server 構成パラメータが変更されます。これらのパラメータによって、Management Server が適切なデータベース内のリポジトリ・ユーザーに接続できるように、必要な入力データが Management Server に提供されます。リポジトリが作成されると、Configuration Assistantでは、リポジトリ自体のリポジトリ・ユーザー名およびパスワードは変更されません。Configuration Assistantでは、リポジトリ・ユーザーの作成時に、リポジトリ作成時点でのリポジトリ・ユーザーのパスワードが操作されるのみです。

リポジトリのアップグレード

リリース 9.x より前の既存リポジトリは、インストール時に自動的にはアップグレードされません。アップグレードするには、インストール後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で実行します。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、既存のリリース 2.x のリポジトリを取得して、リリース 9.2 に直接アップグレードするか、またはリリース 9.0 のリポジトリを取得して、リリース 9.2 に直接アップグレードします。アップグレードが終了すると、リポジトリが新しいリリースになります。

リリース 1.x のリポジトリからリリース 9.2 の單一リポジトリへの直接の移行は、Enterprise Manager Configuration Assistant ではサポートされていません。この移行プロセスには、2つの手順があります。まず、Enterprise Manager Migration Assistant を実行してリリース 1.x からリリース 2.x に移行し、次に Enterprise Manager Configuration Assistant リリース 9.2 を実行して、リリース 2.x からリリース 9.2 にアップグレードします。リリース 1.x の複

数リポジトリをリリース 2.x の單一リポジトリに移行する手順については、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止

リポジトリのアップグレードを実行する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。Management Server が対象のリポジトリを使用している場合は、リポジトリをアップグレードすると、サーバー・エラーが発生します。

リポジトリのバックアップ

リポジトリをアップグレードする前に、標準エクスポート・メカニズムを使用して、データベースまたはリポジトリ・スキーマをバックアップしてください。

注意： SYS ユーザーで作成したリポジトリは、エクスポートできません。

エクスポート・ユーティリティは、Oracle データベース・サーバーに付属する基本ユーティリティです。エクスポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle9i データベース・ユーティリティ』を参照してください。

リポジトリのアップグレード中に失敗すると、そのリポジトリは使用できなくなります。失敗したリポジトリは、アップグレード可能なリポジトリとしてリストに表示されなくなります。

Oracle Enterprise Manager 製品のアップグレードの調整

リリース 2.x またはリリース 9.x のリポジトリを使用しており、リポジトリを最新のリリースにアップグレードする場合、すべての Oracle Enterprise Manager コンポーネントが最新のリリースにアップグレードされるまで、リポジトリのアップグレードは実行しないでください。

Enterprise Manager リポジトリは共有されるため、リポジトリのアップグレードを、リポジトリを共有するすべてのマシン上の新しい Oracle Enterprise Manager ソフトウェアのインストールと調整することが重要です。リポジトリをアップグレードしない場合、新しいバージョンのソフトウェアは、そのリポジトリと一緒に動作しません。

リポジトリをアップグレードすると、旧バージョンのソフトウェアは、そのリポジトリと一緒に動作しません。Management Server を含む Oracle Enterprise Manager の基本システムと Oracle Enterprise Manager パックはどちらも 1 つのリポジトリを共有するため、引き続きすべてのユーザーが作業を実行する場合は、リポジトリのアップグレードが、関連するすべてのマシンにおけるソフトウェア・アップグレードと調整されていることを必ず確認してください。

Enterprise Manager コンソール、個別にライセンスを取得できるパック、Management Server およびリポジトリは、すべて同じリリースを使用してください。たとえば、リリース 9.x のコンソールでリリース 2.2 の Management Server およびリポジトリを使用することも、リリース 2.2 のパックでリリース 9.x の Management Server およびリポジトリを使用することもできません。

既存の Management Server およびリポジトリが以前のバージョンである場合は、それらを最新バージョンにアップグレードできます。Management Server およびリポジトリをリリース 9.x にアップグレードする場合には、リポジトリで使用するすべての Enterprise Manager 製品がリリース 9.x となるようにしてください。たとえば、Diagnostics Pack リリース 2.2 または Change Management Pack リリース 2.2 を使用したまま、Management Server およびリポジトリをリリース 9.x にアップグレードしないでください。

注意： Enterprise Manager リリース 2.2 のレポート・ウィザードでスケジュールおよび生成されたレポートは、リリース 9.2 にアップグレードできません。

リポジトリ・アップグレードの Configuration Assistant の手順

リポジトリをアップグレードするには、次の手順に従います。

注意： リポジトリのすべてのジョブおよびイベントの詳細は、バイナリ・フィールドに格納され、情報は保護されます。また、データ自体は、スキーマ所有者名を使用して暗号化されます。したがって、Enterprise Manager リポジトリを別のデータベースに移動できますが、そのリポジトリの所有者は同じスキーマ名を持つ必要があります。リポジトリのスキーマ名は変更できません。あるユーザーから別のユーザーにリポジトリをエクスポート / インポートした場合、複合化キーは一致せず、ジョブおよびイベントは使用できなくなります。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、3-2 ページの [「Enterprise Manager Configuration Assistant の起動」](#) を参照してください。

構成操作

「ようこそ」ページで「次へ」をクリックすると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「既存のリポジトリを更新します。」オプションを選択し、「次へ」をクリックして処理を続行します。「リポジトリのデータベースの選択」ページが表示されます。

リポジトリのデータベースの選択

アップグレードするリポジトリが含まれているデータベースにログインします。

リポジトリをアップグレードするには、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続してください。Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたリポジトリ・スキーマには、この手順に必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするために、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、`system/manager` です。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、3-12 ページの「[リポジトリのデータベースの選択](#)」を参照してください。

ログインに成功すると、「リポジトリの選択」ページが表示されます。

アップグレードのためのリポジトリの選択

アップグレードするリポジトリを選択する場合、「リポジトリの選択」ページには、リリース 2.0、2.1、2.2 および 9.0.1 のリポジトリのみが表示されます。このような場合、Enterprise Manager Configuration Assistant ではリリース 9.2 のリポジトリは表示されません。これらのリポジトリは最新リリースなので、アップグレードする必要がないためです。

ユーザー名：リポジトリのユーザー名です。

バージョン：リポジトリのバージョンです。

タイプ：リポジトリのタイプです。タイプは、「Enterprise」または「スタンダードアロン」のいずれかです。Oracle Enterprise Manager が Management Server に接続される場合、Enterprise リポジトリが使用されます。Management Server に接続せずに Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、アプリケーションによってはスタンダードアロン・リポジトリが必要になります。

該当するリポジトリを選択し、「次へ」ボタンをクリックして操作を続行します。

指定されたデータベースにリリース 2.x またはリリース 9.0.1 のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」をクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「戻る」をクリックして前のページに戻り、別のデータベースに接続します。

リポジトリへのログイン情報

「リポジトリへのログイン情報」ページに、リポジトリ・ユーザー・パスワードを指定します。

リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、指定されたユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成しました。

リポジトリをアップグレードするには、リポジトリ・データベースに対して、このユーザーでログインする必要があります。

前のページで選択した結果として、「ユーザー名」フィールドには、リポジトリ・ユーザー名が挿入されます。ただし、パスワードは入力する必要があります。

「次へ」をクリックして処理を続行します。「リポジトリ更新のサマリー」ページが表示されます。

リポジトリ更新のサマリー

「リポジトリ更新のサマリー」ページには、リポジトリのアップグレード・セッション中に、指定したすべての情報の概要が表示されます。「終了」をクリックしてリポジトリのアップグレードを開始するか、「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

リポジトリ更新の「Configuration Assistant の進行」

「終了」をクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理手順が表示されます。各処理手順は、1行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細を表示」をクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。「詳細を非表示」をクリックすると、テキスト領域を非表示にできます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」は「閉じる」に変わります。

エラーなくすべての手順が完了した場合、「処理が完了しました。」メッセージが表示されます。

「取消」をクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。ただし、操作を取り消すと、リポジトリは使用不可能になります。

終了したら「閉じる」をクリックします。

Configuration Assistant のアップグレード操作中、Oracle Management Service が存在せず、アップグレードされているリポジトリが実際にローカル Management Server で使用されている場合にのみ、Oracle Management Service が作成されます。

既存リポジトリの削除

リポジトリを削除するには、DBA 権限を持つユーザーとして、データベースに接続してください。

リポジトリを削除し、ローカル Management Server でそのリポジトリが使用される場合にそのローカル Management Server の構成を解除するには、次の項で説明する手順に従います。

Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止

リポジトリを削除する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。

このリポジトリを使用中の Management Server がある場合、リポジトリを削除するとサーバー・エラーが生じます。

Configuration Assistant の起動

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、3-2 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

「構成操作」でのリポジトリの削除

「ようこそ」ページで「次へ」をクリックすると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「既存のリポジトリを削除します。」オプションを選択し、「次へ」をクリックして処理を続行します。「リポジトリのデータベースの選択」ページが表示されます。

削除するリポジトリのデータベースの選択

削除するリポジトリが含まれているデータベースにログインします。データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。

Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたリポジトリ・スキーマには、この手順に必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、`system/manager` です。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、3-12 ページの「[リポジトリのデータベースの選択](#)」を参照してください。ログインに成功すると、「リポジトリの選択」ページが表示されます。

削除するリポジトリの選択

削除するリポジトリを選択した場合、「リポジトリの選択」ページには、リリース 2.0 以上のすべてのリポジトリが表示されます。

該当するリポジトリを選択し、「次へ」ボタンをクリックして操作を続行します。

ユーザー名：リポジトリのユーザー名です。

バージョン：リポジトリのバージョンです。

タイプ：リポジトリのタイプです。タイプは、「Enterprise」または「スタンダードアロン」のいずれかです。Oracle Enterprise Manager が Management Server に接続される場合、Enterprise リポジトリが使用されます。Management Server に接続せずに Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、アプリケーションによってはスタンダードアロン・リポジトリが必要になります。

指定されたデータベースにリリース 2.x またはリリース 9.x のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」をクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「戻る」をクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

リポジトリの削除オプションの選択

「リポジトリの削除オプションの選択」ページから、リポジトリ・ユーザーとそのスキーマ・オブジェクトをすべて削除することも、リポジトリ・オブジェクトのみを削除することもできます。

リポジトリのみを削除する場合は、リポジトリ・ユーザーのパスワードを指定する必要があります。これは、Enterprise Manager Configuration Assistant でリポジトリに接続し、Oracle Enterprise Manager の SQL の削除スクリプトをコールできるようにするためです。リポジトリ・オブジェクトのみが削除されます。リポジトリの他のスキーマ・オブジェクトは残ります。

リポジトリ・ユーザーとそのすべてのスキーマ・オブジェクトを削除する場合、パスワードは不要です。この手順を継続する前に、そのスキーマに他に重要なオブジェクトがないか確認してください。これを確認しないと、貴重なデータが失われる可能性があります。

現在 / 最新のバージョンではないリポジトリを選択した場合、有効な選択は、リポジトリ・ユーザーの削除のみです。削除スクリプトでは、最新 / 現在のバージョンのみ処理できます。

Configuration Assistant では、管理対象のリポジトリが `omsconfig.properties` ファイルで指定されていることが認識されても、そのリポジトリを削除しない場合は、Management Server の構成は変更されません。

管理対象のリポジトリを削除すると、Configuration Assistant では、Management Server の構成が消去されます。

「次へ」をクリックして処理を続行します。「リポジトリ削除のサマリー」ページが表示されます。

リポジトリ削除のサマリー

「リポジトリ削除のサマリー」ページには、リポジトリ削除操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。

「終了」をクリックしてリポジトリ削除を開始するか、または「戻る」をクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

リポジトリ削除の「Configuration Assistant の進行」

「終了」をクリックすると、「Configuration Assistant の進行」 ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理手順が表示されます。各処理手順は、1行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細を表示」をクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。「詳細を非表示」をクリックすると、テキスト領域を非表示にできます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」は「閉じる」に変わります。

エラーなくすべての手順が完了した場合、「処理が完了しました。」メッセージが表示されます。

「取消」をクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

終了したら「閉じる」をクリックします。

構成後の Management Server の管理

構成後、Management Server は、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散を実現します。通知の中央エンジンである Management Server では、すべてのシステム管理作業の処理と、これらの作業の企業全体での分散管理が行われます。

この項の内容は、次のとおりです。

- ローカル Management Server の起動
- Management Server のステータスのチェック
- ローカル Management Server の停止

ローカル Management Server の起動

Management Server を起動する前に、Management Server で使用するリポジトリ・データベースを起動してオープンし、データベース・リスナーを起動しておく必要があります。

Windows でのローカル Management Server の起動

Windows で Management Server を起動するには、次の手順に従います。

1. 「スタート」メニュー > 「設定」 > 「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。

2. リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を保存するように選択していない場合（セキュア Management Server モードと呼ばれる）は、Management Server の起動時に、データベース・ユーザーの作成に使用されたリポジトリのユーザー名とそのユーザーのパスワードを「コントロールパネル」の「スタートアップパラメータ」フィールドに入力できます。「スタートアップパラメータ」フィールドは、サービス・リストの下にあります。データベース・ユーザーおよびパスワードは、<username>/<password>の形式で指定してください。

「コントロールパネル」の「スタートアップパラメータ」フィールドに無効または不完全なリポジトリ接続情報を入力した場合、Management Server は起動されず、エラー・メッセージが表示されます。

セキュア・モードの場合、「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しないと、後でダイアログ・ボックスで情報を入力するように要求されます。

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、F-11 ページの「[Management Server が起動されない場合](#)」を参照してください。

3. 「Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer」サービスを選択します。
4. 「スタートアップ」をクリックして、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。

注意： 手順 4 は、サービスを起動するたびではなく、1 回だけ実行してください。

- a. 「スタートアップの種類」セクションで「自動」または「手動」オプションを選択し、Management Server サービスをどのように起動するかを指定します。「手動」を選択した場合は、ユーザーが Management Server を起動します。「自動」を選択すると、システムを起動するたびに Management Server が自動的に起動されます。「使用不可」を選択した場合は、Management Server を起動できません。デフォルトでは、Configuration Assistant によりサービスは「手動」に設定されます。
- b. 「ログオン」セクションで、次の設定を確認します。
 - * 「システムアカウント」オプションが選択されていることを確認します。このオプションは、Management Server を実行するためにサポートされている方法です。アカウントを使用する場合、Management Server は稼働しません。
 - * 「デスクトップとの対話をサービスに許可」オプションが選択されていることを確認します。選択されていない場合、Management Server は稼働しません。

5. 「開始」ボタンをクリックして、Management Server を起動します。

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant をインストール・セッションから起動し、リポジトリ接続情報を保存するように選択した場合、Management Server サービスはリポジトリ作成時に Windows で自動的に起動され、「手動」に設定されます。

リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、Management Server の起動時に「コントロールパネル」の「サービス」内の「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログ・ボックスでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX でのローカル Management Server の起動

UNIX で Management Server を起動するには、コマンドラインから次のように入力します。

```
% oemctl start oms
```

リポジトリの構成時に、リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、(データベース・ユーザーの作成で使用された) リポジトリのユーザー名、およびそのユーザーのパスワードを、接続情報を要求された際に入力します。リポジトリ所有者の定義の詳細は、3-13 ページの「[リポジトリへのログイン情報](#)」を参照してください。

注意： 環境変数 ORACLE_HOME が、Management Server が稼働している Oracle ホームに設定されていると、Management Server は、正しい Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームでクラス・ファイルを探そうとするため、Management Server は正しく起動されません。Oracle 環境の設定の詳細は、F-11 ページの「[Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合](#)」を参照してください。

Management Server のステータスのチェック

Windows または UNIX でローカル Management Server が実行されているか停止しているかをチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで次のように入力します。

```
% oemctl ping oms
```

Windows または UNIX でローカル Management Server のステータスをチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで、次のように入力します。

```
% oemctl status oms
```

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。

Windows または UNIX でリモート Management Server のステータスをチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで、次のように入力します。

```
% OEMCTL STATUS OMS SYSMAN/<password>@<hostname of Management Server machine>
```

たとえば、次のように指定します。

```
% OEMCTL STATUS OMS SYSMAN/SYSMAN@DLSUN2305
```

OEMCTL STATUS OMS で返される情報は、次のようになります。

- Management Server のバージョン
- Management Server が稼働しているかどうか、および稼働時間
- ターゲット・データベース・セッション件数

セッション中のターゲット・データベース数を示します。ターゲット・データベース・セッションは、ユーザーが（ナビゲータの「データベース」フォルダの下のデータベースを展開して）データベースに接続しようとしたときに取得されます。データベース・セッションを必要とするたびにオープンおよびクローズするのは非効率的なので、特定数のターゲット・データベース・セッションをプールに保持し、Management Server で、それ以上の数がオープンされる前にこれらのセッションを使用するようにします。
- 処理キューに入れられた操作

処理を待機しているアクティビティ数を示します。アクティビティには、ジョブの発行、イベントの登録、電子メールの送信または他のメンテナンス・プロシージャが含まれます。
- ドメイン内の OMS システムの数

企業内で稼働している Management Server の数とホスト名を示します。
- ログインしている管理者者数

この Management Server にログインした Enterprise Manager 管理者数を示します。
- リポジトリ・セッション・プールの深さ

Oracle Intelligent Agent へのジョブの発行およびイベントの登録などの操作を実行する、データベース・リポジトリから Oracle Management Server の間で使用可能なセッション数を示します。デフォルトでは、セッション・プールの深さは 15 に設定されています。このデフォルト値は、ほとんどの環境で十分な値です。ジョブの発行およびイベントの登録時にリポジトリ・セッションが使用されるので、管理チームが多くのアクティビティを実行する場合にのみ、このデフォルト値を調整する必要があります。
- リポジトリ・セッション件数

プール内の現在のリポジトリ・セッション数を示します。Management Server で、Enterprise Manager リポジトリの情報の取出しまたは更新を必要とするタスクが実行される場合、リポジトリ・セッションが取得されます。たとえば、ジョブまたはイベントの発行、グループ、ジョブ履歴、登録済イベントなどの表示などのタスクがあります。セッションを必要とするたびにオープンおよびクローズするのは非効率的なので、特定数のリポジトリのセッションをプールに保持し、Management Server で、それ以上の数がオープンされる前にこれらのセッションを使用するようにします。Management Server は、起動時に約 5 ~ 7 個のセッションを保持します。

たとえば、次のような出力が示されます。

```
OEMCTL for Windows NT: Version 9.2.0.1.0
Copyright (c) 1998, 2002 Oracle Corporation. All rights reserved.
```

```
The Oracle Management Server on host [znripley-pc.ovenbird.com] is functioning properly.
```

```
The server has been up for 0 00:00:25.953
```

```
Target database session count: 0 (session sharing is off)
Operations queued for processing: 1
Number of OMS systems in domain: 1 (znripley-pc.ovenbird.com)
Number of administrators logged in: 0
Repository session pool depth: 15
Repository session count: 8 in-use and 1 available, pool efficiency: 18%
```

ローカル Management Server の停止

ローカル Management Server を停止するには、次の手順を実行します。

Windows の場合 :

1. 「スタート」メニュー > 「設定」 > 「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer」サービスを選択します。
3. 「停止」をクリックして、Management Server を停止します。

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。

UNIX の場合 :

コマンドラインで、次のように入力します。

```
% oemctl stop oms
```

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。

Management Server への接続時の コンソールの構成

リリース 9.0 から、Enterprise Manager コンソールまたはその他各種の Enterprise Manager アプリケーションを起動する際、製品をスタンドアロンで起動するか（すなわち、中間層の Management Server に接続しない）、Management Server に接続して起動するか選択するよう要求されます。コンソールをスタンドアロンで起動すると、1人の管理者がデータベース管理を直接実行できるのに対し、コンソールを中間層の Management Server に接続して起動すると、複数管理者間の管理データの共有、潜在的な問題の事前の通知、繰り返される管理タスクの自動化などのより包括的な管理機能が使用できます。この章では、中間層の Management Server への接続時の Enterprise Manager コンソールの構成方法を説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- [Management Server 接続によるコンソールの起動](#)
- [使用環境のノードの検出](#)
- [管理者アカウントの作成](#)
- [データベースの優先接続情報リストへの OEM_MONITOR ロールの付与](#)
- [ジョブ・システムの有効化](#)
- [電子メール・サーバーの構成](#)
- [Enterprise Manager ポケットベル・サーバーの起動](#)
- [Enterprise Manager レポート作成の構成](#)
- [ダイアルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成](#)
- [Windows でのシステム色の使用](#)
- [Enterprise Manager のデータベース管理領域へのアクセスのカスタマイズ](#)
- [Oracle LogMiner Viewer の使用](#)

注意： レポート作成機能を除き、これらの機能はスタンドアロン・コンソールでは使用できません。

Management Server へのログインによるコンソールの起動の選択

Enterprise Manager コンソールの起動時、製品をスタンドアロンで起動するか、Management Server に接続して起動するかを選択するよう要求されます。

図 4-1 Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン



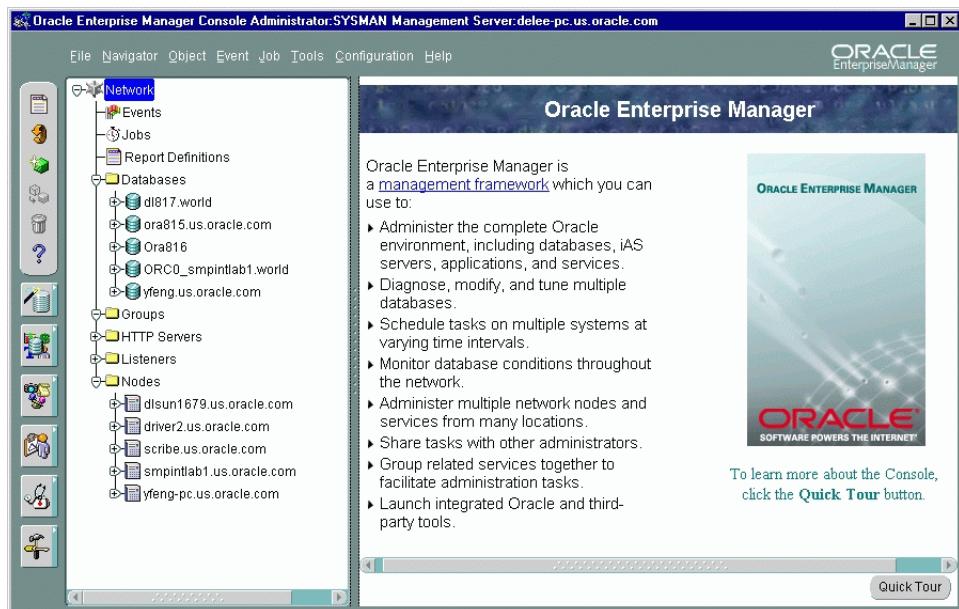
注意： Management Server にログインしてコンソールを起動する前に、まず Management Server をインストールし、構成する必要があります。インストールの説明は、インストレーション・ガイドを参照してください。構成の詳細は、[第3章「Management Server の構成および管理」](#)を参照してください。

次の機能を使用する場合、Management Server へのログインによるコンソールの起動を選択します。

- 異なるいくつかのターゲット・タイプ（たとえば、データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）の管理
- 複数の管理者間での管理データの共有
- 潜在的な問題の事前の通知

- 繰り返される管理タスクの自動化
- バックアップおよびデータ管理ツール
- レポートのカスタマイズ、スケジューリングおよび公開
- Web ブラウザ内からのクライアントの実行
- LogMiner Viewer

図 4-2 Management Server と接続するコンソール



Management Server 接続によるコンソールの起動

Windows プラットフォームで、「スタート」メニューからコンソールを起動します。

サポートされているプラットフォームで、次のコマンドを入力し、コマンドラインからコンソールを起動します。

```
oemapp console
```

UNIX プラットフォームでは、コマンドラインの `oemapp` 部分は大文字と小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

前述のオプションはすべて、「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」ウィンドウで表示されます。「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」ウィンドウを表示しない場合は、コマンドラインに次のコマンドを入力し、自動的に Management Server に接続してコンソールにログインできます。

```
oemapp console oem.loginmode= 
oms oem.credential=<username>/<password>@<management server>
```

図 4-3 Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン



「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されたら、「**Oracle Management Server にログイン**」オプションを選択し、Management Server に最初にログインする場合はデフォルトの接続情報である Enterprise Manager 管理者名とパスワード、および Management Server マシン名を入力します。デフォルトの Enterprise Manager 管理者名は sysman で、そのパスワードは oem_temp です。選択または入力したノード上の Management Server は、アクセスするリポジトリで構成されている必要があります。

注意： Management Server とともに使用するリポジトリを、特定のスタンドアロン統合アプリケーションで使用するスタンドアロン・リポジトリと混同しないようにしてください。

Management Server が稼働しているノード名がリストに表示されない場合、編集フィールドにノード名を入力するか、次の手順に従います。

1. 「Management Server」フィールドの右側にある「**Management Server**」をクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「追加」をクリックします。「Management Server の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 3. Management Server が稼働しているノード名を指定して、「OK」をクリックします。
- 「Management Server」ダイアログ・ボックスを使用して Management Server を追加した場合、その Management Server がログイン・ウィンドウに戻ったときの現行の選択になります。

注意： Oracle Enterprise Manager によりノード名が解決され、マシンの標準名が使用されることがあります。以降のダイアログ・ボックスでは、この名前が使用されます。たとえば、znripley-pc という名前は znripley-pc.us.ovenbird.com という名前に変更される場合があります。

最初に sysman/oem_temp でログインした後に、セキュリティ・ダイアログ・ボックスが表示され、ここでデフォルトの sysman パスワードを変更できます。指定するパスワードには、大文字と小文字の区別はありません。Enterprise Manager の管理者のパスワードには、パスワードの最初または最後の空白以外は、任意の文字を指定できます。

使用環境のノードの検出

Oracle Enterprise Manager には、ネットワーク・ノードおよびマシンを識別し、コンソールのナビゲータに検出されたノードおよびターゲットを移入するための、検出ウィザードがあります。データベースやリストナーなどの検出済ターゲットは、Enterprise Manager で管理できます。

コンソールは管理の中核部であるため、管理しているすべてのターゲットをウィンドウから確認できます。

Management Server が稼働しているマシンに Intelligent Agent がインストールされていて稼働している場合、コンソールの起動時には、そのマシンで管理可能なターゲットが自動的に検出されます。コンソールのナビゲータには、すべての検出されたターゲットが表示されます。

使用中の環境内のノードに存在する追加のノードおよびターゲットを検出するには、次のようにします。

1. 「ナビゲータ」メニューから「ノードの検出」を選択します。
2. 検出ウィザードが表示された場合は、概要を確認し、「次へ」をクリックして処理を続行します。
3. 「ノードの指定」ページが表示された場合は、フィールドにノード名または IP アドレスを指定します。フィールドに、検出するノードまたは IP アドレスを、空白、カンマ、タブまたは改行区切りで入力するか、「インポート」ボタンを使用してノード名のテキ

スト・ファイルをインポートすると、複数ノードのターゲットを一度に検出できます。「次へ」をクリックして処理を続行します。

4. 「進行」ページが表示され、ノード検出の状態が示されます。ノードが正常に検出された場合は、チェックマークが表示されます。ノードの検出に失敗した場合は、「X」が表示されます。エラーが発生した場合、エラーの理由を説明するエラー・メッセージが表示され、処理を続行するのに必要な情報が示されます。検出プロセスが終了した後で、「終了」をクリックします。
5. 「検出結果」ダイアログ・ボックスが表示され、自動的に検出された、または検出されなかったノードが示されます。「OK」をクリックしてダイアログ・ボックスを閉じます。

ノードで自動検出に失敗した場合は、「進行」ページの「次へ」ボタンをクリックします。「エラー」ページが表示され、ここで失敗したノードに対して、再試行、スキップまたは手動による検出を行うかどうかを選択できます。

検出に失敗したノードの一部で Intelligent Agent が稼働している場合は、そのノードをナビゲータに追加し、手動検出を使用してそのノードにデータベースを追加できます。

手動検出では、次の情報を入力するように要求されます。

- データベース名
- SID
- 通信に使用する TCP/IP ポート

ノードを手動で追加した場合、ノードに対するイベントの登録またはジョブの発行はできません。

注意： 手動で検出されたノードは、自動検出を行う前にナビゲータから削除しておく必要があります。

ノードが検出できない場合は、そのノードが停止していないか、またはノードで Intelligent Agent が稼働しているかを確認してください。また、TCP/IP ネットワーク・プロトコルを使用しているかどうかも確認します。ノードの検出の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

注意： 同じ名前のターゲットが 2 つ以上検出された場合、ターゲット・タイプに関係なく、検出されたターゲットの一方のみがナビゲータに表示されます。

6. 通常の Enterprise Manager 管理者が定義されている場合、「ターゲットへのアクセス」ページが表示され、スーパー管理者は、通常の Enterprise Manager 管理者に対してコン

ソールのナビゲータに表示する内容を制御できます。これにより、スーパー管理者は、特定のユーザーに対するカスタマイズしたナビゲータを作成できます。ページには、複数列のリストが表示されます。最初の列には、コンソールのナビゲータに表示されるすべてのオブジェクトが示されます。オブジェクト名の隣の + 記号をクリックすると、オブジェクトが展開されます。スーパー管理者により定義された Enterprise Manager 管理者それぞれに対し、1つの列が存在します。通常の管理者がナビゲータ内で特定のオブジェクトを表示できるようにするには、その管理者に属する列で、ナビゲータのエントリに対応する行のボックスを選択します。

7. 「終了」をクリックします。

管理者アカウントの作成

Enterprise Manager は、複数管理者システムです。つまり、Enterprise Manager を使用してシステムを管理する人それぞれが、Management Server への接続によるコンソールへのログインに使用する管理者アカウントを持ちます。

Enterprise Manager をインストールすると、レポートのユーザーおよび sysman という名前のスーパー管理者が 1 つずつ作成されます。スーパー管理者 sysman は、「構成」メニューの「管理者の管理」項目を使用して管理者を作成できます。各アカウントには、管理者名とパスワードの他に、スーパー管理者アカウントであるか、またはジョブまたはイベント（あるいはその両方）のみにアクセスできるアカウントであるかを指定できます。

この 2 種類のアカウントには、次のような違いがあります。

- **スーパー管理者**には、すべてのオブジェクトに対する完全な権限が自動的に設定されます。セキュリティを強化するには、スーパー管理者のみがコンソールのナビゲータからターゲットを検出、リフレッシュまたは削除できるようにします。
- 大部分のスーパー管理者は、日常的な操作用に別のアカウントも持ちはますが、新しい Enterprise Manager 管理者の作成、ポケットベル・サーバーまたは電子メール・サーバーの構成、管理リージョンの定義、または他の管理者へのターゲットへのアクセス権の付与など、スーパー管理者のみが実行できる特別な操作には、スーパー管理者アカウントを使用します。日常の管理作業での sysman アカウントの使用は、お薦めできません。スーパー管理者アカウントは UNIX の root のように、削除も名前変更もできないユーザーです。あらゆるタスクを実行できるユーザーであるため、環境を設定する場合にのみ使用してください。
- **通常の管理者**は、コンソールの操作のサブセットにアクセスでき、スーパー管理者にアクセスを許可されたターゲットのみ表示できます。管理者による表示可能な内容のカスタマイズの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

通常、すべての管理者が Enterprise Manager のリポジトリ 1 つを共有するため、管理者同士で情報を共有できます。Enterprise Manager のリポジトリは、Management Server で共有されます。スタンダードアロン・リポジトリではありません。複数のリポジトリを設定できますが、異なるリポジトリを使用する管理者は他の管理者の情報にアクセスできないため、リポ

ジトリ間でのデータの共有はできません。リポジトリに格納されている管理データは、管理者の持つ許可に基づいてフィルタ処理されます。

管理者アカウントごとに、優先接続情報リストを設定する必要があります。管理者が Management Server を介して管理対象ターゲットに接続する場合、その管理者に明示的に定義された優先接続情報リストが使用されます。

コンソールの「構成」メニューの「管理者の管理」オプションで、Enterprise Manager の管理者を作成、編集および削除する方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

データベースの優先接続情報リストへの OEM_MONITOR ロールの付与

Oracle 8.0.6 以上のデータベースでは、Oracle データベース作成スクリプトによって OEM_MONITOR ロールが作成されます。このロールによって、データベースに対するイベントの登録や、コンソールのナビゲータを介したデータベース内のオブジェクトの参照などの Enterprise Manager 内のデータベース機能にアクセスすることができます。このような機能を使用するには、これらの操作を実行するためのデータベース接続情報が必要になります。多くの管理者は、データベース接続情報に高度な DBA ロールを付与するよりも、これらの操作を実行するのに必要最小限の権限を設定します。データベース接続情報に OEM_MONITOR ロールを付与すれば、これらの操作に必要最小限の権限がユーザーに設定されます。

注意： OEM_MONITOR ロールは、SYS アカウントを使用して作成する必要があります。

次の手順を実行します。

1. OEM_MONITOR というロールを作成します。

```
drop role OEM_MONITOR;
create role OEM_MONITOR;
```

2. connect ロールを OEM_MONITOR に付与します。

```
grant connect to OEM_MONITOR;
```

3. システム権限の analyze any および create table を OEM_MONITOR に付与します。

```
grant analyze any to OEM_MONITOR;
grant create table to OEM_MONITOR;
```

4. sc_role.sql に定義されているように SELECT_CATALOG_ROLE ロールを作成します。

5. SELECT_CATALOG_ROLE を OEM_MONITOR ロールに付与します。

```
grant select_catalog_role to OEM_MONITOR;
```

これで、Enterprise Manager でデータベース優先接続情報リストとして使用される OEM_MONITOR ロールをデータベース・ユーザーに付与できます。ユーザーに OEM_MONITOR ロールを付与する他にも、ユーザー・アカウントの QUOTA が UNLIMITED に設定されていることを確認する必要があります。

「連鎖行」イベント・テストでは、結果を表にして分析する必要があるため、analyze any と create table の両方の権限が必要です。

注意： analyze any 権限は、索引再作成イベントで統計を計算するときに使用されます。

ジョブ・システムの有効化

Enterprise Manager 管理者がジョブを正常に発行するには、特定の構成手順を実行する必要があります。

- 管理者がジョブの発行を計画している Intelligent Agent マシンに対して、拡張ユーザー権限「バッチジョブとしてログオン」を持つオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントが存在する必要があります。Windows NT、Windows 2000 および Windows XP プラットフォームで稼働している Intelligent Agent マシンにのみ適用されます。
- Windows NT、Windows 2000 および Windows XP では、ユーザーは Administrators グループのメンバーである必要があります。この目的においての新しいオペレーティング・システム・ユーザーの作成または既存のユーザーの編集の詳細は、後述の項を参照してください。
- 優先接続情報リストは、ジョブが発行されるノードに対して設定する必要があります。Windows NT、Windows 2000 および Windows XP で使用される優先接続情報リストは、拡張ユーザー権限である「バッチジョブとしてログオン」を持つオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントと同じである必要があります。優先接続情報の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
- 拡張ユーザー権限を持つオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントには、%ORACLE_HOME%\NETWORK ディレクトリに対する読み込み / 書込み権限、および TEMP ディレクトリまたは ORACLE_HOME ディレクトリに対する読み込み、書き込み、更新および削除権限がある必要があります。

注意：「バッチ ジョブとしてログオン」権限を設定しない場合、ノードでジョブを実行しようとすると、「ユーザー認証に失敗しました。」というメッセージが表示されます。

ジョブが発行される Windows プラットフォームの管理対象ノードごとに、Windows プラットフォームのユーザー・アカウントを作成する必要があります。次の 3 つの手順のいずれかに従ってください。

さらに、一部のジョブの出力は極めて大量になることがあるため、Oracle Enterprise Manager にはジョブの出力の最大サイズを指定するオプションがあります。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Windows NT の新規ユーザー・アカウントの作成

Intelligent Agent がインストールされている Windows NT マシンで新規の Windows NT ユーザー・アカウントを作成し、このユーザーに「バッチ ジョブとしてログオン」権限を付与するには、次の手順を実行します。

1. Windows の「スタート」メニューで、「プログラム」>「管理ツール」>「ユーザー・マネージャ」を選択します。
2. 「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択して、次のことを確認します。
 - 「ユーザーは次回ログオン時にパスワード変更が必要」オプションが選択されている。
 - ユーザー名として SYSTEM または system が使用されていない。
3. 「新しいユーザー」プロパティ・シートの「グループ」をクリックします。
4. 左矢印ボタンをクリックして、「所属しないグループ」リストの「Administrators」項目を「所属するグループ」リストに移動します。「OK」をクリックします。
5. 「ユーザー・マネージャ」ウィンドウで、「原則」メニューの「ユーザーの権利」を選択します。
6. 「高度なユーザー権利の表示」オプションを選択します。
7. 「権利」リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
8. 選択したユーザーにこの権限を付与します。

既存の Windows NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て

既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「ユーザー・マネージャ」パネルでユーザーをダブルクリックし、次のことを確認します。

- 「ユーザーは次回ログオン時にパスワード変更が必要」オプションが選択されている。
 - ユーザー名として SYSTEM または system が使用されていない。
2. 「ユーザーのプロパティ」ページの「グループ」をクリックします。
 3. 左矢印ボタンをクリックして、「所属しないグループ」リストの「Administrators」項目を「所属するグループ」リストに移動します。「OK」をクリックします。
 4. 「ユーザー マネージャ」ウィンドウで、「原則」メニューの「ユーザーの権利」を選択します。
 5. 「高度なユーザー権利の表示」オプションを選択します。
 6. 「権利」リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
 7. 「追加」をクリックします。「ユーザーとグループの追加」ウィンドウが表示されます。
 - a. 「追加する名前」リストからドメインを選択します。
 - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
 - c. リストからドメインを選択します。
 - d. 「追加」をクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。
 8. 「ユーザー権利の原則」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

Intelligent Agent ユーザーとしての Windows NT ドメイン・ユーザーの構成

注意： Windows NT のドメイン・ユーザーは、マシンがプライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) の場合のみ機能します。これ以外の場合は、「VNI-2015: 認証エラー」でジョブが失敗します。PDC 以外のすべての環境では、アカウントはマシンに対してローカルにしてください。

Intelligent Agent ユーザーとしてドメイン・ユーザーを構成するには、次の手順を実行します。

1. 「ユーザー マネージャ」ウィンドウで、「原則」メニューの「ユーザーの権利」を選択します。
2. 「高度なユーザー権利の表示」オプションを選択します。
3. 「権利」リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。

4. 「追加」をクリックします。
 - a. 「追加する名前」リストからドメインを選択します。
 - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
 - c. リストからドメインを選択します。
 - d. 「追加」をクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。
5. 「ユーザー権利の原則」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

注意: ローカル・ユーザーとドメイン・ユーザーの名前が同じである場合、ローカル・ユーザーが優先されます。ドメイン・ユーザーを設定する場合には、ドメイン・パスワードにローカル・パスワードと同じものを設定して、このドメイン・ユーザー・アカウントを使用してジョブを発行したときに、スケジュールされたジョブを実行できるようにします。

電子メール・サーバーの構成

管理者が電子メールで通知を受けるには、まずスーパー管理者はコンソールから電子メール・サーバーを構成する必要があります。

1. コンソールの「構成」メニューで、「**ポケットベル / 電子メールの設定**」を選択します。「**ポケットベル / 電子メールの設定**」ダイアログ・ボックスが表示されます。デフォルトでは、「**電子メール設定**」はすでに選択されています。
2. 「**SMTP メール・ゲートウェイ**」フィールドに、SMTP メール・ゲートウェイが存在するノードを入力します。たとえば、mailserver.company.com と入力します。
3. 「**送信者の SMTP メール・アドレス**」フィールドに、電子メールの送信者の識別に使用する名前を入力します。

SMTP メール構成の完了後、電子メールの通知を受信するすべての管理者に対して通知およびスケジュールの作業環境を指定する必要があります。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーの起動

Enterprise Manager にはポケットベル・サーバーがバンドルされており、管理者はイベントやジョブの通知をポケットベルで受信できます。数字または英数字を表示するポケットベルがサポートされていますが、英数字を表示するポケットベルでは次のいずれかのポケットベル・サービス・プロトコルを利用する必要があります。

- TAP (Telocator Alphanumeric Protocol)

- GSM (Global System for Mobile Communications)
- FLEX-TD (FLEX Time-Diversity Protocol)

注意： 数字を表示するポケットベルは、Windows 2000 ではサポートされていません。

ほとんどのポケットベル・サービス・プロバイダは、電子メール・メッセージをポケットベルに送信するサービスをサポートしています。電子メールを送信するオプションがプロバイダに用意されている場合は、Enterprise Manager ポケットベル・サーバーをインストールおよび構成しないことも可能です。

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーをインストールしない場合、電子メール通知の作業環境（図 4-4 「電子メールの作業環境」）またはポケットベル通知の作業環境（図 4-5 「ポケットベルの作業環境」）を構成するときに、受信者の電子メール・アドレスとしてポケットベルの電子メール・アドレスを指定することができます。

図 4-4 電子メールの作業環境

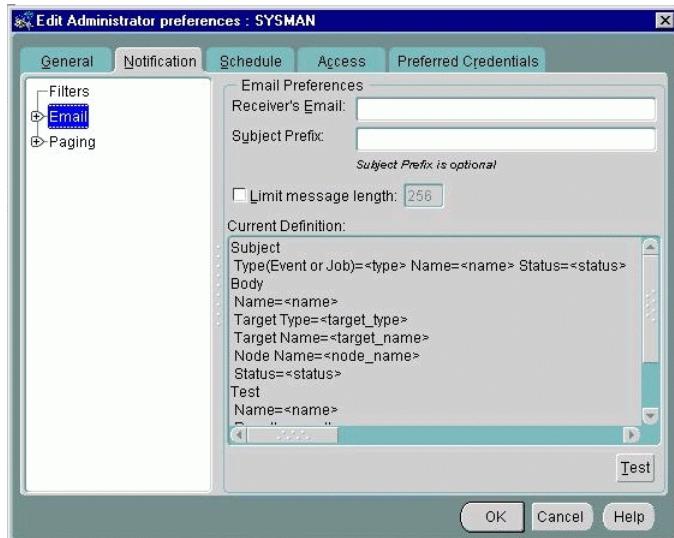
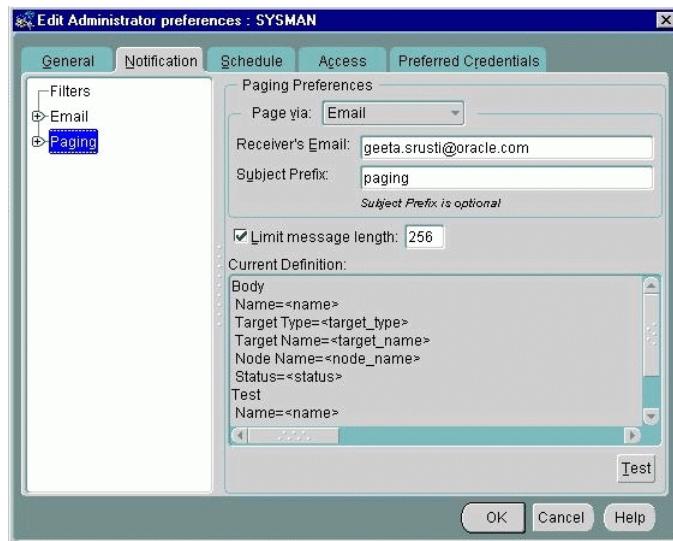


図 4-5 ポケットベルの作業環境



ポケットベルの作業環境で電子メールを経由したポケットベルを指定する場合、ポケットベルの通知スケジュールとフィルタを基に行われます。Enterprise Manager では、電子メールの通知スケジュールおよびフィルタとポケットベルの通知スケジュールおよびフィルタを区別できます。[図 4-6 「電子メールのフィルタとポケットベルのフィルタ」と図 4-7 「ポケットベルのスケジュール」](#) を参照してください。

図 4-6 電子メールのフィルタとポケットベルのフィルタ

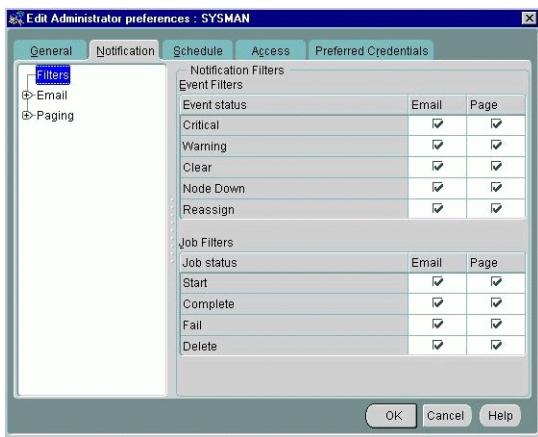
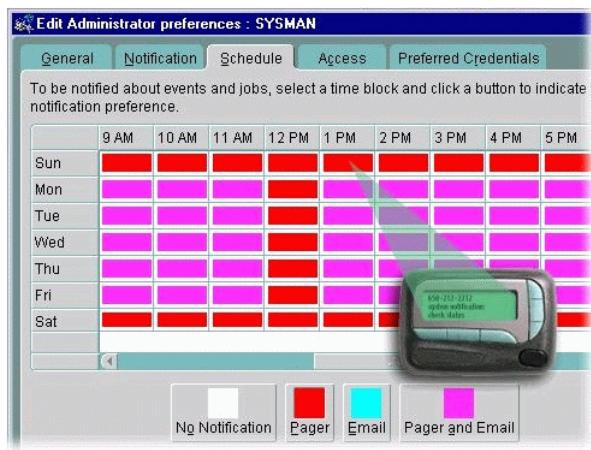
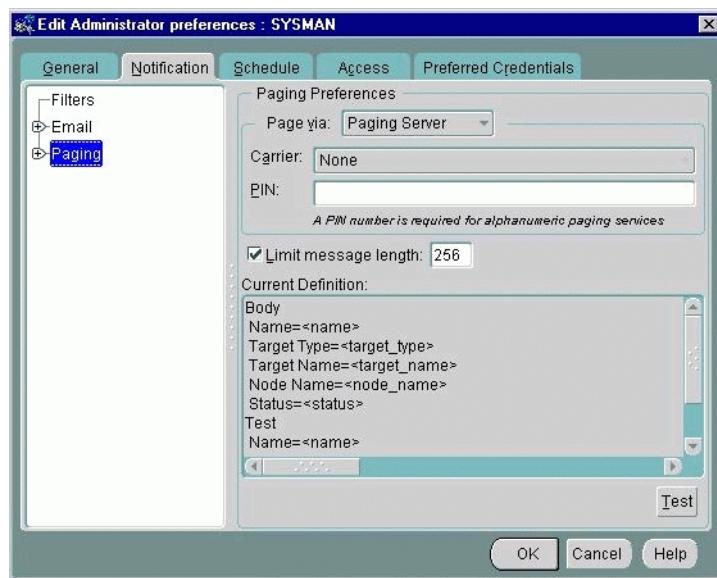


図 4-7 ポケットベルのスケジュール



管理者は、電子メール通知の場合は 1 つまたは複数のアドレス（複数の場合はカンマで区切る）、ポケットベル通知の場合は電話番号か電子メール・アドレスを指定します。これにより、管理者は両方の通知メソッドに異なるスケジュール、フィルタおよびメッセージ形式を指定できます。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

図 4-8 ポケットベル・サーバーを使用するポケットベル



Enterprise Manager ポケットベル・サーバーは、Oracle Management Serverとともに、Windows NT、Windows 2000 または Windows XP に自動的にインストールされます。UNIX プラットフォームにはインストールできません。

注意： Enterprise Manager ポケットベル・サーバーにはモデムが必要です。ポケットベル・サーバーをインストールするマシンにモデムが装備されていることを確認してください。

特定の Windows プラットフォームにポケットベル・サーバーのみをインストールするときは、Windows または UNIX オペレーティング・システムの Enterprise Manager コンソールからポケットベル・サーバーを構成できます。

配置された Enterprise Manager には、1 つのポケットベル・サーバーのみが必要です。

ポケットベル・サーバーを配置するための最も一般的な 2 つのオプションを次に示します。

図 4-9 「Windows NT マシン上の Management Server」に示す配置では、コンソールを 1 台のマシンに配置し、Management Server を（リポジトリに接続されている）別の Windows NT マシンに配置します。ポケットベル・サーバーとモデムは、Management Server と同じ Windows NT マシンに配置します。

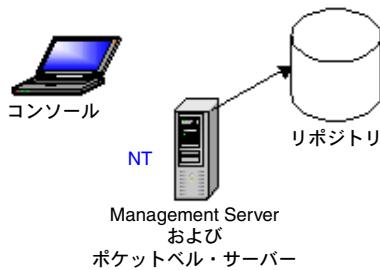
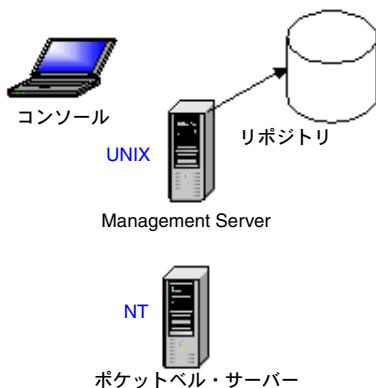
図 4-9 Windows NT マシン上の Management Server

図 4-10 「UNIX マシン上の Management Server」 に示す配置では、コンソールを 1 台のマシンに配置し、Management Server を（リポジトリに接続されている）別の UNIX マシンに配置します。ポケットベル・サーバーとモデムを 1 台の Windows NT マシンに配置します。

図 4-10 UNIX マシン上の Management Server

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーのインストールによって、ポケットベル・サーバーのサービスは自動的に開始および構成されません。インストール後にモデムの設定を指定し、ポケットベル・サーバーのサービスを手動で開始して、Enterprise Manager コンソールからポケットベル・サーバーを構成する必要があります。

モデムの設定を指定するには、次の手順に従います。

1. Windows の「スタート」メニューから、「設定」>「コントロールパネル」をクリックします。

2. 「モデム」をダブルクリックします (Windows NT の場合)。
3. 「モデム プロパティ」ページで「ダイアルのプロパティ」をクリックし、次のパラメータを設定して、ダイアル方法を指定します。
 - ダイアルする市外局番。
 - ダイアルする国。
 - 外線にアクセスする方法。外線にアクセスする際にダイアル番号が必要ない場合は、このフィールドは空白にしておいてください。
4. 「ダイアルのプロパティ」ページで「OK」をクリックします。
5. 「モデム プロパティ」ページの「プロパティ」をクリックし、最高速度パラメータを設定します。「OK」をクリックします。最高速度は 9600 ボーに設定することをお薦めしますが、各自のシステムに最適なボー・レートを設定してください。

注意: ボー・レートを 9600 よりも大きな値に設定すると、ポケットベル・サービス・キャリアでデータが失われることがあります。9600 というモデムのボー・レートは、推奨値にすぎません。ご使用のシステムに最適のボー・レート設定を見つけてください。

ポケットベル・サーバーを起動するには、次の手順に従います。

1. Windows の「スタート」メニューから、「設定」>「コントロール パネル」をクリックします。
2. 「サービス」をダブルクリックします。
3. 「Oracle<ORACLE_HOME_NAME>PagingService」を選択し、「開始」をクリックします。

コマンド・プロンプトで次のように入力して、ポケットベル・サーバーを起動することもできます。

```
oemctl start paging
```

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーの構成

管理者が Enterprise Manager ポケットベル・サーバーからポケットベル通知を受信するには、最初にスーパー管理者がコンソールからポケットベル・サーバーを構成する必要があります。

ポケットベル・サーバーの追加

Enterprise Manager コンソールにポケットベル・サーバーを追加するには、次の操作を実行します。

1. 「構成」メニューから「ポケットベル/電子メールの設定」を選択します。「ポケットベル/電子メールの設定」プロパティ・シートが表示されます。
2. リストの「ポケットベル設定」をクリックし、現在のポケットベル・サーバー情報を表示します。
3. 「サーバーの追加」をクリックします。「ポケットベル・サーバーの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. ポケットベル・サーバーを実行するマシンの名前を入力します。たとえば、smpqa-pc と入力します。
5. 「OK」をクリックします。

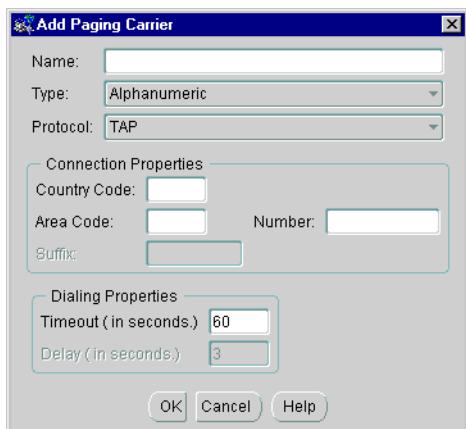
指定したホスト名のポケットベル・サーバーがコンソールによって検出されない場合は、エラーが表示されます。

ポケットベル・サーバーが検出されると、リストの「ポケットベル設定」オブジェクトの下に、新しいポケットベル・サーバー・オブジェクトが追加されます。新しいポケットベル・サーバーにはポケットベル・キャリアはありません。ポケットベルが機能するためには、少なくとも 1 つのポケットベル・キャリアを追加する必要があります。

ポケットベル・キャリアの追加

1. 「構成」メニューから「ポケットベル/電子メールの設定」を選択します。「ポケットベル/電子メールの設定」プロパティ・シートが表示されます。
2. リストの「ポケットベル設定」オブジェクトを展開します。以前に追加したポケットベル・サーバーの 1 つをクリックし、右側の詳細ビューの「キャリアの追加」ボタンをクリックします。「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. テキスト入力フィールドに、必要な情報を入力します。ポケットベル・キャリアの定義後は、「ポケットベル / 電子メールの設定」リストで該当するポケットベル・サーバーおよびキャリアのオブジェクトを展開すると、ポケットベル・キャリアが表示されます。[図 4-11 「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログ・ボックス](#) を参照してください。
4. 「OK」をクリックします。

図 4-11 「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログ・ボックス



■ 名前

ポケットベル・キャリアの名前。フィールドでは、英数字およびアンダースコアを使用できます。

■ タイプ

ポケットベル・キャリアのタイプ。Enterprise Manager では、「英数字」または「数字」がサポートされています。

■ プロトコル

「TAP」、「FLEXTD」または「GSM」。プロトコル選択は、キャリアの「タイプ」が「英数字」の場合にのみ使用可能になります。

■ 接続プロパティ

- * 国コード：国際通話の場合、ポケットベルにダイアルするときに使用する国コード。
- * 地域コード：このポケットベルが所在する国で使用される地域コード。
- * 番号：ポケットベルのローカル・ダイアル番号。
- * 接尾辞：これにより、ポケットベル・キャリアからのボイス・メッセージの識別が可能になり、ポケットベルで呼び出される人は、プッシュボン使用時に複数のオプションから選択できます。たとえば、カンマは休止として使用できます。「接尾辞」フィールドでは、整数、カンマ、pond記号および星印（アスタリスク）を入力できます。このオプションは、ポケットベル・キャリア・タイプが「数字」に設定されている場合にのみ使用可能になります。

- ダイアル・プロパティ
 - * タイムアウト (秒) : ポケットベルの呼出しに成功するまでに許容される最大ダイアル時間。
 - * 遅延 (秒) : ダイアルまでの遅延時間。このオプションは、ポケットベル・キャリア・タイプが「数字」に設定されている場合にのみ使用可能になります。

ポケットベル通知の作業環境の指定

ポケットベル・サーバー構成の完了後、ポケットベル通知を受信するすべての管理者に対して通知およびスケジュールの作業環境を指定する必要があります。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Enterprise Manager レポート作成の構成

Enterprise Manager のレポート作成システムにより、管理者には柔軟なレポート作成機能が提供され、企業のすべての監視対象システムのステータスの情報へのアクセスが速く、容易になります。管理者は、多様な企業システムのレポートを作成、スケジュールおよび公開できます。Web サイトに公開すると、広範囲にわたるユーザーがレポートにアクセスできるようになり、管理者からマネージャ、役員にいたるまで、あらゆるユーザーが監視対象企業の情報にすばやくアクセスできます。

公開されたレポートにアクセスするには、Enterprise Manager Web Site コンポーネントがインストールされていることを確認してください。デフォルトでは、\$ORACLE_HOME/oem_webstage ディレクトリの下に Management Server とともにインストールされています。また、Enterprise Manager Web Site では、事前構成済の Oracle HTTP Server が自動的にインストールされ、レポート作成 Web サーバーとして機能します。プラウザベースの Enterprise Manager 用にデフォルトで使用される HTTP サーバーと同じです。

注意： リリース 2.2 のレポートはリリース 9.x にアップグレードできません。

Management Server のインストール時、事前構成済の Oracle HTTP Server が自動的にインストールおよび起動され、レポート作成 Web サーバー（プラウザベースの Enterprise Manager 用に使用される Web サーバーと同じ）として機能します。また、レポート作成機能も自動的にインストールされます。ただし、Enterprise Manager Reporting Web サイトにアクセスするには、手動による追加の手順が必要です。

コンソールから実行する手順

1. REPORTS_USER 管理者のデフォルトのパスワード (`oem_temp`) を変更します。

- a. Enterprise Manager コンソールで、「構成」メニューの「管理者の管理」を選択します。「管理者アカウントの管理」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - b. リストから「REPORTS_USER」を選択します。
 - c. 「編集」をクリックします。「編集 管理者作業環境」プロパティ・シートが表示されます。
 - d. 「パスワード」フィールドに新規パスワードを入力し、「パスワード確認」フィールドに新規パスワードを再入力します。
 - e. 「OK」をクリックしてパスワードを設定します。
2. 中央の Enterprise Manager Reporting Web サイトからデータベース・レポートを参照する場合は、REPORTS_USER への優先接続情報を設定します。また、その他の Enterprise Manager 管理者が今後作成するデータベース・レポートにも、独自のデータベース優先接続情報を設定する必要があります。
 3. 重要なサービス・レベル・レポートに対応するすべてのサービスに、ターゲットの起動・停止イベントを登録します。登録しない場合、Availability by Service Report に可用性データが収集されていないサービスに 100% の起動時間が表示されますが、Overall Availability 棒グラフの後に、レポート作成可能なデータがないこと示すテキストが表示されます。
 4. Reporting Web サイトの傾向情報を表示する「傾向」タブを表示するには、収集および関連する分析を Capacity Planner から使用可能にする必要があります。そうしないと、「傾向」タブは表示されません。

Management Server/HTTP Server マシンから実行する手順

1. Management Server プロセスが起動されていることを確認します。
2. UNIX マシンの場合、
 - a. Web ブラウザからレポートにアクセスした X ウィンドウ・マシンで、xhost +<host> コマンドを実行します。たとえば、レポート作成 Web サーバーがホスト servlet1 で実行され、X ウィンドウがホスト xserv1 で実行されている場合は、xserv1 で次のコマンドを実行します。

```
xhost +servlet1
```
 - b. レポート作成 Web サーバーが実行されているホストで、X ウィンドウ・マシンの名前で環境変数 DISPLAY を指定します。たとえば、レポート作成 Web サーバーがホスト servlet1 で実行され、X ウィンドウがホスト xserv1 で実行されている場合は、servlet1 で次のコマンドを実行します。
 - * コマンド・シェルが C シェルの場合: setenv DISPLAY xserv1:0.0
 - * コマンド・シェルが B シェルまたは K シェルの場合:
DISPLAY=xwerv1:0.0; export DISPLAY

- c. X ウィンドウ環境が正しく構成されていることを確認します。たとえば、`xclock` コマンドを実行します。X サーバー（レポート作成 Web サーバー）で `xclock` ウィンドウが表示されれば、X ウィンドウ環境は正しく構成されています。
3. `apachectl stop` および `apachectl start` を使用して、Oracle HTTP Server を停止および再起動します。
4. `$ORACLE_HOME/oem_webstage/` ディレクトリにある `oem.conf` ファイルを確認し、`ServerName` ディレクティブの値を控えておきます。
5. Management Server/HTTP Server の `$ORACLE_HOME/bin` ディレクトリから `oemctl configure rws` を実行します。次の情報を入力するプロンプトが表示されます。
 - Web サーバー・ホスト名：前述の手順 4 で、`oem.conf` の `ServerName` ディレクティブとして控えておいた名前を指定します。
 - Web サーバー・ポート番号：デフォルトは 3339 です。
 - Oracle Management Server ホスト名：前述の手順 4 で、`oem.conf` の `ServerName` ディレクティブとして控えておいた名前を指定します。
 - REPORTS_USER のパスワード：`oem_temp` 以外のパスワードを指定します。「[コンソールから実行する手順](#)」の手順 1 に従って、パスワードを変更します。
 - 履歴データの保存に別の場所を指定するかどうか。
履歴データは、Oracle Management Server リポジトリ（No）または別のリポジトリ（Yes）に保存できます。デフォルトは No で、履歴データは Management Server リポジトリに保存されます。別のデータベースに履歴データを保存する場合は、そのデータベースにユーザー名、パスワードおよび別名を入力する必要があります。

Reporting Web サイトの URL へのアクセス

1. 次の URL を入力します。
`http://<webserver host name>:3339`
2. 「Access Reports」ボタンをクリックします。

注意： Oracle HTTP Server でなく Internet Information Server (IIS) 5.0 を使用して、Windows 2000 でレポートを起動する場合は、oem.conf ファイルを変更して、ポート 8099 でレポートを構成する必要があります。ポート 3339 は、リリース 9.2.0 に付属の Oracle HTTP Server で使用され、ポート 8099 は Internet Information Server (IIS) の Web サーバーで使用されます。レポートを起動するには、次の URL を入力します。

`http://<webserver host name>:8099`

「Access Reports」ボタンをクリックします。

サービス可用性レポートの注意事項

ノードが停止すると、サービス可用性レポートに、停止時間ではなく「不明時間」と表示されます。これは、コンソールまたはレポート作成ホームページで表示されるノードの状態と一致しています。ノード可用性は、ノードでなくエージェントへの ping で判断できます。エージェントを使用できない場合、ノードの状態は不明であると判断できます。ネットワークが待機または停止したり、ノードが停止する場合があります。

ダイアルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成

正しい TCP/IP 構成が必要です。TCP/IP 構成が間違っていると、タイムアウトになり、接続が失われます。

注意： DHCP による動的 IP アドレスは、Management Server または Intelligent Agent を実行しているノードではサポートされません。DHCP は、Enterprise Manager クライアントでのみサポートされます。

コンソールの接続にダイアルアップ回線を使用する場合は、コンソール・マシンで動的 IP アドレスが取得されます。この動的 IP アドレスは、オペレーティング・システム (Windows 2000、Windows NT、Windows 98) によって Enterprise Manager アプリケーションに送信されます。

オペレーティング・システムが正しい IP アドレスを返すには、ネットワーク通信プロトコル (TCP-IP) を、Dynamic Host 構成プロトコル (DHCP) を使用して、IP アドレスが取得されるように構成する必要があります。

設定を指定するには、次の手順に従います。

1. Windows の「スタート」メニューから、「設定」>「コントロールパネル」をクリックします。

2. 「ネットワーク」をダブルクリックします。
 3. 「プロトコル」タブを選択します。
 4. 「TCP/IP プロトコル」をダブルクリックします。
- 重要:** イーサネットを介して同じマシンをネットワークに接続するときに、設定を元に戻せるように、前の設定を控えておいてください。「IP アドレス」、「サブネットマスク」および「デフォルトゲートウェイ」フィールドに指定した設定は、ファイルにコピーしてください。
5. 「IP アドレス」ページで「DHCP サーバーから IP アドレスを取得する」オプションを選択します。
 6. 「OK」をクリックします。
 7. ダイアルアップ回線を介して、ネットワークに接続します。これで、コンソールを起動できるようになります。

注意: Web ブラウザから実行していない場合には、変更後、システムを再起動する必要があります。

Windows でのシステム色の使用

%ORACLE_HOME%\sysman\config\ClientConfig.properties ファイルに次の行を追加すると、使用する色を設定できます。

```
user.color.scheme=System
```

この値は、有効な色のスキーマに設定できます。現時点で使用可能な色のスキーマは、Blue、Khaki、Olive、Purple、Red、Teal、Titanium または System です。この値では、大文字と小文字は区別されません。

Blue、Khaki、Olive、Purple、Red、Teal、Titanium または System は、現在プロパティに設定できる値です。user.color.scheme プロパティを設定すると、コンソールの色のスキーマが基本色からプロパティで指定された色に変更されます。System は、システムのデフォルト・プロパティを使用する唯一の色のスキーマです。

使用した色のスキーマが有効にならない場合は、oemapp trace console コマンドを使用してクライアントのトレースをオンにします。この場合は、レベル 2 のトレースを使用します。トレースの出力で、「色のスキーマ」を検索します。この情報があるのは、トレース出力の上部です。不適切な値が入力されている場合は、トレース・ファイルに次のテキストが表示されます。

```
Unrecognized Color Scheme: <>
Color Schemes: ...
```

Enterprise Manager のデータベース管理領域へのアクセスのカスタマイズ

Oracle Enterprise Manager リリース 9.x では、データベース管理の特定領域へのアクセスを制限して、ナビゲータにデータベース管理情報を表示しないようにすることができます。

注意： 手動による編集ではエラーが起きたため、エラーが発生した場合に現行の Oracle Enterprise Manager の環境を回復できるように、編集の前に OEMClient.properties ファイルのバックアップを作成することをお薦めします。このファイルのデータは非常に重要であり、編集でエラーが生じることなく使用できる必要があります。

たとえば、新規ユーザーの作成のみをロールとするデータベース管理者は、Security Management のみにアクセスする必要があります。Schema Management、Instance Management、Storage Management などへのアクセスは必要ありません。

注意： アクセスの制限はデータベース管理に適用されます。この手順でイベント、ジョブ、グループなどへのアクセスをカスタマイズすることはできません。

データベース管理アクセスを制限するには、次の手順に従います。

1. クライアントの \$ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリに OEMClient.properties ファイルを配置します。
2. OEMClient.properties ファイルのバックアップを作成して、エラーが発生した手順から戻れるようにします。
3. /category/ を含むエントリの組を検索します。

たとえば、次のように指定します。

```
/com/oracle/sysman/em/category/storage/order=3  
/com/oracle/sysman/em/category/storage/class=oracle.sysman.vtg.VtgStorageCategory
```

4. ポンド記号 (#) を付けて、管理領域ごとに 2 つのエントリに注釈を記述します。

たとえば、次のように指定します。

```
#/com/oracle/sysman/em/category/storage/order=3  
#/com/oracle/sysman/em/category/storage/class=oracle.sysman.vtg.VtgStorageCategory
```

管理領域は管理対象データベースのナビゲータには表示されません。

Oracle LogMiner Viewer の使用

Oracle LogMiner Viewer は、Oracle9i LogMiner ユーティリティへの使いやすい Graphical User Interface (GUI) を提供します。LogMiner Viewer を使用すると、データベースで実行されたアクティビティを分析するために、オンライン REDO ログ・ファイルおよびアカイブ REDO ログ・ファイルを問い合わせることができます。ユーザーは、REDO ログ・ファイルを選択したり、データに適用するフィルタを指定したり、問合せ結果を表示することができます。また、後で使用するために、問合せおよび結果を保存することも可能です。

LogMiner Viewer の起動には、Oracle Enterprise Manager コンソールから起動する方法と、別のアプリケーションとして起動する方法があります。

Oracle Enterprise Manager コンソールの使用

Oracle Enterprise Manager コンソールから LogMiner Viewer を起動するには、Oracle Management Server にログインする必要があります。Oracle Enterprise Manager コンソールをスタンドアロン・モードで起動している場合は、LogMiner Viewer を起動することはできません。

コンソールにログインした後、「ツール」>「データベース・アプリケーション」>「LogMiner Viewer」を選択して、LogMiner Viewer を起動します。

別のアプリケーションとしての LogMiner Viewer の起動

別のアプリケーションとして LogMiner Viewer を起動するには、Oracle Management Server にログインするか、スタンドアロン・モードで起動するかを決定する必要があります。

- Oracle Management Server にログインすると、検出されたノードのすべてのデータベースにアクセスできます。検出されたデータベースは、ナビゲータ・ツリーに表示されます。
- スタンドアロン・モードで起動すると、Oracle Enterprise Manager コンソールに追加したすべてのデータベースにアクセスできます。追加したデータベースは、ナビゲータ・ツリーに表示されます。データベースに関する情報は、ローカル・レコードに保存されます。

別のアプリケーションとして LogMiner Viewer を起動する方法は、次のとおりです。

- UNIX プラットフォームでは、次のように入力します。

```
oemapp lmviewer
```
- Windows NT では、「プログラム」メニューから「Oracle_home」>「Database Administration」>「LogMiner Viewer」を選択します。

詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください。

5

Web ブラウザからの Enterprise Manager コンソールの実行

この章では、Web ブラウザからの Enterprise Manager コンソールおよびその管理アプリケーションの実行方法について説明します。

Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行

Oracle Enterprise Manager では、管理者は、製品がインストールされている任意のマシンでターゲットを管理できます。管理者は、サポートされる Web ブラウザから Enterprise Manager コンソールを実行するために Enterprise Manager Web Site を配置できます。

注意： ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager は、Windows 2000、Windows XP、Windows NT および Windows 98 のオペレーティング・システム の Web ブラウザでのみサポートされています。

すべての Enterprise Manager 製品およびアプリケーションのうち、次のものは、Web 対応していません。

- Oracle Diagnostics Pack
 - Oracle Capacity Planner
 - Oracle Trace Data Viewer
- Oracle Tuning Pack
 - Oracle Expert
 - Oracle 索引チューニング・ウィザード
 - Oracle SQL Analyze

- 統合アプリケーション
 - Oracle Directory Manager
 - Oracle Net Manager

注意： ブラウザベースの Enterprise Manager から Management Pack アプリケーションを参照するには、接続しようとしている Management Server マシンに、対応する Management Pack をインストールする必要があります。

Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager を実行するには、次のインストールおよび構成手順を実行します。

クライアント・インストール

サポートされている Web ブラウザが、Web 対応の Enterprise Manager が稼働するクライアント・マシンにインストールされているかを確認します。

サポートされている Web ブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Navigator 4.7 (Windows NT、Windows 2000、Windows XP および Windows 98)
- Microsoft Internet Explorer 5.0 (Windows NT、Windows 2000 および Windows 98)
- Microsoft Internet Explorer 5.5 (Windows NT、Windows 2000 および Windows 98)
- Microsoft Internet Explorer 6.0 (Windows XP)

注意： Microsoft Active Desktop から実行されている Microsoft Internet Explorer の使用はサポートされていません。

サーバー側インストール

1. Enterprise Manager Web Site コンポーネントがインストールされていることを確認します。

デフォルトでは、\$ORACLE_HOME/oem_webstage/ ディレクトリの下に Management Server とともにインストールされています。また、Enterprise Manager Web Site では、事前構成済の Oracle HTTP Server が自動的にインストールされ、その Web サーバーとして機能します。Oracle HTTP Server は自動的に起動されます。これは、ブラウザベースの Enterprise Manager Reporting Web サイトで使用される HTTP サーバーと同じです。

2. Oracle HTTP Server を起動するには、次の手順を実行します。

Windows NT の場合 :

Oracle HTTP Server を起動するには、次のようにします。

- a. Windows の「スタート」メニューから、「設定」>「コントロールパネル」をクリックします。
- b. 「サービス」をダブルクリックします。
- c. 「OracleHTTPServer_<Oracle_Home_Name>」サービスを選択します。
- d. 「開始」をクリックして、Oracle HTTP Server を起動します。

UNIX の場合 :

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を起動できます。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/apachectl start
```

Oracle HTTP Server を停止するには、次の手順を実行します。

Windows NT の場合 :

Oracle HTTP Server を停止するには、次のようにします。

- a. Windows の「スタート」メニューから、「設定」>「コントロールパネル」をクリックします。
- b. 「サービス」をダブルクリックします。
- c. 「OracleHTTPServer_<Oracle_Home_Name>」サービスを選択します。
- d. 「停止」をクリックして、Oracle HTTP Server を停止します。

UNIX の場合 :

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を停止できます。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/apachectl stop
```

ブラウザベースの Enterprise Manager 用にデフォルトで構成済の Oracle HTTP Server 1.3.22.0.0a 以外の Web サーバーを使用する場合は、他にサポートされている Web サーバーをインストールし、手動で構成する必要があります。他にサポートされている Web サーバーには、次のものがあります。

- Oracle9i Application Server 1.0.2.2.2 (Sun SPARC Solaris、Windows NT および Windows 2000)
- Apache 1.3.22 (Sun SPARC Solaris、Windows NT および Windows 2000)
- Microsoft Internet Information Server 4.0 (Windows NT)
- Microsoft Internet Information Server 5.0 (Windows 2000)

ブラウザベースの Enterprise Manager とともに使用する Oracle HTTP Server 以外のサーバーの構成例は、5-7 ページの「[Web サーバーおよび Web サイトのディレクトリ・マッピングの構成](#)」を参照してください。

クライアントでのブラウザベースの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行

図 5-1 emwebsite.html ページ

The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager web interface. At the top, there's a banner with the Oracle logo and the text "Enterprise Manager". Below the banner, there are two main sections: "Launch the Oracle Enterprise Manager Console" and "Access Oracle Enterprise Manager Reports".

Launch the Oracle Enterprise Manager Console

The "Launch the Oracle Enterprise Manager Console" section contains a text input field labeled "Oracle Management Server:" containing "smpbuild4.us.oracle.com", a "Launch Console" button, and a "Documentation" link.

Access Oracle Enterprise Manager Reports

The "Access Oracle Enterprise Manager Reports" section contains a text input field labeled "Reporting Web Server:" containing "smpbuild4.us.oracle.com", a "Port:" input field containing "3339", a "Access Reports" button, and a "Documentation" link.

Information

- [Documentation](#)
- [Release Notes](#)
- [Quick Tours](#)

Useful Links

- [Oracle Home Page](#)
- [Enterprise Manager Home Page](#)
- [Support Home Page](#)

[Download Plug-in](#)

[Accessibility Setup](#)

前述の構成手順を実行すると、ブラウザベースで Oracle Enterprise Manager を実行できるようになります。

注意： Web ブラウザから Enterprise Manager を実行するには、各自の Web ブラウザで使用する目的で構成されているプロキシを削除する必要があります。プロキシを削除するには、次の方法があります。

- Web ブラウザのプロキシ設定を使用して、ネットワークに直接接続するようを選択します。または、
- プロキシを手動で構成するように選択します。ここでは、Enterprise Manager Web Site を実行している Web サーバーのプロキシを使用しないよう指定します。

プロキシで問題が発生した場合は、F-16 ページの [「Web ブラウザのトラブルシューティング」](#) を参照してください。

1. Web ブラウザをオーブンして、Web サーバーがインストールされている場所に関係なく、次の URL を指定します。

`http://<webserver hostname>:<port number>/`

たとえば、次のようにになります。

`http://znripley-sun.us.ovenbird.com:3339/`

注意：デフォルトの事前構成済 Oracle HTTP Server のポート番号は 3339 です。

索引 (`emwebsite.html`) ページが表示されます。索引ページでは、Enterprise Manager コンソール、Enterprise Manager Reporting Web サイトおよびドキュメントを起動でき、各種の Web サイトにアクセスできます。Enterprise Manager Reporting Web サイトの設定の詳細は、4-21 ページの [「Enterprise Manager レポート作成の構成」](#) を参照してください。

2. この索引ページからコンソールを起動する場合は、接続する Management Server のマシン名を入力し、「コンソールの起動」をクリックします。公開済の Enterprise Manager レポートにアクセスする場合、(デフォルトと異なる場合は) レポート作成 Web サーバーのホスト名およびポート番号を入力し、「レポートへのアクセス」をクリックします。ボタンをクリックする前に Enterprise Manager レポート作成を構成する必要があります。Enterprise Manager Reporting Web サイトの設定の詳細は、4-21 ページの [「Enterprise Manager レポート作成の構成」](#) を参照してください。
3. 初めてこの URL を入力する場合は、Oracle JInitiator Plug-in 1.1.8.18o をインストールする必要があります。

Netscape では、プラグインのインストールを自動的に要求されます。

注意：初回のみプラグインをインストールするように要求されますが、インストール前にこれを終了または取り消すと、次回にブラウザベースの Enterprise Manager を起動しても、インストールは要求されなくなります。このような場

合にプラグインをインストールするには、索引ページの「Download Plug-in」を選択して Java プラグインをダウンロードします。

Microsoft Internet Explorer では、索引ページの「Download Plug-in」を選択すると、プラグインをダウンロードできます。

4. プラグインのページの指示に従って、プラグインをダウンロードします。ご利用のマシンおよびネットワーク環境によっては、プラグインのダウンロードに時間がかかることがあります。
5. Java プラグインをインストールすると、ダイアログ・ボックスが表示され、次のような説明が表示されます。

コンソール・アプリケーションは、ブラウザ・ウィンドウから起動されます。ダイアログ・ボックスを閉じると、アプリケーションが停止します。

アプリケーションはこのブラウザ・ウィンドウから起動されているため、コンソールを停止せずに Oracle Enterprise コンソール・ウィンドウを閉じることはできません。

コンソールを終了せずに、emwebsite.html ページを終了できます。

また、「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されます。

注意 : ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager を最初に起動するときは時間がかかることがあります。また、ダイアルアップ接続を行っている場合には、ダウンロード時間が長くなりますが、回線スピードによって時間は異なります。ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager を初めて起動するときは、進捗状況ダイアログ・ボックスが表示されます。

6. Oracle Enterprise Manager に初めてログインする場合は、デフォルトの接続情報（管理者名とパスワード）を入力します。

管理者 = sysman

パスワード = oem_temp

これらの接続情報は、デフォルトのスーパー管理者アカウントのものです。Enterprise Manager を最初に起動する場合は、このスーパー管理者としてログインしてください。スーパー管理者アカウントを使用して別の管理者アカウントがすでに作成されている場合は、別の管理者としてログインできます。

注意 : 指定した Management Server に接続できない場合は、索引 (emwebsite.html) ページに戻って、Management Server の別のマシン名を指定してください。「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

7. URL のブックマークを作成します。

注意：ブラウザベースの Enterprise Manager アプリケーションを実行する場合にアクセスできる URL は 1 つのみです。1 台のマシンから複数の URL を介してブラウザベースの Enterprise Manager アプリケーションにアクセスすることはできません。

Web サーバーおよび Web サイトのディレクトリ・マッピングの構成

ブラウザベースの Enterprise Manager 用にデフォルトで構成済の Oracle HTTP Server 以外の Web サーバーを使用する場合は、別のサポートされている Web サーバーをインストールし、手動で構成する必要があります。

Apache Server、Microsoft Internet Information Server および Oracle9i Application Server を構成するには、次の説明を参照してください。

Apache 1.3.22

1. Enterprise Manager Web Site を、Oracle HTTP Server なしでインストールします。
2. Apache 1.3.22 をインストールします。詳細は、Apache 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. Apache `home/conf/httpd.conf` にある `httpd.conf` を編集します。
4. `ScriptAlias` は、サーバー・スクリプトがどのディレクトリに含まれるかを制御します。`ScriptAlias` は、基本的には `Alias` 同じものですが、実際のディレクトリ (`realmname` ディレクトリ) のドキュメントが、(クライアントに送信されたドキュメントとしてではなく) アプリケーションとして処理され、リクエストされたときにサーバーで実行される点が異なります。

`ScriptAlias` では、後続の「/」は `Alias` の場合と同じルールで使用されます。

```
ScriptAlias /oem_webstage/cgi-bin/
"/private/ora92/oem_webstage/cgi-bin/"
```

注意：`/private/ora92/` は、Oracle ホームです。

5. 任意の数の別名を追加できます（制限はありません）。次の形式で指定します。

```
Alias fakename realname
```

`fakename` に後続の「/」が含まれている場合は、サーバーでは「/」も URL に含まれているとみなされます。この例では、「/icons」ではなく、「/icons/」が別名です。

```
Alias /icons/ "/usr/local/apache/icons/"
Alias /oem_webstage/ "/private/ora92/oem_webstage/"
```

注意：`/private/ora92/` は、Oracle ホームです。

6. ScriptAlias で定義された CGI ディレクトリが構成されている場合は、そのディレクトリに /apache/cgi-bin ディレクトリを変更します。

```
<Directory "/usr/local/apache/cgi-bin"> から  
<Directory "/private/ora92/oem_webstage/cgi-bin">  
AllowOverride all  
Allow from all  
</Directory>
```

7. Web サーバーを停止し、再起動します。

```
apachectl stop  
apachectl start
```

Internet Information Server (IIS)

Internet Information Server を使用するには、oem_webstage ディレクトリとそのディレクトリ内の 2 つのサブディレクトリを指す 3 つの仮想ディレクトリを作成する必要があります。oem_webstage ディレクトリは、Oracle Enterprise Manager Web Site コンポーネントをインストールすると、次のインストール手順で自動的に作成されます。

1. Enterprise Manager Web Site を、Oracle HTTP Server なしでインストールします。
2. Internet Information Server (IIS) をインストールします。詳細は、Internet Information Server 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. Internet Information Server を構成するために、Windows NT の「プログラム」メニューで、「Microsoft Internet Information Server」>「Internet Service Manager」を選択します。「Microsoft Internet Service Manager」ウィンドウが表示されます。
4. 「規定の Web サイト」を選択して右クリックすると、関連するサブメニューが表示されます。
5. 「プロパティ」をクリックして、プロパティ・シートを表示します。
6. ノードの IP アドレスが、プロパティ・シートに正しく設定されていることを確認します。次に「OK」をクリックします。
7. 「新規作成」>「仮想ディレクトリ」を選択します。
8. 仮想ディレクトリの名前を入力します。たとえば、oem_webstage と入力します。
9. 次のように設定します。

Alias: /oem_webstage

Path: %ORACLE_HOME%\oem_webstage

Access: Read、Execute

10. 設定を保存した後、「規定の Web サイト」を展開して、新しい仮想ディレクトリを表示します。
11. 新しい仮想ディレクトリ `oem_webstage` を選択します。
12. 「操作」をクリックし、「新規作成」>「仮想ディレクトリ」を選択して、次の設定で追加の仮想ディレクトリを作成します。

Alias: `cgi-bin`
 Path: `%ORACLE_HOME%\oem_webstage\cgi-bin`
 Access: Read、Execute
13. 追加の仮想ディレクトリを `\oem_webstage\java-plugin` という別名で、ディレクトリ `%ORACLE_HOME%\oem_webstage\java-plugin` に作成し、次のように設定します。

Alias: `java-plugin`
 Path: `%ORACLE_HOME%\oem_webstage\java-plugin`
 Access: Read-only

注意: 実行権限を与えないようにしてください。実行権限を与えると、プラグインをダウンロードできなくなります。
14. Web サーバーを再起動します。

Oracle9i Application Server

1. Enterprise Manager Web Site を、Oracle HTTP Server なしでインストールします。
2. このインストールから、すべてのサービスを停止します。
3. 同じマシンの異なる Oracle ホームに、Oracle9i Application Server をインストールします。インストールの詳細は、プラットフォーム固有の Oracle9i Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。
4. Oracle9i Application Server インストールから、\$ORACLE_HOME/oem_webstage ディレクトリの `oem.conf` を検索します。
5. `oem.conf` ファイルのすべてのディレクトリを、9.2 インストールの対応するディレクトリを指すように編集します。

たとえば、

```
/private/oracle/ias/oem_webstage
```

を次のように変更します。

```
/private/oracle/920rel10/oem_webstage
```

6. EMWebSite.html を検索し、`emwebsite.html` に変更します。

7. Oracle9i Application Server インストールから Apache Web サーバーを停止し、再起動します。

```
apachectl stop  
apachectl start
```

8. Web ブラウザを開いて、次の URL を入力します。

```
http://<webserver hostname>:<port number>/
```

次に例を示します。

```
http://znripley-sun.us.ovenbird.com:3339/
```

iAS Web サーバーに接続されている 9.2 クライアントが起動されます。

6

Oracle Management Server のチューニング

企業が多数のノードを管理しているような特殊な環境では、Management Server をチューニングしてパフォーマンスを向上させる必要があります。Management Server の構成パラメータを設定すると、チューニングを実行できます。後述の項を参照してください。

`omsconfig.properties` ファイルを編集した後に変更を有効にするには、Management Server をいったん停止してから再起動してください。

ping 間隔の設定

Management Server は、すべてのターゲットのホストの Agent に対して定義済の間隔で ping を実行し、Agent の可用性とそのターゲット・ホストを監視するように設計されています。

ping の実行間隔を管理するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用します。

```
oms.vdp.ping_interval=<integer; time in minutes; default 2>
```

Management Server では、実際には oms.vdp.ping_interval 値の半分の間隔で Agent に ping が実行されます。このパラメータをデフォルト値（2 分間）にしておくと、Management Server によって 1 分間隔で各 Agent に ping が実行されます。たとえば、Management Server で 10 分ごとに Agent に ping を実行する場合は、oms.vdp.ping_interval の値を 20 に設定します。

ノードの稼働または停止のイベント・テストがノードに対して登録されると、ノードの起動・停止イベントのステータスを調べるために Management Server による Agent への ping が実際に使用されます。Management Server が Agent に ping を実行したときに、Agent またはそのターゲット・ホストが使用不可能になっている場合は、ノードの稼働または停止のイベントによって適切なメッセージを選択します。

Management Server で多数のノード（64 個以上）を管理する場合、このパラメータを調整して、すべてのノードに対して ping を実行するのに十分な時間を Management Server に提供します。

最大発信接続数の設定

Management Server は、異なる Intelligent Agent への同時接続数を一定に維持できるように設計されています。

同時発信接続数を管理するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用します。

```
oms.vdg.max_out_conns =<integer; default 64>
```

デフォルトは 64 です。パフォーマンスが低下しないように、この値は、Management Server で管理されるノード数と同じか、それより大きく設定することをお薦めします。管理対象ノードの最大数が 64 未満の場合は、デフォルト値を適用することをお薦めします。管理対象ノードの最大数が 64 以上の場合は、値をノード数と同じに設定してください。

最大着信接続数の設定

Management Server は、同時着信接続数を一定に維持できるように設計されています。

同時着信接続数を管理するには、`omsconfig.properties` ファイルで次のプロパティを使用します。

```
oms.vdg.max_in_conns=<integer; default 32>
```

パフォーマンスが低下しないように、この値は `oms.vdg.max_out_conns` の値の半分に設定することをお薦めします。

Management Server 再試行間隔の設定

Management Server とリポジトリ・サーバーの接続が失われた場合、リポジトリ・サーバーとの再接続を試行するように Management Server を構成できます。Management Server は、次の 2 つのパラメータにより、定義済の間隔で再試行するように設計されています。

- `oms.repository.connect_timeout`
- `oms.repository.connect_numTries`

再試行間隔を指定するには、`omsconfig.properties` ファイルで次のプロパティを使用して、再試行間隔を設定します。

```
oms.repository.connect_timeout=<time in seconds>
oms.repository.connect_numTries=<integer>
```

`oms.repository.connect_timeout` は、Management Server がリポジトリ・データベースの起動を待機する最大時間（秒）です。

`oms.repository.connect_numTries` は、Management Server サービスの起動時に Management Server がリポジトリへの接続を試行する最大回数です。

Management Server がリポジトリへの接続を試行する間隔は、

`oms.repository.connect_timeout` の値を `oms.repository.connect_numTries` の値で割って計算されます。

デフォルトでは、プロパティは次のように設定されます。

```
oms.repository.connect_timeout=120
oms.repository.connect_numTries=12
```

Management Server は、起動時に 10 秒間隔で合計 12 回、リポジトリ接続を試行します。

一時的なネットワーク障害の回避

Management Server では、ノードが稼働しているか停止しているかを検出するために、毎回すべてのノードへの ping を試行します。

前回あるノードへの ping が正常に行われ、今回は失敗したことが検出された場合、このノードは停止しているものとしてマークされます。

次のパラメータで、一時的なネットワークの停止に対する ping の許容度を高くできます。

```
oms.vdg.conn_retries = (integer, default 1)
```

このパラメータでは、Management Server が ping または他の通信に対して接続を試行する再試行回数が指定されます。Management Server では、デフォルトは 1 に設定されています。つまり、接続の再試行は行いません。

一時的な停止が発生しやすいネットワークの場合、2 または 3 に設定してください。

```
oms.vdg.conn_retries_delay = (integer, default 5)
```

このパラメータでは、Management Server が接続を再試行するまでの待機時間（秒数）を指定します。

このパラメータは、ネットワークの停止時間に応じて値を設定する必要があります。

A

ディレクトリ構造

この付録では、Oracle Enterprise Manager のインストールで作成される重要なディレクトリおよびファイルについて説明します。

重要なディレクトリ

Enterprise Manager およびそのコンポーネントのインストールで作成される多くのディレクトリの中で、最も重要で役立つディレクトリを次に示します。

\$ORACLE_HOME/sysman/

このディレクトリの詳細は、後述します。

\$ORACLE_HOME/relnotes/em/

Enterprise Manager およびその管理アプリケーション固有の英語 README ファイルが含まれます。この英語 README ファイルには、実際の Oracle Enterprise Manager 製品とそのドキュメントに記述された機能との差異が示されます。

\$ORACLE_HOME/doc/em/

Enterprise Manager およびその管理アプリケーション固有の（ドキュメントの CD-ROM からのインストールで選択された）英語ドキュメントが含まれます。デフォルトでは、このディレクトリには、Oracle のパフォーマンス測定のガイドとして使用する HTML 形式の完全な診断ヘルプ・システムも含まれます。

\$ORACLE_HOME/oem_webstage/

Enterprise Manager Web Site のコンポーネントがあります。デフォルトの場合、Web サイトは Management Server とともに、このディレクトリにインストールされます。このコンポーネントにより、Enterprise Manager およびその管理アプリケーションを Web ブラウザから実行できます。

\$ORACLE_HOME/sysman/ ディレクトリ

\$ORACLE_HOME/sysman/ ディレクトリには、理解しておく必要があるいくつかのサブディレクトリが含まれます。

- admin
- config
- expert
- ifiles
- jlib
- log
- mesg
- report
- reporting
- temp

admin/

Enterprise Manager Configuration Assistant で、Management Server およびリポジトリの構成の実行に使用される SQL スクリプトおよびレジストリ・ファイルが含まれています。このディレクトリの内容は変更しないでください。

config/

Enterprise Manager コンポーネントのいくつかの構成ファイルが含まれます。このディレクトリ内の次のファイルのみ、変更できます。

- dbappscfg.properties
SQL*Plus Worksheet 固有の構成設定が含まれます。
 - ClientConfig.properties
Management Server が稼働しているマシンのリストが含まれます。このファイルでは、Enterprise Manager コンソールおよび管理アプリケーションのトレースもできます。
 - clientconfig.properties.template
Change Manager のトレースを可能にする構成の詳細が含まれます。
 - omsconfig.properties
データベース・リポジトリ接続情報を含むローカル Management Server の構成の詳細が含まれます。このファイルでは、中間層の Management Server のトレースおよびロギングもできます。
 - omsexternalregistry.registry.template
外部サービス・レジストリ・ファイルを追加できます。このファイルには現在、Management Server と Oracle Internet Directory Server の統合のための外部サービス・レジストリ設定が含まれています。Management Server をディレクトリ・サーバーと接続する場合、このファイルを omsexternalregistry.registry にコピーし、Management Server を再起動する必要があります。Oracle Internet Directory では、Oracle ホームのシステム固有のライブラリを使用する際に、Management Server の外部サービスが必要です。
 - paging.cfg.template
Enterprise Manager ポケットベル・サーバーのトレースを有効にできます。このファイルは、ポケットベル・サーバーが Windows NT または Windows 2000 マシンにインストールされた場合にのみ、生成されます。ポケットベル・サーバーは、他のプラットフォームでは使用できません。
- \$ORACLE_HOME/sysman/config/ ディレクトリにある他のファイルは、変更できません。たとえば、oemclient.properties には、すべてのイベント・テストとジョブ・タスクの情報、およびコンテキスト内のアプリケーション起動の詳細が含まれています。これらは変更しないでください。

expert/

expert ディレクトリは、NT 専用のディレクトリです。ここには、expert のルール・ファイルがあります。このディレクトリのファイルは編集しないでください。

ifiles/

Instance Management からの保存済 init.ora パラメータが含まれます。最初、このディレクトリは空です。Instance Management にアクセスして init.ora パラメータを保存すると、ファイルが移入されます。

jlib/

Enterprise Manager コンポーネントが適切に機能するために必要な jar ファイルが含まれます。このディレクトリの内容は変更しないでください。

log/

ログ・ファイルにリダイレクトされたトレース情報が含まれます。最初、このディレクトリは空です。ディレクトリには、oms.nohup ファイルが移入されます。oms.nohup ファイルには、Management Server の起動および停止時（およびなんらかの理由で Management Server がそれ自体を再起動した場合）に対応する情報が含まれています。重要なエラー・メッセージ（たとえば、セッション不足、SQL 例外など）もこのファイルにロギングされます。他のトレース情報は、Management Server でトレースおよびロギングが可能な場合、oms.log ファイルに入れられます。

トレースおよびロギングが有効になると、このディレクトリには追加のログ・ファイル（たとえば、oms.log）が移入されます。

msg/

Trace Data Viewer、Oracle Expert、SQL Analyze などの、Java で記述されていない Enterprise Manager アプリケーション固有のメッセージ・ファイルが含まれます。このディレクトリは、Windows プラットフォームでのみ作成されます。UNIX プラットフォームでは作成されません。このディレクトリの内容は変更しないでください。

report/

Enterprise Manager コンソールおよび各種管理アプリケーションから生成された HTML 形式のレポートが含まれます。最初、このディレクトリは空です。Enterprise Manager からレポートが生成されると、HTML ファイルが移入されます。このディレクトリの内容は変更しないでください。

reporting/

生成された HTML レポートの GIF ファイルが含まれます。このディレクトリの内容は変更しないでください。

temp/

これは、一時ファイルを作成するための Management Server、および Java で記述されていない Enterprise Manager アプリケーション（Trace Data Viewer、Oracle Expert、SQL Analyze など）で使用されるスクラッチ・ディレクトリです。このディレクトリの内容は変更しないでください。

B

ロギングおよびトレースのアクティブ化

Enterprise Manager フレームワークの各層（コンソール、Management Server、Intelligent Agent など）では、独自のトレース機能およびロギング機能がサポートされています。

トレースおよびロギングの両方では、コンポーネントで実行される処理の同じ詳細情報が提供されます。ただし、トレースが、データを書き込み、リアルタイムで表示するのに使用されるのに対し、ロギングは、トレース情報をファイルにリダイレクトし、後で表示するのに使用されます。

この付録では、各種 Enterprise Manager コンポーネントのトレースおよびロギングの両方を有効にする方法について説明します。この付録の内容は、次のとおりです。

- [Enterprise Manager クライアント・アプリケーションのロギングおよびトレース](#)
- [Management Server のロギングおよびトレース](#)
- [イベント・ハンドラのロギングおよびトレース](#)
- [動的 Web サイトのロギングおよびトレース](#)
- [Oracle Intelligent Agent のロギングおよびトレース](#)
- [ブラウザベースの Enterprise Manager のトレース](#)
- [ポケットベル・サーバーのトレース](#)
- [SQL エンジンのトレース](#)
- [Management Pack アプリケーションのトレース](#)

Enterprise Manager クライアント・アプリケーションのロギングおよびトレース

ロギングおよびトレースを有効にするには、次の 2 つの方法があります。1 つは、即時に結果が得られる方法で、`ClientConfig.properties` ファイルに環境変数を設定する必要がありません。もう 1 つの方法は、`ClientConfig.properties` ファイルにプロパティと値を追加する必要があるため、前の方より時間がかかります。

トレースを即時に有効化

`ClientConfig.properties` ファイルに環境変数を設定せずにクライアント・アプリケーションに関する情報を取得できます。

特定のクライアント・アプリケーションのデバッグ情報を取得するには、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
$ OEMAPP DEBUG [app]
```

または

```
$ OEMAPP TRACE [app]
```

指定したクライアント・アプリケーションでレベル 2 のトレースを有効にし、出力先をコンソールにするには、次のように入力します。

```
$ OEMAPP DEBUG CONSOLE
```

または

```
$ OEMAPP TRACE CONSOLE
```

トレースを段階的に有効化

1. `clientConfig.properties` ファイルを更新します。

`clientConfig.properties` ファイルは、`$ORACLE_HOME/sysman/config` ディレクトリにあります。

`clientConfig.properties` にロギングおよびトレース用のパラメータを追加すると、すべてのクライアント・アプリケーションがこれらの設定を使用します。

次に、`clientConfig.properties` ファイルで指定できる変数を示します。

表 B-1 clientConfig.properties の変数

プロパティ	値
LOGGING.ENABLED	ブール値。TRUE または FALSE に設定できます。 ロギングおよびトレースが必要な場合は、TRUE に設定します。 デフォルト値は FALSE です。
TRACING.ENABLED	ブール値。TRUE または FALSE に設定できます。 ロギングおよびトレースが必要な場合は、TRUE に設定します。 この変数のみを TRUE に設定しても、すべてのクライアント・アプリケーションが実際にトレースを生成するとはかぎりません。 そのため、ロギングおよびトレースが必要な場合は、LOGGING.ENABLED パラメータも設定する必要があります。 デフォルト値は FALSE です。
TRACING.LEVEL	必要なトレースのレベル。 設定可能な値は、2、3 および 5 です。 2 = 開発用のトレース。すべてのメッセージを表示します。 3 = 管理用のトレース。すべての警告およびエラーを表示します。 5 = ユーザー用のトレース。エラーのみを表示します。 デフォルト値は 5 です。

注意： クライアント・アプリケーションを完全にトレースするには、LOGGING.ENABLED および TRACING.ENABLED パラメータを TRUE に設定する必要があります。

2. clientConfig.properties ファイルの更新後、特別な環境変数 ORACLE_OEM_CLIENTTRACE (名前は大文字) を設定して、ロギングおよびトレースをアクティブにします。

表 B-2 ORACLE_OEM_CLIENTTRACE の例

プラットフォーム	例
Windows	C:> SET ORACLE_OEM_CLIENTTRACE=TRUE C:> OEMAPP CONSOLE
UNIX csh	\$ setenv ORACLE_OEM_CLIENTTRACE TRUE \$ oemapp console
UNIX sh	\$ ORACLE_OEM_CLIENTTRACE=TRUE \$ export ORACLE_OEM_CLIENTTRACE \$ oemapp console

追加の Java のデバッグの実行

追加の Java のデバッグを実行する必要がある場合、OEMAPP スクリプト・ファイルを変更し、デバッグ・パラメータを追加します。ほとんどの場合、このレベルの Java の詳細は必要ありません。クラスの不一致または不足に関する特定の Java エラーが報告された場合にのみ有効です。

Windows の場合

```
SET JRE=jre -nojit ...rest of commandline...
```

を次のように変更します。

```
SET JRE=jre -nojit -verbose ...rest of commandline...
```

UNIX の場合

```
JRE="jre ...options... -nojit ...more options..."
```

を次のように変更します。

```
JRE="jre ...options... -verbose -nojit ...more options..."
```

Management Server のロギングおよびトレース

中間層である Management Server のロギングおよびトレースは、\$ORACLE_HOME/SYSMAN/CONFIG ディレクトリの OMSCONFIG.PROPERTIES ファイルで指定されます。

Management Server のプロパティ・ファイルのパラメータは、大文字と小文字が区別されるので、ここで示すとおりに指定してください。

表 B-3 OMSCONFIG.PROPERTIES の変数

プロパティ	値
LOGGING.ENABLED	ブール値フラグ。トレース情報をファイルに書き込むかどうかを指定します。TRACING.ENABLED フラグもアクティブな場合のみ、情報がファイルに書き込まれます。 設定可能な値は TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。
LOGGING.DIR	OMS.LOG ファイルが書き込まれるディレクトリ。デフォルト値は \$ORACLE_HOME/SYSMAN/LOG です。 Windows NT の場合、LOGGING.DIR を c:\temp ディレクトリに設定するには、「¥」を使用して（「¥」文字をエスケープするため）、LOGGING.DIR=c:¥temp と設定する必要があります。 たとえば、次のように指定します。 <code>LOGGING.DIR = C:¥temp¥filename.log</code> このように指定しないと、c:\temp の「¥t」がタブ文字と解釈され、Management Server を起動できなくなります。
LOGGING.FILENAME	Management Server のロギングに使用するファイル名。 デフォルト値は OMS.LOG です。索引カウンタがこのファイルに追加されます。最大サイズに到達するたびに、索引番号が 1 つ増えた新しいファイルが作成されます。 起動時、カウンタは常に 0 (ゼロ) です。このカウンタ値は、ログ・ファイルが指定した最大サイズに到達すると、1 つ増えます。
LOGGING.MAX_SIZE	ログ・ファイルの最大サイズ。デフォルト値は 50MB です。 0 (ゼロ) に設定した場合、ファイル制限がなくなり、OMS.LOG ファイルが 1 つのみ作成され、使用されます。 特定のサイズを指定した場合、生成されるすべてのログ・ファイルの最後に、カウンタ値が付きます。
LOGGING.MAX_FILE_CNT	特定の時間に、ログが対象とするファイルの最大数を定義します。すべてのファイル・サイズの合計は、LOGGING.MAXSIZE プロパティで設定した値以下になるようにします。 デフォルト値は 2 です。 LOGGING.MAX_SIZE=0 (ログ・サイズの制限がない) 場合は、LOGGING.MAX_FILE_CNT は意味がなくなるため、無効になります。

表 B-3 OMSCONFIG.PROPERTIES の変数（続き）

プロパティ	値
TRACING.ENABLED	ブール値フラグ。トレース情報を生成するかどうかを指定します。ロギングが無効な場合、トレース情報は、Management Server を起動したコンソールに書き込まれます。
TRACING.LEVEL	設定可能な値は TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。
LOGGING.SAVE_PREVIOUS_LOG	使用可能なトレース・レベル。設定可能な値は次のとおりです。 2 - 開発用：すべてのメッセージを表示します。 3 - 管理用：重要なエラーおよび警告のみを表示します。 5 - ユーザー用：重要なエラーのみを表示します。

注意： LOGGING.MAX_SIZE および LOGGING.MAX_FILE_CNT により、Management Server のログ・ファイルに使用されるディスク領域の大きさが決まります。これらのパラメータを使用して、ログ・ファイルのサイズおよびディスク使用を指定できます。

oms.nohup ファイル（Management Server のトレース・ファイル）は、（Windows NT および UNIX の両方で）自動的に作成されます。oms.nohup ファイルには、Management Server の起動と停止時、およびなんらかの理由で Management Server がそれ自体を再起動した場合に対応するエントリが含まれています。重要なエラー・メッセージ（たとえば、セッション不足、SQL 例外など）もこのファイルにロギングされます。他の詳細なトレースは、oms.log ファイルに入れられます（トレースがオンの場合）。

イベント・ハンドラのロギングおよびトレース

イベント・ハンドラは Oracle Management Server の一部です。イベント・ハンドラをトレースするには、Management Server をトレースする手順を実行します。イベント・ハンドラに関するトレース情報は、Management Server のトレース・ファイルまたはログ・ファイルに保存されます。

トレースを有効にするために OMSCONFIG.PROPERTIES ファイルに追加するプロパティと値の詳細は、B-4 ページの「[Management Server のロギングおよびトレース](#)」を参照してください。

動的 Web サイトのロギングおよびトレース

Oracle HTTP Server のロギングおよびトレース

この項は、Management Server とともにインストールされた Oracle HTTP Server を使用している場合にのみお読みください。

次の設定を変更します。

1. Oracle HTTP Server の起動時に、ログ・モジュールが存在し、ロードされる必要があります。これはデフォルトのインストールであり、モジュールおよびリンク・オブジェクトのリストが変更されないかぎり、追加の操作は必要ありません。
2. \$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf を変更します。

Oracle HTTP Server のロギングおよびトレースを有効にします。

```
# LogLevel: Control the number of messages logged to the error_log.  
# Possible values: debug,info,notice,warn,error,crit,alert,emerg  
LogLevel warn
```

次のログ・ファイルが作成されます。

- access_log

httpd.conf の CustomLog に別の値が設定されていないかぎり、デフォルトのディレクトリは \$ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs です。このファイルには、Oracle HTTP Server で処理されたすべての HTML リクエストのリストが含まれます。

- error_log

httpd.conf の ErrorLog に別の値が設定されていないかぎり、デフォルトのディレクトリは \$ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs です。このファイルには、Oracle HTTP Server で処理されなかったすべての HTML リクエストのリストが含まれます。

注意： Oracle HTTP Server の構成ファイルを変更するたびに、Oracle HTTP Server を停止して再起動する必要があります。

JServ のロギングおよびトレース

この項は、Management Server とともにインストールされた Oracle HTTP Server を使用している場合にのみお読みください。

次の設定を変更します。

1. \$ORACLE_HOME/Apache/Jserv/conf/jserv.properties を変更します。ログ・スイッチが TRUE に設定されていることを確認します。jserv ログ・ファイルの位置を指定することもできます。

```
log=true  
log.timestamp=true  
log.file=<path to jserv log file>/jserv.log  
log.channel.servletException=true  
log.channel.jservException=true  
log.channel.warning=true  
log.channel.servletLog=true  
log.channel.critical=true
```

2. \$ORACLE_HOME/Apache/Jserv/conf/jserv.properties を変更した後、Java JIT (Just In Time) コンパイラを無効にし、例外および Java トレースの行番号および Java デバッグの追加出力を取得します。

ファイルの先頭付近に、コマンドラインで切り替えるパラメータがあります。

```
wrapper.bin.parameters=-Xms64m  
wrapper.bin.parameters=-Xmx128m
```

次の行を追加します。

```
wrapper.bin.parameters=-Djava.compiler=NONE
```

注意： Java JIT コンパイラを無効にすると、レポート作成フレームワークのパフォーマンスが低下します。デバッグが不要になったら、パラメータを注釈にし、Java JIT コンパイラを有効にした状態でフレームワークを実行してください。

jserv.log が作成されます。jserv.properties の log.file に別の値が設定されていないかぎり、デフォルトのディレクトリは \$ORACLE_HOME/Apache/Jserv/logs です。このファイルには、JServ が実行したすべての処理が含まれます。

注意： JServ の構成ファイルを変更するたびに、Oracle HTTP Server を停止して再起動する必要があります。

動的 Web サイトのロギングおよびトレース

次の行を追加して、\$ORACLE_HOME/sysman/config/reporting.properties を変更します。

```
TRACING.ENABLED=true  
LOGGING.ENABLED=true  
TRACING.LEVEL=2
```

注意： パラメータ名は大文字で指定してください。ただし、パラメータの値は小文字で指定してください。

reporting.log が作成されます。デフォルトのディレクトリは、\$ORACLE_HOME/sysman/log です。このファイルには、レポート作成サーブレットが実行したすべての処理が含まれます。

注意： レポート作成の構成ファイルを変更するたびに、Management Server を停止して再起動する必要があります。

Oracle Intelligent Agent のロギングおよびトレース

第 3 層の Intelligent Agent のトレースおよびロギングでは、Intelligent Agent と Management Server 間のすべての通信を追跡できます。Intelligent Agent のロギングおよびトレースのアクティブ化の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ブラウザベースの Enterprise Manager のトレース

ブラウザで Oracle Enterprise Manager の起動時に問題が発生した場合は、トレース情報を収集してから、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問題を報告してください。

ブラウザのトレースを設定するには、次の手順を実行します。

1. ブラウザのセッションを終了します。

2. Java プラグイン・コンソールを起動します。

Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」>「JInitiator Control Panel」を選択します。「Oracle JInitiator Properties」ウィンドウが表示されます。

- a. 「Show Java Console」ボックスを選択します。

- b. 「Java Run Time Parameters」ボックスで、行の終わりに次のものを追加します。

```
-DTRACING.ENABLED = TRUE -DTRACING.LEVEL = 2
```

- c. 「Apply」をクリックします。

- d. 「Oracle JInitiator Properties」ダイアログ・ボックスを閉じます。

3. ブラウザと Oracle Enterprise Manager を再起動します。

Java コンソール・ウィンドウが現れ、プラグインによってロードされた Java クラスと、発生する可能性のある例外が表示されます。例外が表示されない場合は、3、4 回ごとに、情報が一杯になったウィンドウをクリア（「クリア」をクリック）してください。

4. Java コンソール・ウィンドウに例外が表示された場合は、ファイルにカット・アンド・ペーストして、問題の説明と一緒にファイルをオラクル社カスタマ・サポート・センターにお送りください。

ポケットベル・サーバーのトレース

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーは、Management Server とは別にデバッグおよびトレースできます。ポケットベル・サーバーのトレースは、デフォルトでは無効になっています。トレースが有効な場合、サーバーによって、すべての電話回線処理や、成功または失敗についてのトレース情報がデフォルトでログ・ファイルに書き込まれます。ポケットベル送信のたびに情報が記録されるため、ログ・ファイルはポケットベルの送信回数に比例して大きくなります。ログ・ファイルを削除するには、ポケットベル・サーバーを停止してからファイルを削除してください。

Oracle Enterprise Manager ポケットベル・サーバーをインストールすると、\$ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリに、paging.cfg.template というテンプレート構成ファイルが用意されます。

1. paging.cfg.template ファイルを paging.cfg ファイルにコピーします。このファイルも \$ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリにあります。

このファイルの名前を変更せずにコピーして、情報を保持しておくことをお薦めします。このファイルをコピーしない場合、ポケットベルのトレースを有効にするコメントがすべて削除されます。また、Enterprise Manager が更新された場合は、すべての構成が失われ、元に戻すことはできません。

2. paging.cfg.template ファイルの指示に従って、トレース使用の要件に合わせて paging.cfg ファイルを変更し、保存します。

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーのトレースを有効にするには、次のプロパティと適切な値を `paging.cfg` ファイルに追加します。

表 B-4 `paging.cfg` の変数

プロパティ	値
TRACING.ENABLED	デバッグで使用するための値を設定します。ポケットベル・サービスは、すべての電話回線操作に対するトレース文と、成功または失敗を書き込むことにより、ポケットベル通信で発生した内容をトレースします。 値は TRUE または FALSE です。TRUE を設定した場合は、TRACEFILENAME および TRACING.LEVEL の値を指定する必要があります。FALSE を設定した場合は、TRACEFILENAME および TRACING.LEVEL の値を指定する必要はありません。
TRACING.LEVEL	トレースが有効な場合に、収集するトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 5 - ユーザー用 : 重要なメッセージおよびエラー・メッセージを収集します。 ■ 3 - 管理用 : 重要なメッセージ、エラー・メッセージおよび警告メッセージを収集します。 ■ 2 - 開発用 : admin トレース・レベルのすべてのメッセージ、および情報メッセージとデバッグ・メッセージを収集します。
TRACEFILENAME	トレースが有効な場合に、トレースの出力結果を書き込む場所を設定します。 この値は PAGING_LOG.TRC に設定することをお薦めします。デフォルトでは、このファイルは、ポケットベル・サーバーの \$ORACLE_HOME/sysman/log ディレクトリ内にあります。 別のディレクトリを指定する場合は、 <code><Drive_Letter>:¥¥<directory_path>¥paging_log.trc</code> を指定してください。たとえば、トレース・ファイルを <code>C:¥temp¥</code> に格納する場合は、この値を <code>C:¥¥temp¥paging_log.trc</code> に設定します。

SQL エンジンのトレース

SQL エンジンでは、Enterprise Manager ソフトウェアで発行された SQL 文の結果を受け入れ、実行し、送信します。

クライアント・アプリケーションには、Enterprise Manager Configuration Assistant およびコンソールのデータベース管理の一部が含まれます。クライアント・アプリケーションの起動方法に応じて、SQL エンジンはクライアントか Management Server のいずれかで実行できます。

- Management Server に接続しているクライアント・アプリケーションでは、Management Server の SQL エンジンが使用されます。
 - データベースに直接接続しているクライアント・アプリケーションでは、独自の SQL エンジンが使用されます。
- SQL エンジンは、クライアントおよび Management Server の両方でトレースできるので、これらのパラメータは、`omsconfig.properties` ファイルおよび `ClientConfig.properties` ファイルの両方で指定できます。
- 設定可能な VDB (SQL エンジン) パラメータは、相互に排他的です。要求された最上位のトレースを使用する必要があります。

表 B-5 SQL エンジンの変数

プロパティ	値
VDB_DEBUG	有効な場合、SQL エンジンでは、第 1 レベルの情報のスタック・トレースおよびメッセージが表示されます。ブール値。設定可能な値は TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。
VDB_VERBOSE_DEBUG	この場合、SQL エンジンでは、開始および終了する方法が表示され、DEVELOPER DEBUG 情報も表示されます。ブール値。設定可能な値は TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。
VDB_SESSION_DEBUG	データベース・セッション・プールの内容が表示される場合、これは有効です。セッションの作成と破損、およびセッション・プール・アクティビティのトレースにも使用されます。ブール値。設定可能な値は TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。
VDB_VERBOSE_SESSION_DEBUG	このパラメータでは、セッションがオープン、クローズ、セッション・プールにリリース、またはセッション・プールから取り出されたときの、スタック・トレースを含むセッション・アクティビティの詳細が表示されます。VDB_VERBOSE_DEBUG のように、冗長なバージョンのセッション・トレースです。ブール値。設定可能な値は TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。

Management Pack アプリケーションのトレース

トレースの詳細は、『Oracle Enterprise Manager Oracle Tuning Pack によるデータベース・チューニング』を参照してください。

C

一般的なリポジトリのガイドライン

リポジトリのサイズ設定

この項では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリに対して、記憶域要件とディスクの領域割当てを決定する際のガイドラインについて説明します。

領域の要件は、使用する Oracle Enterprise Manager ツールで行う処理、および実行する作業で生成されるデータ量によって異なります。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースの違いによっても、リポジトリのデータの量の増加は多少異なります。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成する際に、リポジトリに対するデフォルトの構成を確定すると、OEM_REPOSITORY という新しい表領域が生成されます。OEM_REPOSITORY 表領域には、Oracle Enterprise Manager コンソール、および個別にライセンスを取得できるすべてのパック（インストールしたか、またはライセンスを取得したかどうかに関係なく）のリポジトリ・オブジェクトが含まれます。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースによって、リポジトリを最初に 6～26MB のハード・ディスク領域に割り当てるすることができます。

実際に Oracle Enterprise Manager 製品をどのように使用するかによって、リポジトリのサイズを拡張できます。リポジトリのデータ量がどのくらい増加するかを決定するには、次の表を参照してください。リポジトリ・サイズの増加に適合できるように、デフォルトの OEM_REPOSITORY 表領域は、自動拡張に設定されています。たとえば、小規模な 1 つのデータベースに対して Capacity Planner を使用して、デフォルトの OEM_REPOSITORY 表領域を 4MB の割当てで作成したとします。しかし、実際には（大規模な 3 つのデータベースなどの）標準的な基準で Capacity Planner を使用すると、リポジトリのサイズは、概算で 16MB に増加します。このような場合には、表領域は、増加量に合わせて自動的に拡張されます。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成し、既存の表領域を使用する場合は、次の手順に従って、リポジトリで使用するディスク領域がどのくらい増加するかを決定します。

1. 「製品」列を参照して、使用している製品を検索します。
2. それぞれの製品で実行する操作を、「状況」列で識別します。

3. それぞれの操作に対して、ハード・ディスクの領域に「割当て」列の容量を追加します。これらの必要量の合計が、リポジトリの予想サイズとなります。

製品	状況	割当て
Oracle Enterprise Manager コンソール	<ul style="list-style-type: none"> ■ コンソールのみを使用する。 ■ ジョブ履歴にはほとんど保存しない。 	4 ~ 9MB
Oracle Diagnostics Pack コンソール	<ul style="list-style-type: none"> ■ 4MB 未満のトレース・データを収集する。 ■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 ■ 4 ~ 20MB のトレース・データを収集する。 ■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 ■ 20 ~ 60MB のトレース・データを収集する。 ■ 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	35MB 60MB 120MB
Oracle Tuning Pack	<p>次の範囲未満で保存</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文 : 50 個 ■ 有効なチューニング・セッション : 5 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ : 10 個 <p>次の範囲で保存</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文 : 50 ~ 150 個 ■ 有効なチューニング・セッション : 5 ~ 15 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ : 10 ~ 30 個 <p>次の範囲を超えるものを保存</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文 : 150 個 ■ 有効なチューニング・セッション : 15 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ : 30 個 	15MB 未満 15 ~ 45MB 90MB 以上

製品	状況	割当て
Oracle Change Management Pack	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つ スキーマ ベースライン : 1 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較 : 1 個 変更計画 : 1 個 (スキーマを伝播) 	20MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つ スキーマ ベースライン : 2 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較 : 2 個 変更計画 : 5 個 	40MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つ スキーマ ベースライン : 5 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較 : 5 個 (2 つのバージョン) 変更計画 : 10 個 	100MB
Oracle Management Pack for Oracle Applications	<ul style="list-style-type: none"> ■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 	4MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	10MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	20MB
Oracle Management Pack for SAP R/3	<ul style="list-style-type: none"> ■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 	4MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	10MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	20MB

製品	状況	割当て
Oracle Standard Management Pack ¹	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン : 1 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較 : 1 個 	20MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン : 2 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較 : 2 個 	35MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン : 5 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較 : 5 個 (2 つのバージョン) 	80MB

¹ 個別にライセンスを取得できる他のパックは、Oracle9i Enterprise Edition で使用できますが、Oracle Standard Management Pack は、Oracle9i Standard Edition でのみ使用できます。

たとえば、次のような状況であるとします。

- コンソールを標準で使用します。ただし、通常は、大量の出力はジョブ履歴に保存しません (約 7MB)。
- 約 45MB のトレース・データを収集します (約 45MB)。
- ごく少量のデータに対して Capacity Planner を使用します (約 4MB)。
- チューニングされた SQL 文を約 100 個、有効なチューニング・セッションを 11、ジョブ履歴の表領域ジョブを 25 個保存します (約 32MB)。

この場合には、これらの領域割当の合計は、88MB (7MB + 45MB + 4MB + 32MB) となります。したがって、リポジトリに対して約 88MB の割当をする必要があります。

重要: ここで説明している内容は、Oracle Enterprise Manager の環境のデフォルト構成に基づいたガイドラインにすぎません。実際のリポジトリのサイズ設定要件は、設定されたカスタム構成によって、異なります。コンソールおよび各種のパックで、実際にどのアプリケーションを使用しているか、パラメータをどのように構成したか、などによって、リポジトリで必要とするディスク領域は異なります。たとえば、Oracle Diagnostics Pack のデフォルトのサンプリング間隔は 5 分です。このサンプリング間隔を短くする場合は、より多くのディスク領域を割り当てる必要があります。ジョブ履歴に保存するデータ量によっても、リポジトリで必要な領域の量が異なります。40 ~ 50MB の大量の出力をジョブ履歴に保存する場合は、さらに 40 ~ 50MB のディスク領域が必要になります。

D

グローバリゼーション・サポート

Oracle Enterprise Manager リリース 9.2.0 は、次の言語に翻訳されています。

- ドイツ語
- フランス語
- イタリア語
- ポルトガル語（ブラジル）
- スペイン語
- 日本語
- 韓国語
- 簡体中国語

これらの翻訳は、製品にバンドルされます。英語以外の言語の Enterprise Manager およびそのアプリケーションを使用するには、製品のインストール時に適切な言語を選択する必要があります。

ただし、インストールで選択した言語に関係なく、英語バージョンは常に自動的にインストールされます。

英語以外の言語の Enterprise Manager コンポーネントのインストールの詳細は、ご使用のインストレーション・ガイドを参照してください。

リポジトリの設定

Enterprise Manager のリポジトリは、使用する言語で作成する必要があります。

既存の Oracle のインスタンスを使用する場合は、データベース・キャラクタ・セットが、その言語によってサポートされているキャラクタ・セットのスーパー・セットであることを確認してください。そうでない場合は、適切なキャラクタ・セットを使用して新しい Oracle のインスタンスを作成する必要があります。

Oracle Database Configuration Assistant を使用すると、新しい Oracle データベースのデータベース・キャラクタ・セットを簡単に変更できます。

特定の言語で新しいリポジトリを作成するには、次の手順に従います。

1. 言語の設定を設定します。
2. NLS_LANG パラメータの設定を設定します。
3. Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。
4. リポジトリの作成作業を完了します。

言語および NLS_LANG パラメータの設定

言語および NLS_LANG パラメータの設定は、次のものを起動する前に行ってください。

- Oracle Intelligent Agent
- Oracle Management Server
- Oracle HTTP Server
- Oracle Enterprise Manager コンソールおよび他の Enterprise Manager アプリケーション

言語の設定または NLS_LANG パラメータを変更した場合は、必ず Oracle Intelligent Agent、Oracle Management Server、Oracle HTTP Server、Oracle Enterprise Manager コンソールおよび他の Enterprise Manager アプリケーションをすべて再起動してください。

言語の設定

リポジトリを作成する場合、または Oracle Enterprise Manager のプログラムを実行する場合は、操作を開始する前に、使用する言語を指定する必要がある場合があります。

言語の指定方法は、プラットフォームによって異なります。標準的な設定方法は、次のとおりです。

Windows NT の場合

1. Windows の「スタート」メニューから、「設定」>「コントロールパネル」をクリックします。

2. 「地域」をダブルクリックします。
3. 地域名のリストから言語を選択します。
4. 「OK」をクリックして変更を完了します。

Solaris および標準的な UNIX システムの場合

環境変数 LANG を設定します。

- Born シェルまたは Korn シェルでは、次のように入力します。

```
$ LANG=<locale>
$ export LANG
```

- C シェルまたは tcsh では、次のように入力します。

```
% setenv LANG <locale>
```

この場合、<locale> はプラットフォーム固有の値です。コマンド locale が使用可能な場合は、locale -a と入力すると指定可能なすべてのロケールが一覧表示されます。

```
% locale -a
```

Solaris の tcsh で言語をドイツ語に設定する例を次に示します。

```
% setenv LANG de
```

NLS_LANG の設定

Oracle データベースにアクセスするには、NLS_LANG パラメータを指定する必要があります。詳細は、『Oracle9i Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

英語以外の言語のブラウザベースの Enterprise Manager への アクセス

英語以外の言語のブラウザベースの Enterprise Manager を実行するには、まず適切な言語で Enterprise Manager Web Site をインストールする必要があります。

別の言語の Enterprise Manager への直接アクセス

ファイルを変更せずに、英語以外の言語のブラウザベースの Enterprise Manager に直接アクセスするには、次のように入力します。

`http://<machine name>:3339/emwebsite_<lang>.html`

たとえば、ドイツ語バージョンの索引ページを見るには、次のように入力します。

`http://<webserver host name>:3339/emwebsite_de.html`

oem.conf ファイルの編集

デフォルトのページを変更して英語以外の Web サイトを指定するには、`oem.conf` ファイルを編集して、その Web サイトの適切なファイル名を指定するように `emwebsite.html` というファイル名を変更します。たとえば、ドイツ語に翻訳された索引ページを表示するには、`emwebsite.html` を `emwebsite_de.html` に変更します。

優先する言語の設定の変更

特定の言語でブラウザ表示するには、優先する言語の設定をブラウザがインストールされたマシンで次のように変更します。

Netscape Navigator の場合

1. 「編集」メニューから「設定」を選択します。
2. 「設定」ダイアログ・ボックスで、「Navigator」カテゴリを展開します。
3. 「言語」をクリックします。
4. 「追加」をクリックします。
5. 適切な言語を選択し、「OK」をクリックします。
6. 「設定」ウインドウの「OK」をクリックして変更を完了します。

Internet Explorer の場合

1. 「ツール」メニューから「インターネット オプション」を選択します。
2. 「言語」をクリックします。
3. 「追加」をクリックします。
4. 適切な言語を選択し、「OK」をクリックします。
5. 「インターネット オプション」ダイアログ・ボックスの「OK」をクリックして変更を完了します。

E

Windows 2000 での Enterprise Manager の 使用

この付録の内容は、次のとおりです。

- Windows NT と Windows 2000 間の Enterprise Manager の使用における差異
- 手順

Windows NT と Windows 2000 間の Enterprise Manager の使用における差異

機能	Windows NT	Windows 2000
サービス	「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」>「サービス」を選択し、「サービス」ダイアログ・ボックスにアクセス。	Windows 2000 では、「サービス」ディレクトリは、「コントロールパネル」ディレクトリよりさらに下に位置する。 「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」>「管理ツール」>「サービス」を選択。
ユーザー・マネージャ	Windows NT では、Windows コンピュータ・セキュリティの管理およびユーザー・アカウントの作成が可能。 「スタート」>「プログラム」>「管理ツール」>「ユーザー マネージャ」を選択。	ユーザー・アカウントを作成するには、「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」>「管理ツール」>「コンピュータの管理」>「ローカルユーザーとグループ」を選択。

手順

この項では、Windows 2000 で次の作業を実行する方法について説明します。

- サービスの操作（開始、停止、スタートアップ・モードの変更など）
- 新規ユーザーの作成
- ユーザーへの権限（すなわち、「バッチジョブとしてログオン」）の割当て

Windows 2000 のサービスの操作

Windows 2000 のサービスを操作するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー>「設定」>「コントロールパネル」>「管理ツール」>「サービス」を選択します。
2. 操作するサービスを選択します。
3. 右クリックし、実行する操作（開始、停止など）を選択します。「スタートアップの種類」を変更するには、右クリックして「プロパティ」を選択し、必要に応じて「スタートアップの種類」を編集します。

Windows 2000 の新規ユーザーの作成

Windows 2000 の新規ユーザーを作成するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー > 「設定」 > 「コントロール パネル」 > 「コンピュータの管理」 > 「ローカルユーザーとグループ」を選択します。
2. 表示された「ローカルユーザーとグループ」ダイアログ・ボックスで、新規ユーザーの追加ができます。

Windows 2000 ユーザーへの権限の割当て

Windows 2000 ユーザーに権限を割り当てるには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー > 「設定」 > 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「ローカルセキュリティポリシー」を選択します。
2. 左側のツリーの「ローカルポリシー」を選択します。
3. 左側のツリーの「ユーザー権利の割り当て」を選択します。
4. 右側で適切な権限を見つけて選択します。
5. 右クリックして「セキュリティ」を選択します。表示された「ローカルセキュリティポリシーの設定」ダイアログ・ボックスで、指定の権限を持つ必要があるユーザーを追加できます。

F

トラブルシューティング

この付録では、考えられるトラブルシューティングの問題を説明します。

- オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告
- Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング
- omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更
- Management Server のトラブルシューティング
- ポケットベル・サーバーのトラブルシューティング
- Web ブラウザのトラブルシューティング
- リポジトリ・ユーザーのパスワード変更
- パスワードの再設定
- 日付書式の設定
- レポート作成のトラブルシューティング

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告

Oracle Enterprise Manager には、使用時に問題に遭遇した場合に役立つソースが多数用意されています。

オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせになる前に、まず、マニュアルや Oracle Enterprise Manager のリリース・ノートを調べてみてください。Oracle Enterprise Manager のマニュアルのリストは、「はじめに」の中の、ix ページの「ドキュメント」に記されています。

マニュアル

特に利用価値の高いマニュアルは、次のとおりです。

- Oracle Enterprise Manager のリリース・ノートには、Oracle Enterprise Manager の更新に関する重要な注意とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いが記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』には、Oracle Intelligent Agent の管理方法とトラブルシューティング情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

マニュアルで問題が解決しない場合には、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡し、次の情報をお知らせください。

1. どのような問題か。
2. 問題が発生したときに何をしていたか。
 - 問題が発生した製品またはコンポーネント。
 - 実行していた操作。問題が再現可能か。問題を調べるために取った処置。
3. ご使用の環境。
 - ご使用のオペレーティング・システムとバージョン。
 - ご使用の Oracle Enterprise Manager のリリースとインストール場所。
 - ご使用の Intelligent Agent のリリースとインストール場所。
 - ご使用のデータベースのリリースとインストール場所。
 - Management Server のインストール場所。
 - キーマ、データ、スクリプトまたはご使用の環境についての関連情報。可能な場合は、問題を再現できるようにログ・ファイルもお送りください。

4. 表示されたエラー・メッセージと番号。
5. (可能な場合は) トレースを実行し、トレース情報を提供してください。
6. (ログ・ファイルがある場合は) 調査して、ログ情報を提供してください。

Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング

この項では、Enterprise Manager Configuration Assistant で発生した問題を解決するために推奨される処置について説明します。

Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー

この項では、Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー・メッセージと、考えられるそれらの原因を説明し、エラー解決の推奨処置を提示します。

選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がない

選択したデータベースに DBA ユーザーとしてログインするとき、Configuration Assistant によって、ユーザーに必要な権限があるかどうかがチェックされます。必要な DBA 権限がない場合は、「選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がありません。DBA 権限を持つユーザーとして、データベースにログインしてください。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージのダイアログ・ボックスを閉じます。正しい接続情報を入力して、処理を続行します。接続情報を入力して、再試行します。

リポジトリ・ログイン用のデータベースの選択に失敗した

無効なユーザー名、パスワードまたはサービスを入力すると、失敗を示すエラー・メッセージが表示されます。たとえば、次のようにになります。「接続に失敗しました。ORA-01017: ユーザー名 / パスワードが無効です。ログインは拒否されました。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージのダイアログ・ボックスを閉じます。データを入力し、再度試みてください。

ユーザーがすでに存在する

ユーザーがすでに存在しており、Enterprise Manager の不完全なリポジトリが含まれています。リポジトリの作成、削除またはアップグレードの操作が進行中であるか、前の操作が失敗した可能性があります。現在の操作を続行すると、不完全なコンポーネントが置き換えられて、不足しているコンポーネントがリポジトリに作成されます。

次のいずれかを選択してください。

- 別のユーザーを選択
- 処理を続行して、選択したリポジトリを使用

リポジトリ操作がすでに実行されている場合は、続行できません。同じリポジトリで複数の操作を同時に実行すると、リポジトリが破損することがあります。

ユーザー <username> には、最新の Enterprise Manager のリポジトリがすでに含まれています。現在のリポジトリを上書きするには、最初に削除オプションを使用します。

ユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれている

Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名がデータベースの既存のユーザーおよびスキーマの名前で存在し、その中に Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリが含まれていることが検出された場合は、「そのユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれています。同じスキーマに 9.x リポジトリと V1 リポジトリと一緒に置くことはできません。別のユーザー名を選択してください。」というメッセージが表示されます。

ユーザーはこのデータベースにすでに存在する

Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名がデータベースでユーザーおよびスキーマの名前としてすでに存在し、その中に Oracle Enterprise Manager のリリース 2.x のリポジトリもリリース 1.x のリポジトリも含まれていないことが検出された場合は、「ユーザーはこのデータベースにすでに存在します。このユーザーのスキーマ内にリポジトリを作成しますか。」というメッセージが表示されます。

「いいえ」を選択すると、異なるユーザー名を選択できます。

「はい」を選択すると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。

このマシンの Management Server は現在、サービス <service_name> でユーザー <user_name> によって所有されているリポジトリを管理する

リポジトリの作成中、Configuration Assistant で、管理対象リポジトリが omsconfig.properties ファイルで既に指定されていて、そのリポジトリと異なるリポジトリを作成している場合、「このマシンの Management Server は現在、サービス <service_name> でユーザー <user_name> によって所有されているリポジトリを管理しています。これをサービス <service_name> でユーザー <user_name> が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」というメッセージが表示されます。

「はい」を選択すると、構成が更新されます。構成ファイルへの変更を有効にするには、Management Server を停止して再起動してください。「いいえ」を選択すると、構成ファイルは更新されません。選択した内容が、「リポジトリの作成サマリー」ページおよび「Configuration Assistant の進行」ウィンドウの手順に反映されます。

ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域として SYSTEM が選択されました。

Configuration Assistant では、Oracle Enterprise Manager リポジトリに対するユーザーを作成する際に、デフォルトの表領域と一時的に使用する表領域を指定するように要求されます。いずれかの表領域に SYSTEM を選択すると、Configuration Assistant には「ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域として SYSTEM が選択されました。SYSTEM 表領域を、データ・ディクショナリ表と SYSTEM ロールバック・セグメント専用に使用することをお薦めします。よろしいですか。」というメッセージが表示されます。別の表領域を選択してください。

リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がないことが検出されると、「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」というメッセージが表示されます。

考えられる解決方法は、F-5 ページの「[リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない](#)」を参照してください。

リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Configuration Assistant は、リポジトリに対して選択されたデフォルトの表領域に、適切な属性および特性があるかどうか確認します。この表領域に十分な空き領域がない場合は、「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」というメッセージが表示されます。

OEM_REPOSITORY 表領域があれば、それを使用してください。これは、Enterprise Manager のデフォルトの表領域です。

新しいユーザーでリポジトリを作成する場合、「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」ページでは、OEM_REPOSITORY 表領域を作成するように推奨されます。Enterprise Configuration Assistant を使用して OEM_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には、必ず正しい属性および特性が定義されます。

ただし、必要に応じて別の表領域を作成したり、既存の表領域を使用することができます。既存の表領域を使用する場合は、そのサイズの拡張が必要になる場合があります。

注意： Storage Management を使用して、別の表領域を作成、または既存の表領域のサイズを拡張する場合は、Configuration Assistant を終了する必要はありません。

OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の表領域の作成

OEM_REPOSITORY 表領域が作成されていない場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant の「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」ページの「[新規の OEM_REPOSITORY 表領域の作成（推奨）](#)」オプションが有効になります。

OEM_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して OEM_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には適切な属性および特性が定義されます。これを、ユーザーのデフォルト表領域として使用します。

別の表領域の作成

Configuration Assistant を使用して表領域を作成することをお薦めします。この方法を使用すると、サポートされているデータベース内に適切な属性で表領域が作成されるためです。デフォルトの表領域の属性は、データベースのバージョンによって異なります。

Storage Management を使用して新しい表領域を作成する場合は、次の手順に従います。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。

- Windows NT の場合 :

Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。

- UNIX の場合 :

コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。

```
oemapp console
```

「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」が表示されたら、「**スタンドアロンで起動**」オプションを選択し、「OK」をクリックします。スタンドアロン・モードでのコンソールの使用の詳細は、[第2章「スタンドアロン」](#)を参照してください。

2. 「データベース」フォルダを展開します。
3. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
4. 「オブジェクト」メニューから「**作成**」を選択します。「作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「作成」ダイアログ・ボックスのデータベース・ノードを展開し、「表領域」を選択します。次に「**作成**」をクリックします。「表領域の作成」プロパティ・シートが表示されます。
6. 「表領域の作成」プロパティ・シートの「一般」ページで、次のようにします。
 - a. 新しい表領域の名前を入力します。
 - b. 永続的なデータベース・オブジェクトの保持に、表領域が使用されるように指定します。
7. 「データ・ファイル」セクションに、新しいデータ・ファイルのサイズを指定します。「ファイル名」および「ファイル・ディレクトリ」の列には、デフォルトの内容が自動的に設定されます。
8. データ・ファイル名の隣にある記号を右クリックし、「**編集**」を選択します。「データ・ファイルの作成」プロパティ・シートが表示されます。

9. 「データ・ファイルの作成」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、「**フルになった場合に自動的にデータ・ファイルを拡張 (AUTOEXTEND)**」オプションを選択して、データベースでこれ以上の領域が必要になった場合に、サイズが自動的に拡張されるようになります。
10. 「データ・ファイルの作成」プロパティ・シートの「**OK**」をクリックします。
11. 「表領域の作成」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、領域を管理する方法を選択します。ここで指定した方法は、後で変更できます。
12. 「表領域の作成」プロパティ・シートの「**作成**」をクリックします。

既存の表領域のサイズを拡張

Configuration Assistant を使用して表領域を作成することをお薦めします。この方法を使用すると、サポートされているデータベース内に適切な属性で表領域が作成されるためです。デフォルトの表領域の属性は、データベースのバージョンによって異なります。

コンソールの Storage Management 機能を使用して既存の表領域のサイズを拡張するには、次の手順に従います。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。
 - Windows NT の場合 :
Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。
 - UNIX の場合 :
コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。
`oemapp console`

「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」が表示されたら、「**スタンドアロンで起動**」オプションを選択し、「**OK**」をクリックします。スタンドアロン・モードでのコンソールの使用の詳細は、[第2章「スタンドアロン」](#)を参照してください。

2. 「データベース」フォルダを開きます。
3. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
4. 「記憶域」のノードを開きます。
5. 「データ・ファイル」フォルダから、拡張するデータ・ファイルをダブルクリックします。「データ・ファイル」プロパティ・シートの「一般」ページが表示され、データ・ファイルのファイル・サイズを編集できます。
6. 「一般」ページの「**OK**」ボタンをクリックします。

7. 「記憶域」タブをクリックします。「データ・ファイル」プロパティ・シートの「記憶域」ページが表示されます。
8. 「フルになった場合に自動的にデータ・ファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」オプションを選択し、「OK」をクリックします。

リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ

Oracle Management Server は、クライアントおよび管理対象ノードのかわりに作業を行っている場合には、複数のリポジトリ・データベース・セッションをオープンできません。

通常、1 つの Management Server で必要なセッション数は 3 ~ 5 個で、Management Server の負荷によって異なります。次のような状況では、通常以上のリポジトリ・データベースのセッションが必要になります。

- 多数のコンソールがジョブの発行またはイベントの登録を行っている場合
- 複数の Management Server が同じリポジトリを使用している場合
- 多数の Intelligent Agent が Management Server に通知を送信している場合

Enterprise Manager のリポジトリで使用されているデータベースに対して他のアプリケーションもアクセスすると、データベースのセッション負荷が高くなります。

Oracle Enterprise Manager に対するプロセスの設定が低すぎる場合は、`Oracle_OEM_Home/sysman/log` ディレクトリの `oms.log` ファイルに、次のようなエラー・メッセージが示されます。

`can't open a session`

負荷が高くなった場合、またはリポジトリが定義されているデータベースに複数のアプリケーションがアクセスしている場合は、負荷に応じて、データベースの `init.ora` のプロセス・パラメータの値を増やすことが可能です。

Instance Management 機能を使用してデータベースのパラメータを変更するには、次の手順に従います。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。

- Windows NT の場合 :

Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。

- UNIX の場合 :

コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。

`oemapp console`

「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」が表示されたら、「**スタンダロンで起動**」オプションを選択し、「OK」をクリックします。スタンダロン・モードでのコンソールの使用の詳細は、[第2章「スタンダロン」](#)を参照してください。

2. 「データベース」フォルダを開きます。
3. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
4. Instance Management のノードを開きます。
5. 「構成」ノードを選択します。
6. 「構成」プロパティ・シートの「一般」ページで、「すべての初期化パラメータ」を選択します。
7. パラメータの値を変更します。
8. 「すべてのパラメータ」ページで、「別名保存」をクリックします。「初期化パラメータを保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。
9. 完全なディレクトリ・パスとファイル名を入力するか、「参照」をクリックしてローカルのオペレーティング・システムを検索してファイルを検出し、ファイル名を入力します。
10. 「OK」をクリックしてファイルを保存します。

omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更

リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を omsconfig.properties ファイルに保存するように選択した場合に、このファイルに関する許可を変更して、ファイルを参照できるユーザーを制限することができます。

ファイルに関する許可を適切に変更すると、他のユーザーはファイルを参照および変更できなくなります。

注意： omsconfig.properties ファイルに保存されているリポジトリ接続情報では、パスワードは平文ではありません。パスワードが存在する場合は、暗号化されてファイルに保存されています。

UNIX の場合：

ファイルの許可を変更するには、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
$ chmod 600 omsconfig.properties
```

このコマンドによって、ファイルの所有者のみが読み込みおよび書き込みできるようになります。

Windows NT の場合 :

ファイルの許可を変更するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」メニューで「プログラム」>「Windows NT エクスプローラ」を選択します。
2. %ORACLE_HOME%\sysman\config ディレクトリで、omsconfig.properties ファイルを選択します。
3. 選択したファイルでマウスを右クリックし、ポップアップ・メニューの「プロパティ」を選択します。
4. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスの「セキュリティ」タブを選択します。
注意 : この操作は、NTFS ファイル・システムにのみ適用されます。
5. 「セキュリティ」ページの「アクセス権」をクリックして、「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを表示します。デフォルトでは、「Everyone」に「フルコントロール (ALL)」が設定されています。「アクセス権の種類」は「フルコントロール」です。
6. 「削除」をクリックして、このエントリを削除します。
7. 「追加」をクリックして、「ユーザーとグループの追加」ウィンドウを表示します。
8. 「ユーザーの表示」をクリックして、すべてのユーザーを表示します。
9. Management Server を通常どおり起動し、「アクセス権の種類」オプションで Enterprise Manager Configuration Assistant を使用するユーザーを選択し、リストから「フルコントロール」を選択します。
10. 「OK」をクリックして、「ユーザーとグループの追加」ダイアログ・ボックスを閉じます。
11. 「OK」をクリックして「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを閉じます。
12. 「OK」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを閉じます。

複数のユーザー名にアクセス権限を付与できます。

Management Server のトラブルシューティング

この項の項目は、次のとおりです。

- [Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合](#)
- [Management Server が起動されない場合](#)
- [Management Server 起動時のエラー・メッセージ](#)
- [クライアント・アクセス用の Management Server の変更](#)

Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合

UNIX では、環境変数 ORACLE_HOME が、Management Server が稼働している Oracle ホームに設定されていない場合は、Management Server が正しく起動されません。Management Server では、実際の Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームで、クラス・ファイルが検索されます。

csh

環境変数は次のように設定します。

```
setenv ORACLE_HOME '/usr/local/oracle'
```

ksh/sh

環境変数は次のように設定します。

```
ORACLE_HOME = '/usr/local/oracle'
export ORACLE_HOME
```

UNIX システムの場合、Oracle 環境は、coraenv (CSH の場合) または oraenv (その他のシェルの場合) をコールして設定することもできます。このシェル・スクリプトにより、任意の識別子の Oracle 環境を設定します。この識別子は特定のデータベースでも、Management Server ソフトウェアが格納されている ORACLE_HOME を指すものでもかまいません。これらのスクリプトは、特定のマシンやサーバー・ベースの設定を含むようにカスタマイズできます。

coraenv および oraenv スクリプトの詳細は、特定のオペレーティング・システムの Oracle 管理ドキュメントを参照してください。

Management Server が起動されない場合

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、次のリソースを参照してください。

- oms.log ファイル
- oms.nohup ファイル
- Windows NT のイベント・ログ (Windows NT の場合)
- OEMCTL バッチ・ファイル

oms.log ファイル

\$ORACLE_HOME/sysman/log ディレクトリには、ロギングが可能な場合、ディスクにリダイレクトされたトレースの出力が入っています。このディレクトリには、oms.log ファイルと oms.nohup ファイルが含まれています。

Management Server では、すべてのトレース情報が `oms.log` ファイルに配置されます。`oms.log` ファイルには、Management Server の起動時および実行時に生成されるメッセージが含まれています。

Management Server では、トレース・メッセージはすべて Management Server のログ・ファイル (`oms.log.0`、`oms.log.1`、`oms.log.2` など) に格納されます。まず 1 つのログ・ファイルに、それが一杯になると次のファイルに書き込み、最後の 2 ファイルがリサイクルされます。

Management Server のログ・ファイルにはサイズ制限があります。デフォルトでは、Management Server の起動時に、25MB のログ・ファイルしか作成できません。最初のログ・ファイル名は `oms.log.0` です。そのファイルが 25MB の上限に達すると、別のログ・ファイルが作成されます。別のログ・ファイル名は `oms.log.1` です。そのファイルが 25MB 制限に達すると、`oms.log.0` ファイルが削除され、新しいログ・ファイル、`oms.log.2` が作成されます。最後の 2 つのログ・ファイルが保存されます。

重要な注意： Management Server が起動すると、`oms.log.*` という名前のそれまでのログ・ファイルは、すべて自動的に削除されます。

oms.nohup ファイル

`$ORACLE_HOME/sysman/log` ディレクトリ内の `oms.nohup` ファイルには、Management Server の起動前に表示された Management Server のエラー・メッセージと、実行中の重要なメッセージが入っています。

Windows NT のイベント・ログ

Windows NT のイベント・ログにアクセスして、Management Server で記録されたイベントを表示するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー > 「プログラム」 > 「管理ツール（共通）」を選択し、「イベントビューア」項目を選択するか、または `eventvwr.exe` を検索します。
2. 「ログ」メニューの「アプリケーション」を選択します。
3. ログの画面が表示されます。Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer サービスで記録されたイベントの中で、赤い停止記号が示されているものをダブルクリックします。これらのイベントは、Management Server によって報告されたエラーです。

Management Server によりイベント・ビューアに記録されるイベントとイベント番号は、次のとおりです。

イベント番号	メッセージ	意味
101	(<NT OMS サービス名 >) が見つかりません。 次の挿入文字列を含みます:<NT OMS サービス名 >	サービス起動の問題。詳細は、ログ・ファイルおよびトレース・ファイルを参照。
105	サービスが開始されました。	通知メッセージ
108	サービスが停止されました。	通知メッセージ
110	サービスが本番実行モードになります。	通知メッセージ
112	サービスが異常終了しました。	詳細は、oms.log ファイルを参照。
113	致命的なエラー プロセスは異常終了しました	詳細は、ログ・ファイルを参照。

エラーがイベント・ビューアに報告されるのは、Management Server が自発的に停止した場合のみです。

oemctl バッチ・ファイル

oemctl スクリプト内の JRE 起動コマンドを変更すると、デバッグの詳細情報を入手できます。

- Windows の場合

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m
```

を次のように変更します。

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m -verbose
```

- UNIX の場合

```
JRE="jre -native -nojit -mx32m "
```

を次のように変更します。

```
JRE="jre -native -nojit -mx32m -verbose "
```

この手順を実行すると、環境またはインストールの問題が原因で発生したクラス・ロード問題を特定できます。バッチ・ファイルからデータを収集した場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにその情報をお送りください。

注意： Management Server の起動時に問題が発生した場合は、まず、コンソールのトレースをオンにしてください。それでも原因を特定できない場合は、他のトラブルシューティング手順を実行してから、oemctl バッチ・ファイル手順を使用してください。

Management Server 起動時のエラー・メッセージ

Management Server の起動時に次のようなエラーが表示される場合、後述の解決法を参照してください。

Could not start the Oracle<ORACLE_HOME_NAME>ManagementServer service on <HOST NAME>. Error 0203: The system could not find the environment option that was entered.

Management Server はインストールされていますが、構成が完了していません。Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、新規のリポジトリを作成するか、または既存のリポジトリを編集する必要があります。

Windows NT の場合、Enterprise Manager Configuration Assistant は実行されていますが、ユーザーがリポジトリ接続のユーザー名およびパスワードをファイルに保存しないように選択しています（セキュア Management Server モード）。

「Oracle<ORACLE_HOME_NAME>ManagementServer」サービスを選択して「コントロールパネル」の「サービス」内の「スタートアップパラメータ」フィールドにユーザー名とパスワードを入力するか、またはダイアログ・ボックスで要求されたときにリポジトリ接続情報を入力してください。

クライアント・アクセス用の Management Server の変更

複数 Management Server 環境で 1 つの Management Server に障害が発生した場合、影響を受けるのはそのサーバーに接続しているクライアントのみです。各 Management Server は、同じリポジトリに接続されている他の Management Server とは無関係です。

Management Server ノードを、まだ Management Server が稼働している別のノードに変更するには、次の手順に従います。

1. 「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」で、Management Server のリストから、アクセスするリポジトリで構成されている Management Server が定義されているノードを選択します。

リストに、Management Server が稼働しているノード名が表示されない場合は、次の処理を行います。

- a. 「Management Server」をクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- b. アクセスするリポジトリで構成されている Oracle Management Server が稼働しているノード名を入力し、「OK」をクリックします。
 - c. リストから、Oracle Management Server が稼働しているノードを選択します。
2. Web ブラウザ経由で Oracle Enterprise Manager が稼働しているそれぞれのマシンで、`emwebsite.html` のページに戻ってマシン名を変更し、Management Server が稼働しているノードを表すようにします。「Oracle Enterprise Manager コンソール・ログイン」で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

複数のネットワーク・カードを搭載したマシンでの Management Server の実行

複数のネットワーク・カードを搭載したマシンで稼働する Management Server のデフォルト動作は、すべてのネットワーク・カードのリスニングです。Management Server で特定のネットワーク・カードのみをリスニングする場合、次の手順を実行する必要があります。

1. 次のプロパティを `$ORACLE_HOME/sysman/config/omsconfig.properties` に追加します。

```
MULTI_NIC.ENABLED=false
```

2. Management Server がリスニングする必要があるネットワーク・カードの名前を持つように、`$ORACLE_HOME/sysman/config/omsconfig.properties` の `BootHost` プロパティを変更します。

`BootHost=localhost` を `BootHost=<network card host name>` に変更します。

たとえば、複数のネットワーク・カードを搭載できるマシンに 2 つのネットワーク・カードがあり、`host1` および `host2` という名前が付いている場合、`BootHost=host1` を設定すると、Management Server では `host1` をリスニングします。

3. Management Server を再起動します。

ポケットベル・サーバーのトラブルシューティング

ポケットベルの通知が失敗すると、ポケットベル・サーバーでは、あと 3 回ポケットベルの送信を試行します。再試行を行う時間の間隔は、変更できます。デフォルトでは、1 分の間隔で再試行されます。このデフォルト設定を変更するには、Management Server の `ORACLE_HOME/sysman/config` ディレクトリの `OMSConfig.Properties` ファイルを編集します。次のプロパティ

```
OEM.PAGING.RETRYINTERVAL=<integer>
```

を `OMSConfig.Properties` ファイルに追加します。`<integer>` には、再試行の間隔を分単位で指定します。

Web ブラウザのトラブルシューティング

この項では、Web ブラウザのトラブルシューティングについて説明します。

コンソールの停止

Web ブラウザを起動してコンソールにログインしても、コンソールが稼働しない場合は、JInitiator コンソールに次のメッセージが表示されます。

```
@org.omg.CORBA.INITIALIZE[completed=MAYBE, reason=java.net.BindException:  
Cannot assign requested address]
```

次の手順を実行します。

1. JInitiator で、プロキシのブラウザ設定を使用していることを確認します。
 - a. Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」>「JInitiator Control Panel」をクリックします。 ウィンドウが表示されます。
 - b. 「Proxies」タブを選択します。
 - c. 内容を確認します。
2. ブラウザに指定した Web サーバー・アドレスに、@us.oracle.com などのドメイン名を追加します。
3. ブラウザの設定を編集し、そのドメインを「例外」に追加するか、またはブラウザの設定を編集して、「インターネットに直接接続する」を選択します。

コンソールで Web ブラウザが起動しない場合

user.browser が clientconfig.properties ファイルで適切に定義されていない場合、Netscape Navigator は、Enterprise Manager コンソール内から起動しません。かわりに、デフォルトの Enterprise Manager ブラウザが起動します。

レポートがコンソールから表示できない場合、Netscape Navigator では実際のプログラムではなくスクリプトを使用していることが原因です。

UNIX で Netscape Navigator の起動方法を認識するには、次の作業を実行する必要があります。

ClientConfig.properties で次のプロパティを設定します。

```
user.browser=/usr/local/packages/netscape/netscape
```

user.browser をスクリプトではなく、ブラウザの実際の名前に設定する必要があります。

/usr/local/bin/netscape はスクリプトです。 実行可能ファイルではありません。

user.browser がシェル・スクリプトではなく、実行可能ファイルを示すようにする必要があります。

リポジトリ・ユーザーのパスワード変更

リポジトリのパスワードを ALTER USER を使用して変更でき、その後、Configuration Assistant で構成パラメータを編集できます。

1. データベース・ユーザーに対して ALTER USER コマンドを一度実行します。

```
ALTER USER <repository username>
    IDENTIFIED BY <new password>;
```

2. Enterprise Configuration Assistant を実行し、リポジトリを使用している Management Server が稼働している各ホストで一度 Management Server の構成を編集します。3-20 ページの「既存リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成」を参照してください。

パスワードの再設定

自分の SYSMAN パスワードを忘れたために、oem_temp に再設定する場合は、次の指示に従います。

reset_sysman() プロシージャを使用する前に、まず（SQL*Plus を使用して）Management Server リポジトリに接続する必要があります。

1. コマンドラインに次のように入力して、SQL*Plus を起動します。

```
sqlplus
```

2. 接続情報を要求されたら、次のように入力します。

```
<emrepository>/<emrepository-pwd>@<em-repository>
```

すると、データベースに接続します。

たとえば、次のようになります。

```
mynode/mypassword@mynode.world
```

これは、デフォルトのリポジトリ名がホスト名であるためです。

3. 次のように入力します。

```
execute smp_maintenance.reset_sysman();
```

日付書式の設定

Oracle Enterprise Manager コンソールで日付要素を表示する順序を設定するには、次の環境変数を設定する必要があります。

- 年月日の場合、NLS_DATE_FORMAT
mm-dd-yyyy
- 日時の場合、NLS_TIMESTAMP_FORMAT
mm-dd-yyyy hh:mi pm

注意： 設定できるのは要素の表示順序のみであり、表示内容は設定できません。

Windows

環境変数は次のように設定します。

```
set NLS_DATE_FORMAT = mm-dd-yyyy
set NLS_TIMESTAMP_FORMAT = mm-dd-yyyy hh:mi pm
```

UNIX

環境変数は次のように設定します。

```
setenv NLS_DATE_FORMAT mm-dd-yyyy
setenv NLS_TIMESTAMP_FORMAT mm-dd-yyyy hh:mi pm
```

レポート作成のトラブルシューティング

Web サーバーが構成解除されるというエラーが表示された場合

Enterprise Manager Web Site にアクセスしたときに、次のエラーが表示される場合があります。

The management server <hostname> is using a different webserver <hostname> for Enterprise Manager reporting services. This webserver <hostname> will be deconfigured and will no longer support Enterprise Manager reporting. To access Enterprise Manager Reports in the future, please use the webserver <hostname>

このエラーが表示された場合は、次の手順を実行します。

\$ORACLE_HOME/Apache/apache/ディレクトリにある httpd.conf ファイルを編集します。このファイルでは、ServerName プロパティを Enterprise Manager Reporting Web サイト用の Oracle HTTP Server を実行しているマシンのホスト名に設定します。

httpd.conf ファイルの ServerName プロパティは、レポート作成プロパティの Oracle Management Server のホストと同じ名前である必要があります。

空白のページまたは内部サーバーのエラー

Enterprise Manager レポートに Web ブラウザからアクセスしたときに、空白ページまたは次のエラーが表示される場合があります。

Internal Server Error: The server encountered an internal error or misconfiguration and was unable to complete your request. Please contact the server administrator, you@your.address and inform them of the time the error occurred, and anything you might have done that may have caused the error. More information about this error may be available in the server error log

Oracle HTTP Server のログ・ファイルで、次の例外が発生しているかどうかを確認します。

Xlib: Client is not authorized to connect to Server java.lang.NoClassDefFoundError: sun/awt/motif/MToolkit.

Oracle HTTP Server のログ・ファイルは、\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs ディレクトリにあります。

この例外が発生している場合は、次の手順に従って問題を修正します。

1. Web ブラウザからレポートにアクセスした X ウィンドウ・マシンで、`xhost +<host>` コマンドを実行します。たとえば、レポート作成 Web サーバーがホスト servlet1 で実行され、X ウィンドウがホスト xserv1 で実行されている場合は、xserv1 で次のコマンドを実行します。
`xhost +servlet1`
2. レポート作成 Web サーバーが実行されているホストで、X ウィンドウ・マシンの名前で環境変数 DISPLAY を指定します。たとえば、レポート作成 Web サーバーがホスト servlet1 で実行され、X ウィンドウがホスト xserv1 で実行されている場合は、servlet1 で次のコマンドを実行します。
 - コマンド・シェルが C シェルの場合: `setenv DISPLAY xserv1:0.0`
 - コマンド・シェルが B シェルまたは K シェルの場合: `DISPLAY=xwerv1:0.0; export DISPLAY`
3. X ウィンドウ環境が正しく構成されていることを確認します。たとえば、`xclock` コマンドを実行します。X サーバー（レポート作成 Web サーバーなど）で `xclock` ウィンドウが表示されれば、X ウィンドウ環境は正しく構成されています。
4. コマンド `apachectl restart` を使用して、Oracle HTTP Server を再起動します。

G

キーボード・ナビゲーション

Oracle Enterprise Manager では、標準のキーボード・ナビゲーションをサポートしています。標準のキーボード・ナビゲーションには、[Tab] キー、ニー モニック ([Alt] キーとアンダーライン付きの文字)、およびショートカット・キー（ウィンドウを閉じる際の [Alt]+[F4] など）の使用が含まれます。

次の表には、一般的に知られていなかったり、標準的ではないキーボード操作を記載しています。

キーボード操作	結果
[F10]、[Space]	ウィンドウまたはダイアログ・ボックスのシステム・メニューを表示。
選択したツリー項目や表項目にフォーカスを当てた状態で [Shift]+[F10]	選択した項目のポップアップ・メニューを表示。
表内の編集フィールドにフォーカスを当てた状態で新規の値を入力し、[Enter]	新規の値が確定され、フォーカスが表の次の行に移動。
表内のドロップダウン・リストにフォーカスを当て、[Space]	ドロップダウン・リストがオープンしている状態とクローズしている状態の切替え。

ピクチャ・ボタンのショートカット・キーは、ボタンが表示されるダイアログ・ボックスやウィンドウのヘルプに記載されています。

H

リポジトリ・ビューの追加情報

この付録では、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』には記載されていないリポジトリ・ビューまたは間違って記載されているリポジトリ・ビューについて説明します。

操作システム・メトリック

SMP_VIEW_RUNNING_OMS_MACHINES

現在リポジトリに接続されているすべての Management Server を表示します。このリージョンのすべての Management Server をこのビューに表示するには、すべての Management Server を起動して実行しておく必要があります。

表 H-1 SMP_VIEW_RUNNING_OMS_MACHINES

列	説明
OMS_MACHINE	ネットワークで認識されているマシンの名前。これは、ネットワーク・プロトコルで解決済の、Management Server マシンの標準名です。
REGION	リージョンの名前。
LAST_CHECKED	この Management Server の最終ハートビートのタイムスタンプ。Management Server マシンの時間帯が使用されます。

SMP_VIEW_REGIONS

付属する Management Server や Intelligent Agent など、各リージョンの関連情報とともに、すべてのリージョンを表示します。

表 H-2 SMP_VIEW_REGIONS

列	説明
REGION_NAME	リージョンの名前。
OMS_MACHINE	マシンの名前。
NODE_NAME	エージェントの名前。
UPDOWN	エージェントの現行のステータス。
LAST_CHECKED	この Management Server の最終ハートビートのタイムスタンプ。Management Server が実行されているマシンの時間帯が使用されます。

ジョブ定義ビュー

SMP_VIEW_JOB_NOTIFICATIONS

特定のジョブの実行時に通知されるすべての管理者を表示します。

表 H-3 SMP_VIEW_JOB_NOTIFICATIONS

列	説明
JOB_ID	このジョブの一意識別子。ジョブは異なる時間に送信できるため（同一のジョブは複数回作成できるため）、job_name ではリポジトリのジョブを一意に識別できません。そのため、ジョブの情報を取得するためのすべての問合せには、JOB_ID 識別子を使用する必要があります。
JOB_NAME	ジョブの名前。JOB_NAME は、管理者が入力したジョブの名前です。
ADMINISTRATOR_NAME	通知される管理者の名前。
TARGET_NAME	ジョブがトリガーされたサービスの名前。
TARGET_TYPE	ターゲットのジョブのタイプ。
TARGET_NLS_TYPE	ターゲットの NLS のタイプ。

イベント定義ビュー

SMP_VIEW_EVENT_NOTIFICATIONS

特定のイベントについて通知されるすべての管理者を表示します。

表 H-4 SMP_VIEW_EVENTS

列	説明
EVENT_ID	イベントの一意識別子。イベントは異なる時間に登録および再登録できるため（同一のイベントは複数のターゲットに対して登録できるため）、EVENT_NAME ではリポジトリのイベントを一意に識別できません。そのため、イベントの情報を取得するためのすべての問合せには、EVENT_ID 識別子を使用する必要があります。
EVENT_NAME	イベントの名前。

表 H-4 SMP_VIEW_EVENTS (続き)

列	説明
ADMINISTRATOR_NAME	通知される管理者の名前。
TARGET_NAME	イベントがトリガーされたサービスの名前。
TARGET_TYPE	ターゲットのイベントのタイプ。
TARGET_NLS_TYPE	ターゲットの NLS のタイプ。

索引

A

Administrators グループ, 4-9
Apache Web サーバー, 5-7

C

ClientConfig.properties, B-2

E

emwebsite.html, 5-5
Enterprise Manager Configuration Assistant
「Configuration Assistant の進行」ウィンドウ, 3-19
Oracle Management Server の構成, 3-6, 3-22
SID の変更, 3-11
アップグレードのためのリポジトリの選択, 3-29
エラー, F-3
管理リージョンの選択, 3-23
既存のリポジトリを管理するように Management
Server を設定, 3-21
起動, 3-2
構成操作, 3-4, 3-22, 3-28
構成パラメータ・サマリー, 3-26
構成パラメータの編集, 3-22
新規リポジトリ作成オプション, 3-6
データベースの場所の選択, 3-9
トラブルシューティング, F-3
別のリポジトリを使用するように Management
Server 構成を変更, 3-21
編集または作成ダイアログ・ボックス, 3-6
「ようこそ」ページ, 3-4
リポジトリ更新の「Configuration Assistant の進
行」, 3-30
リポジトリ更新のサマリー, 3-30

リポジトリ作成のサマリー, 3-19

リポジトリにログインするために Management
Server で使用するパスワードを変更, 3-21

リポジトリのアップグレード, 3-29

リポジトリの削除, 3-30

リポジトリのデータベースの選択, 3-12, 3-29

リポジトリへのログイン情報, 3-13, 3-29

リポジトリ・ユーザー表領域の選択, 3-15

Enterprise Manager Web Site, 4-21

Enterprise Manager のレポート作成システム, 4-21

F

FLEXTD, 4-13

G

Global System for Mobile Communications, 4-13

H

host (マシン名), 3-12

I

Internet Information Server (IIS), 5-8

J

Java のデバッグ, B-4

L

LOGGING.DIR, B-5

LOGGING.ENABLED, B-3, B-5

LOGGING.FILENAME, B-5
LOGGING.MAX_FILE_CNT, B-5
LOGGING.MAX_SIZE, B-5
LOGGING.SAVE_PREVIOUS_LOG, B-6
LogMiner Viewer、使用, 4-27

M

Management Server, 1-4
既存リポジトリの構成, 3-20, 3-21
起動, 3-33
クライアント・アクセス用の変更, F-14
新規リポジトリの構成, 3-3
ステータスのチェック, 3-35, 3-36
接続のダイアルアップ回線, 4-24
停止, 3-37
トラブルシューティング, F-10
別のリポジトリを使用するように変更, 3-21
リポジトリにログインするために使用するパスワー
ドを変更, 3-21
ログ・ファイル
ディスク領域の制御, B-6
Management Server 再試行間隔, 6-3
「Management Server」ダイアログ・ボックス, 4-4
Management Server と接続するコンソール
管理者アカウントの作成, 4-7
起動, 4-3
ジョブ・システムの有効化, 4-9
選択理由, 4-2
電子メール・サーバーの構成, 4-12
ネットワークのノードおよびマシンの検出, 4-5
ポケットベル・サーバーの構成および起動, 4-12
Management Server のバージョン, 3-36

N

Number of administrators logged in, 3-36
Number of OMS systems in domain, 3-36

O

OEM_MONITOR ロール, 4-8
OEM_REPOSITORY 表領域, 3-15, 3-18, F-5
oem_webstage ディレクトリ, 4-21, 5-2
oemapp console oem.loginmode=oms コマンド, 4-4
oemapp console oem.loginmode=standalone コマンド,
2-4

oemctl configure rws, 4-23
oemctl ping oms コマンド, 3-35
oemctl start oms コマンド, 3-35
oemctl status oms コマンド, 3-35, 3-36
oemctl stop oms コマンド, 3-37
oemctl パッチ・ファイル, B-2, F-13
OMSCONFIG.PROPERTIES, B-4
omsconfig.properties ファイル, 3-26, F-9
oms.log ファイル, F-11
oms.nohup ファイル, B-6, F-11
oms.repository.connect_numTries, 6-3
oms.repository.connect_timeout, 6-3
oms.vdg.conn_retries, 6-4
oms.vdg.conn_retries_delay, 6-4
oms.vdg.max_in_conns, 6-3
oms.vdg.max_out_conns, 6-2
oms.vdp.ping_interval, 6-2
Operations queued for processing, 3-36
Oracle, 6-1
Oracle Change Management Pack, 1-3
Oracle Diagnostics Pack, 1-3, 5-1
Oracle Enterprise Manager
Management Server, 3-33, 3-35, 3-36, 3-37
アーキテクチャ, 1-2
第1層のセントラル・コンソール, 1-3
第2層の集中化した、スケーラブルで信頼性の
ある Oracle Management Server, 1-4
第3層の管理対象ターゲットおよび自律型
Intelligent Agent, 1-4
システムおよびハードウェアの要件, 1-11
Oracle Enterprise Manager 製品のアップグレード, 調
整, 3-27
Oracle HTTP Server, 4-21, 5-3
Oracle Management Pack for Oracle Applications, 1-3
Oracle Management Pack for SAP R/3, 1-3
Oracle Management Server ホスト名, 4-23
Oracle Standard Management Pack, 1-3
Oracle Tuning Pack, 1-3, 5-1
ORACLE_OEM_CLIENTTRACE, B-3
Oracle9i Application Server, 5-9

P

paging.cfg, B-10
paging.cfg.template, B-10
Ping Interval, 6-2

R

Reporting Web サイトの URL, 4-23
REPORTS_USER, 4-23
REPORTS_USER 管理者, 4-21
Repository session count, 3-36
Repository session pool depth, 3-36

S

SELECT_CATALOG_ROLE ロール, 4-8
SID (データベース・システム ID), 3-33
SMP_VIEW_EVENT_NOTIFICATIONS, H-3
SMP_VIEW_JOB_NOTIFICATIONS, H-3
SMP_VIEW_REGIONS, H-2
SMP_VIEW_RUNNING_OMS_MACHINES, H-2
SQL エンジンのトレース, B-11
SYSMAN パスワードの再設定, F-17

T

Target database session count, 3-36
Telocator Alphanumeric Protocol, 4-12
TRACEFILENAME, B-11
TRACING.ENABLED, B-3, B-6, B-11
TRACING.LEVEL, B-3, B-6, B-11

V

VDB_DEBUG, B-12
VDB_SESSION_DEBUG, B-12
VDB_VERBOSE_DEBUG, B-12
VDB_VERBOSE_SESSION_DEBUG, B-12

W

Web サーバーおよび Web サイトのディレクトリ・マッピング, 5-7
Web サーバー・ポート番号, 4-23
Web サーバー・ホスト名, 4-23
Web ブラウザ
 サポート, 5-2
 トラブルシューティング, F-16
Web ブラウザからのコンソール, 5-1
Windows 2000 での Enterprise Manager、使用, E-1
Windows 2000 のサービス, E-2
Windows NT のイベント・ログ, F-11

Windows でのシステム色, 4-25

Windows ユーザー・アカウント
 権限の割当て, 4-10

X

xclock コマンド, 4-23

あ

アクセス可能性
 キーボード操作, G-1

い

一時的なネットワーク障害、回避, 6-3
イベント定義ビュー, H-3

お

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告, F-2

か

カスタムのリポジトリ作成オプション, 3-9
管理アプリケーション、統合, 1-3, 5-2
管理者
 REPORTS_USER, 4-7, 4-21
 スーパー, 4-7
 通常, 4-7
 管理リージョン, 3-23

き

キーボード・ナビゲーション, G-1, H-1
記憶域要件とディスクの領域割当てを決定するためのガイドライン, C-1
起動
 Enterprise Manager Configuration Assistant, 3-2
 Management Server, 3-33
 Management Server と接続するコンソール, 4-3
 Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager, 5-1
 Web ブラウザからのコンソール, 5-1

く

グローバリゼーション・サポート, D-1

け

言語およびNLS_LANG パラメータの設定, D-2
検出ウィザード, 4-5

こ

構成

Enterprise Manager を実行する Web ブラウザ, 5-5, 5-10
Management Server のリポジトリ・サーバーとの再接続の試行, 6-3
Web サーバーとディレクトリ・マッピング (oem_webstage)
Apache Web サーバー, 5-7
Internet Information Server (IIS), 5-8
Oracle9i Application Server, 5-9
X ウィンドウ環境, 4-23
ダイアルアップ回線用コンソール, 4-24
電子メール・サーバー, 4-12
ドメイン・ユーザー, 4-11
ポート 8099 でのレポート, 4-24
ポケットベル・サーバー, 4-13, 4-18
ローカル Management Server
既存リポジトリ, 3-20
新規リポジトリ, 3-3
コンソール, 1-3

さ

サービス可用性レポート, 4-24
最大着信接続数, 6-2
最大発信接続数, 6-2
作成
OEM_REPOSITORY 表領域, 3-18, F-5
エンタープライズ・リポジトリ, 3-3
新規 Windows ユーザー・アカウント, 4-10
スタンドアロン・リポジトリ, 2-9
スタンドアロン・リポジトリのデータベース・ユーザー, 2-11
スタンドアロン・リポジトリの表領域, 2-9
「バッチジョブとしてログオン」権限を持つユーザー, 4-10, 4-11

し

ジョブ・システム, 有効化, 4-9
ジョブ定義ビュー, H-3

す

スーパー管理者, 4-7
スタンドアロン・モードのコンソール
起動, 2-3
選択理由, 2-2
ツリーへのデータベースの追加, 2-5
リポジトリ, 2-6
ステータスのチェック
Management Server, 3-35, 3-36
エージェント, H-2
監視対象システム, 4-21
ノードの稼働 / ノードの停止, 6-2
ノードの検出, 4-6

せ

設定
ORACLE_HOME 環境変数, 3-35, F-11
Windows ドメイン・ユーザー, 4-11

そ

操作システム・メトリック, H-2

た

「ターゲットへのアクセス」ページ, 4-7
ダイアルアップ回線, 構成, 4-24

つ

通常の管理者, 4-7
通常のリポジトリ作成オプション, 3-6

て

停止
Management Server, 3-37
Oracle HTTP Server, 5-3
データベース管理、領域へのアクセスのカスタマイズ, 4-26

データベース・リスナー・ポート・アドレス, 3-13
電子メール・サーバー, 構成, 4-12
電子メールの作業環境, 4-13
電子メールのフィルタとポケットベルのフィルタ,
4-15

と

ドキュメント、構成ガイドと関連, x
トラブルシューティング
Enterprise Manager Configuration Assistant, F-3
Management Server, F-10
ping 間隔の設定, 6-2
Windows の「スタート」メニューから起動され
ない場合, F-11
エラー・メッセージ, F-14
クライアント・アクセス用の変更, F-14
デフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行
できない場合, F-11
omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更,
F-9
SYSMAN パスワードの再設定, F-17
Web ブラウザ, F-16
オラクル社カスタマ・サポート・センター, 情報提
供, F-2
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題
の報告, F-2
コンソールで Web ブラウザが起動しない場合,
F-16
コンソールの停止, F-16
ポケットベル・サーバー, F-15
リポジトリ操作のデータベース・パラメータ, F-8
リポジトリ・データベースのデフォルト表領域,
F-5
トレース
SQL エンジン, B-11
ポケットベル・サーバー, B-10

の

ノード, ネットワークでの検出, 4-5

は

配置オプション, 1-5
3 層配置, 1-7
クライアント / サーバー配置, 1-6

パスワード
SYSMAN, F-17
パスワードの再設定, F-17
パスワード, リポジトリ・ユーザー, F-17
バッチ ジョブとしてログオン, 4-9
「バッチ ジョブとしてログオン」権限, 4-10, 4-11

ひ

日付, 書式の設定, F-17
表記規則、このマニュアルで使用, xi
表領域
OEM_REPOSITORY, 3-15
ROLLBACK, 3-16
SYSTEM, 3-16
TEMPORARY, 3-16
既存のサイズを拡張, F-7
作成, F-6

ふ

ファイル
access_log, B-7
ClientConfig.properties, 4-25, B-2
error_log, B-7
jserv.properties, B-8
oem.conf, 5-9
OEMClient.properties, 4-26
oemctl バッチ, B-2, F-13
OMSCONFIG.PROPERTIES, B-4, B-7
oem.conf, 4-23, D-4
omsconfig.properties, 3-2, 6-1, F-9
oms.log, F-11
oms.nohup, B-6, F-11
paging.cfg, B-10
paging.cfg.template, B-10
tnsnames.ora, 2-5
アーカイブ REDO ログ, 4-27
初期化パラメータ, 3-11

ほ

ポケットベル・サーバー
構成および起動, 4-12
トラブルシューティング, F-15
トレース, B-10
TRACEFILENAME, B-11

TRACING.ENABLED, B-11
TRACING.LEVEL, B-11
ポケットベル・サーバー、追加, 4-19
ポケットベル・サーバーのトレース, B-10
ポケットベル・サーバーを使用するポケットベル,
4-16
ポケットベル通知の作業環境, 指定, 4-21
ポケットベルの作業環境, 4-14
ポケットベルのスケジュール, 4-15

リ

リポジトリ
既存の構成の作成または編集, 3-5
サイズ設定, C-1
 Oracle Change Management Pack, C-3
 Oracle Diagnostics Pack, C-2
 Oracle Enterprise Manager コンソールと DBA
 Management Pack, C-2
 Oracle Management Pack for Oracle
 Applications, C-3
 Oracle Management Pack for SAP R/3, C-3
 Oracle Standard Management Pack, C-4
 Oracle Tuning Pack, C-2
削除, 3-30
バックアップ, 3-27
リリース 2.x からリリース 9.2 またはリリース 9.0 か
らリリース 9.2 へのアップグレード, 3-26

リポジトリ, スタンドアロン
 データベース・ユーザーの作成, 2-11
 データベース要件, 2-8
 表領域の作成, 2-9
リポジトリ接続情報, 保存, 3-14
リポジトリ・ビューの追加情報, H-1
リポジトリ・ユーザーのパスワード, 変更, F-17
リポジトリ・ユーザー・パスワード, 3-8
リポジトリ・ユーザー表領域の選択
 OEM_REPOSITORY が存在しない場合, 3-18
 OEM_REPOSITORY が存在する場合, 3-17

レ

レポート作成, 構成, 4-21

ロ

ロギングおよびトレース
 Intelligent Agent, B-9
 JServ, B-8
 Management Pack アプリケーション, B-12
 Management Server, B-4
 Oracle HTTP Server, B-7
 SQL エンジン, B-11
 イベント・ハンドラ, B-6
 クライアント・アプリケーション, B-2
動的 Web サイト, B-7